
幻夢の夜にネズミは踊る。

ぶっきら忘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢の夜にネズミは踊る。

【Nコード】

N0353P

【作者名】

ぶっきら忘

【あらすじ】

「実際、殺人鬼なんて誰でもいいんだと思うよ」

悪魔に呼び出され、閉じ込められた深夜の学校。沈黙の中、彼はポツリとそう呟いた……

姿も見せずに悪魔は笑う。これは悪魔のゲーム。誰も生きては返さない。

深夜、誰もいない学校にいつの間にか呼ばれていた四人の生徒は、あまりにも突然そのゲームに巻き込まれた。自分が殺される前に、学校にいる殺人鬼を推理するか、自殺すれば勝ち。それまでに殺さ

れてしまったら自分の負け。

1人の変人と一人の少女、一組のカップルと一つの自殺体。殺人鬼は、誰なのか……

悪魔が生み出した夜は、そうして狂気へと加速する――

プロローグ

カチ、コチ、カチ、コチ、カチ、コチ、カチ……

もはや時代錯誤以外の何物でもない振り子時計が奏でる音色に、彼は小さく首をかしげた。明かり一つない暗闇に、秒を刻む音が飲まれて消えていく。

誰も見ることでできない時計は、時計として意味があるのだろうか。ないのかもしれない。あるのかもしれない。どちらにしろ、その音は嫌というほど耳に残った。

「……まあ、静か過ぎるんだから、仕方ないんだろうけどさ」

辺り一面闇。一センチ先さえ見えない闇の中で、彼はポツリと呟いた。闇は静寂を内包する。故に、静まり返った闇の中ではその音こそが世界の全てだった。音しか存在しない。もしかしたら、自分も存在していないのかもしれない。

それはありえないことだったが。

「寝てたはずなんだけどなあ……家で」

目覚めた瞬間、その世界に放り出されたのだ。まだ一分も経っていない。その間で理解したのは、闇の中に振り子時計の音が響いていることだけだった。聞き慣れた音でもある。

彼は曖昧な記憶を探りつつ、その間にポケットをまさぐった。自分の部屋で寝ていたはずなのに、知らない場所にいる。記憶が繋がらない。

ため息と同時に、彼はポケットから携帯を取り出した——たぶん。というのも、見えなければそれが携帯なのか確かめようがなかったからだ。間違えて最近買ったアイポッドを取り出しても、たぶんしばらくは気づかない。まあ、闇とはつまり、その程度には面倒なものだった。

「……だからって、暗すぎなんだよ」

闇について考えるのを放棄して、彼は小さくため息を吐く。そし

て携帯を開いた。淡い光が辺りを照らす。見えたのは、なにやら部屋の四分の一を占領している放送機材と、十六分の一を分捕っている、見慣れた振り子時計だった。

やっぱり、というべきなのかもしれない。そこは見慣れた部屋だった。思わず呟く。

「……放送室だ」

高校の。学校なら確実にある、一般的な放送室である。放送委員なのだから、そこは見慣れてて当然のことだった。まあ、そんなことなどどうでもいい。

問題は何故か電波が圏外なことだった。いくら防音設備に力を入れすぎた感のある放送室だからって、電波の侵略まで防げるわけではない。それは異常なことだった——壁に穴でも開いているのか、時々外に時計の音が漏れているらしいが。

とまれ、実は携帯が壊れてるだけなのかもしれない。表示がおかしくなった可能性がある。期待せずに、彼は適当な手つきで自宅の電話番号を押した。耳にあて、しばらく待つ。

繋がらない。

「……………だよねー」

圏外はやっぱり圏外だった。どうやら、防音設備が電波に勝ってしまったらしい。もしくは、気絶——ここで寝ることはないだろう——している間に、大規模な地震でも起こったか。ありえなくはない話……でもなかった。それならまずこの放送室が潰れてる。潰れてなくても、並べられて放置されている撮影機材が倒れているはずだ。地震ではない。

なら何があるだろうか。何もありえそうだったから、彼はそこで考えるのをやめた。

天井を見上げる。どんなに高く見積もっても高さは二メートル半……のはずだったが、天井は闇に飲まれて文字通り天井知らずに化けていた。携帯を上に向けると、かろうじて灰色の天井が見えるようになる。やっぱり見慣れた放送室だった。そしてこれまたやっぱ

り、記憶に異常が発生している。

ふと気になって、彼は時計に目をやった。振り子時計である。何のために、どうやって、誰が持ち込んだのか不明の、まさに謎の時計である。大きなのっぽの古時計の、多分後輩。カチコチやかましく鳴り続ける仕事熱心さは、正直羨ましいものではあった。が、だからといって懂れたりはいらない。

人間には休息が必要なのだ。時計とは違う。壊れるまで働き続けて死因が過労死以外にありえない生き様なんてのは、まったくもってお断りだった。

死。

さっきは考えないようにしていたが、なかなか切実な問題であるような気がする。さっきまでは、確かに自分は死んでいた。闇の中で何も確認できなかったのだ。それはつまり、死んでいたといっても過言ではない。人間なんて簡単に死ねるのだ。人生を再開しなければならぬかどうか。それは心臓と脳次第だったりするが。

どちらにしろ、あまりにも遅すぎることを自覚しながらも、彼はそれを確認した。辺りに、人の気配はない。

「……脱線したねえ」

そんなことなどどうでもいい。時計である。時計。おそらくきつと、或いはたぶん。今となってはもはや曖昧だったが、自分はおそらく時間が知リたかったのだ。そのため以外に時計を見る理由はない。改めて彼は時計を淡い光で照らした。十二時五十九分。夜なら丑三つ時、一分前。どうせ午後だ。異常はない。携帯を見る。AMの表示。異常はない……と言えたら、おそらくきつと、たぶん幸せになれた。

夜一時、一分前。見事に深夜である。この時間帯まで学校にいたことは今まで一度たりとてない。肝試しだって七時か八時である。馬鹿馬鹿しいくらい、非現実的な時間だった。

天井を見上げて、黙考する。結論。誘拐されたっぽい。とりあえず、諦観のため息を吐いて。彼は心の底から呻くことにした。

「……どうにもなあ」

誰に誘拐されたのか。何故放送室に監禁——或いは軟禁——されているのか。いろいろと考えなければいけないことばかり盛りたくさんだったりもしたが。

とりあえず、彼は時計を睨みつけることにした。のっぽの古時計は百年稼動した。百年。猫に二つ目の尻尾が生えるくらいの時間である。繰り返すが、百年。なら、無機物に魂が宿っても問題はない気がする。いや、たぶん十年かそこで魂くらいは宿るのだ。そして二十年後には足が生え、三十年後には口が……まあ、どうでもいい。

とりあえずの問題は、時計は人を呪えるかということだった。呪えるのなら、万事解決だ。自分は時計に誘拐された。それでいいじゃないか。真実はいつも一つなのではない。真実は一人一つなのだ。——ごおん、ごおん、ごおん、ごおん……

なんて馬鹿馬鹿しいことを考えている間に、丑の刻が始まりを告げる。

その音は、或いは人類と時計の魂の尊厳をかけた戦いの始まりを告げたのかもしれない。時計は本当に動くのか。気になるところではあったが。

「とりあえずは……いろんなことでも考えよう。状況を把握するためにも」

考えるバカは考える故にバカなのである。自分のことだ。そう意味もなくごちて。

彼は、放送室から出て行った。

やっぱり廊下も闇だった。

1 集まったネズミたち。

「……………ち。やっぱダメか」

もともと期待なんてしていなかった。それでも自然と舌打ちしていたことに、柳は顔をしかめた。そもそも、圏外の時点で電話をかける意味などなかったのだ。電波が来ていないことなど一目見ればわかる。通じない携帯を握り締めて、一人ごちる。ダメな時はとことんダメなのだ。いろいろと。人生そんなもんだった。

暗鬱にため息を吐いて、彼は辺りを携帯で照らした。立ち並ぶ下駄箱。靴も上履きも入っていない。闇ばかりでほとんど先の見えないう廊下。闇しかなくて、外の見えないガラス扉。そちらのほうへと、柳は声をかけた。

「そっちはどうだい？」

「ダメ。やっぱ開かない」

答える声が一つ。感情を殺しているのか平坦な声だったが、ところどころに苛立ちのようなものが浮かんでいる。聞き慣れた声は、ガラス扉のほうからゆっくりこちらへと近づいてきていた。闇の中から、声の主の輪郭が現れる。小柄童顔、短い髪。眉間には小じわ。青白い光に照らされたその顔は、どこことなく幽霊のように見えた。

その幼馴染、若菜は今度こそ不満を爆発させて叫んでいた。

「寒いし暗いし眠いし静かだし……何で学校にいるのかわからないし、その上出られないし。あーもー！ 何だっつのよー！」

「……俺が聞きてえよ」

とりあえず呻いて、彼はもう一度だけ辺りを見回した。やっぱ何も変わらない——高校の、生徒昇降口だ。それ以外の何物でもない。見間違えるはずはない。

問題は、何故ここにいるのかということだった。携帯は午前二時を示している。こんな時間まで学校にいないければならない理由もないし、そもそも自分は家で寝ていたはずなのだ。それが起きたらい

つの間にか学校で、しかも学生服を着ている。わけがわからない。
だが本当の問題はそんなことではないのかもしれない。ため息を吐いて、柳はガラス扉に近づいた。そして携帯をかざす――だが、玄関の外は何も見えない。全てが闇に飲まれたまま。

「……何なんだかな」

もしかしたら、学校の外にはもう何も存在していないのではないか。そう思えるほど、何も見えなかった。外に出れない学校と、闇しか見えない外。どっちが本当にな安全なのかと問われれば、素直に首を捻るしかなかったが。

馬鹿馬鹿しいとは理解しながらも、柳はぼやいていた。

「電気もつかない、電波も来ない。そのうえ外に出ることができない……それだけで終わってくれればいいんだけどな」

「……？ 何が？」

問いかけの声。本当に理解していないのか、若菜はキョトンとしていた。それが若干羨ましく思える。考えなければよかった。

「こういうわけのわからない状況だと、決まって何か変なものが出てくるんだよ」

「変なもの？」

「悪霊とか、殺人鬼とか」

悪霊はないかもしれない。だが、いかにも殺人鬼ならありえそうだった。人知れず若い人間を誘拐し、何らかの技術で――この際魔法でもいい。説明がつかならば――軟禁し、少しずつ少しずつ翳るように恐怖を与えて。そして最後に殺すのだ。簡単にその光景が想像できてしまう。

が、若菜は若菜で顔をしかめて呆れるだけだった。

「ネガティブねー」

「どこをどう見て樂觀視しろっつーんだ」

実際、何をとってもマイナス要素しか出てこない。それに気づいたのか、或いは考えなくなかったのか。若菜は険しい表情で『それもそうね』と同意してくる。その反応に満足してから、柳は歩き出

した。携帯で足元を照らして、ゆっくりと歩いていく。

「どこ行くの？」

「掃除ロッカー。モップでも箒でも何でもいい。とりあえず、武器が欲しい」

「……本格的にホラーねー」

皮肉のつもりだったのだろうか。まったく笑えない。だから反応せず、歩き続ける。闇の中だったせいか、掃除ロッカーにたどり着くのでさえ時間がかかった。取っ手を引っ張って、中からウェットモップと箒を取り出す。モップの先端を外しながら、柳は背後に問いかけた。

「お前、どっち使う？」

「……え？ アタシもなの？」

「当然だろ？」

こうも暗いのでは、自分の身は自分で守るしかない。ナイトを気取って若菜を危険に晒すよりは、そちらのほうが有効的だと思えた。が、若菜にとってはそうでもなかったらしい。

「……てかさ、そもそもそれ、必要あるの？ ここ、学校だし。危険なんてあるとも思えないし」

もっともな質問ではあったのかもしれない。確かに、必要なってないのかもしれない。こんなものを武器として、何を相手にするつもりだったのだろう。実際に殺人鬼がいるとも思えない。確かに馬鹿馬鹿しい話ではある。百八十度思考を巡回させてから、もう一度回す。結局、学校だからという理由は危険でない証明にはならないのだ。

殺人鬼。さっき考えた事をもう一度だけ繰り返す。学校。闇。その中に潜む鬼。偏執的に矜ることだけを目的としている。恐怖の限界で、殺しに来る……そこで一つ、ため息を吐いた。

「備えあれば憂いなし……まあ、そんなもんだろ」

「えー。あたしは持ってかないわよ？」

「……まあ、いいけどな」

モップの先端を外し終える。モップが棒に成り代わったところで、柳はまたため息を吐いた。これから何をするべきなのか。若菜もそれを考えているのか、黙り込んでいる。

結局思いついたのは、柳のほうが先だった。

「とりあえず人でも探すか。もしかしたら、この異常事態を説明してくれるかもしれない」

「異常事態って言うわりに、暢気よね」

「そんなもんだろ」

いくらなんでも、状況に取り残され過ぎている。何故かここにて、誰もいない。何もわからないのに慌てるといわれても、それは無理な話だった。これで明確な危険とかが示されているのであれば、焦るくらいはするのだろうか。

「まあ、行こうぜ？」

「……いるの？ 人。なんか、すんごい静かなんだけど」

「お前がいたんだし、誰かいるだろ」

特に考えもせず、適当に告げる。若菜はなお首を捻っていた。が、納得するしかなかったのか、『それもそうね』と呟いてくる……が。

何か思いついたところがあつたのか、若菜はもう一度首を捻っていた。

「……遭難したときって、動き回っちゃいけないんじゃないかったっけ？」

「……………これを遭難って言うか？」

「だって、迷子だし……道にじゃなくて状況に、だけどさ」

大して面白くもなさそうに、若菜は呟く。言い得て妙だと思った。状況に迷子。そのせいで目的に遭難している。確かに、間違いない。

だが、止まっていれば何かが変わると思えないのもまた事実だった。

「とにかくにも、人を捜そう。話はそれからだ……上からしらみ

つぶしに行こうぜ」

そう言って歩き出す。足音は、闇の中で不気味に反響した。若菜の声も、不気味に反響していた。

「……これで誰もいなかったらどうなるのかな、あたしたち」

「……寒い」

意味のない呟きに、顔をしかめる。もともとそんなことなどわかっていた。それでも呟いたのは、そうすれば何かが変わると思っていたからなのかもしれない。現実は無常にも、何も変化しなかったが。どちらにしろ、橙香は呟いたことを後悔した。

小さな呟きだったのに、闇の中で何度も何度も反響する。最終的にはそれはぼやけた声になり、それはあたかも自分の声ではなかったような錯覚を呼んだ。

自分の声でなければ誰が呟いたというのだ——思い浮かんだ答えを、橙香は慌てて振り払う。それは余計に寒さを感じさせかねないものだった。だが、一度浮かんでしまった答えを消すことはできない。

誰かいるのではないか。この闇に、何か良からぬものが。

それはまったく面白くない発想だった。この闇の中に潜んでいる。ホラー映画も顔負けだ。この闇は、きっと殺人鬼や悪霊のような、悪意の塊でしかないものが潜んでいる。それはきつと、最後には——数分後かもしれない——自分を殺すのだ。

本当に、最低だった。夢なら更に最低だった。あまりにも、現実味を帯びすぎている。

足音もまた最低でしかなかった。明かりのない闇の中に一歩踏み出すと、たちまち闇が足音を増やす。やはり、自分の足音ではないもののように。そして最後には無音。まるで、闇は橙香を嘲笑うように存在しているようだった。

気持ち悪い。闇に体中を舐めまわされている。それは最低を超え

て、最悪の蹂躪だった。肌に纏わりつく寒さが、何度も何度も蹂躪を繰り返しては冷や汗を誘う。増える足音が、鼓膜を何度も何度も振るわせる。最低の想像ばかりが、頭の中に再生される……

（……闇は、嫌い）

声には出さずに、嘆息する。仕方のないこと……と言えるほど、それを達観することはできなかったが。それでも繰り返す——闇は、嫌い。

何も見えない、本当の闇。明かりがない。だから廊下でさえも真の闇に包まれている。何も見えない。音だけの世界だ。しかも、その音に方向は存在しない。当然だ、闇の時点で方向などないのだから。自分の足元から発生したはずの足音。なのに、全方位から聞こえてくる。そのくせ音源はいつも一つだ。自分の足音に、自分は怯えている。

そもそも何故闇の中を歩かねばならないのだ。壁伝いに歩いてきた足を止めて、橙香は深くため息を吐いた。どこに行けばいいのかも、何をすればいいのかもわからない。ただ何故か、闇の中にいた。それだけの理由で歩かされている。

誰に？ 自分以外に誰もいない。それは理不尽なことだった。第三者が勝手に何かやったのに、そのとばっちりを受けているのは自分なのだから。

何も見えない。それをもう一度自覚して、彼女は目を閉じた。足はもう止めている。もう何も存在しない。自分の意思しか、もうこの闇の中にはない。その闇の中で考える。

（……まるで、死後の世界）

闇だけ。自分がどこにいるのかもわかっていない。そのくせ、意思だけははっきりとしている。地獄とはつまり、この闇そのものを言うのだろう——無音の静寂は、たやすく人間を壊すことができる。たとえばそれが、どんなに強い人間であろうとも。自分でさえ、自分を確認できない。認めてやることができない。最後には、自分が何だったのかさえわからなくなってしまふのだろう。それは恐怖以外

の何物でもなかった。

闇は嫌いだった。少しずつ、少しずつ、自分という存在が壊されていくようで。或いは、消されていくようで。誰かに自分という存在を確認して欲しい。そうすればきつと、この闇の中でも平然と立っていられるようになる。壁などに手を着かなくても、きつとまっすぐ歩いていける。

ふと気づいて、橙香は暗鬱に息を吐いた。気づきたくなかったことだった。

(……一人が、怖い)

闇が、ではなかったのかもしれない。つまるところ。闇は、孤独であることを明白にさせてしまう。だから闇が嫌いだったのかもしれない。そう思うと、もう闇は怖くない。もう、闇など恐れられない……その代わりに、寒さが増したような気がした。

誰かを探さないと。もう一人ではいられない。気づいてしまった。この寒さは自分が壊れていく寒さだ。壊れきる前に自分の姿を確認しないと。じゃないと、どうにかなってしまいそうだった。だが、歩き出せない。止まった弾みに、手を壁から離してしまっていた。それだけで、歩き出せない。闇は残酷だった。床の感覚でさえもなくしてしまうのだから。

もしかしたらこの一歩先には何もないのではないか。あったとして、その先は？ その一メートル先に床がある保証はどこにある？ いや、そうでなくともその闇の中に悪意持つ何かが潜んでいないといえるのか？

笑い出してしまいそうだった。ここがどこなのかもわからないだけならまだしも、一歩先に床があるのかさえわからない。安全なのかもわからない。泣き出してしまいそうだった。そのどちらをしても、最後には壊れてしまいそうだった。

そして不意に、その音は聞こえてきた。

「……!？」

息が引きつるのが、自分でもよくわかった。

それは足音だった。誰かの足音。一定の間隔で、一定の速度を保って近づいてきている。

近くに、誰かがいる。誰かの存在。それが呼んだのは歓喜ではなく恐怖だった。誰かいる。どこかもわからないこの闇の中、誰かが歩いている。何のために。何をするために。

さっき考えていた事を思い出してしまった。殺人鬼。誰かを殺すために、この闇を徘徊している。この闇に潜んでいる。体が震える。寒気の中に痛みを感じた。

胸が苦しい。呼吸ができない。近づいてくる。

足音。前後左右。どこからも近づいてくる。遠ざかることだけはない。何故この闇の中で歩けるのか。殺人鬼だからと言われれば、それだけで納得できてしまえそうだった。

そして、不意にそれを見た。

青白い鬼火。それが突然現れた。

「……！」

殺人鬼じゃない。悪霊だった。幽霊だったのかもしれない。青白い顔。ブレザータイプの学生服に身を包んだ、男。足は闇に溶けている。笑っても、怒ってもいない。無表情。青白い無表情。悪霊ならば闇など気にもしないだろう。彼らにとっては闇こそが聖地だ。

悲鳴は上げることができなかった。逃げ出すこともできなかった。息を吐くことさえできなかった。逃げ出さなければ。でもどこへ。わからない。わからないけど早くどこかへ。逃げ出さなければならぬのに、体が動かない——今になって気づいた。立てない。いつの間にか、腰を抜かして座り込んでしまっている。逃げ出せない。ただ、冷たい寒さの中で必死に目を閉じた。殺されるのだ。私はきっと、ここで斃られて殺されるのだ。

悪霊の声だけが、暢気に反響する……

「……いや、あのさ。せめて携帯くらい開こうよ。肝試しじゃないんだからさ」

悪霊は呆れたようだった——恐る恐る、目を開く。

少年がいた。顔には呆れが浮かんでいる。それははたから見れば、驚愕を精一杯無表情で押し殺しているようでもあった。悪意なんてどこにもない。

ただ思ったことを呟いただけのようだった。それに思わず、間拔けな声を漏らす。

「……え？」

「いや、え？　じゃなくて……携帯。足元くらい照らせるんだからさ、使おうよ」

手元の鬼火を指差して、その男は言ってくる。携帯——それで気づく。

鬼火は、携帯電話の光だった。気づけば足もある。こちらにテクテク歩いてくる。悪霊なんかじゃなかった。殺人鬼にも見えない。見覚えはないが、本当にただの生徒だった。

手を指し伸ばしてくる。その手をおずおずと掴む。暖かい手だった。ゆっくりと、自分に合わせて引き上げてくる。気を使われたのだと——立ち上がってからようやくそれに気づく。そのときには、もういろいろと遅かった。

(……………!)

思わず泣きそうになる。羞恥心と安堵がとめどなく溢れてくる。ただ人に会った。それだけなのに、涙腺が壊れたように緩み始める。それがまた羞恥心を誘い、泣きそうになる。その悪循環を必死に堪えながら、橙香は震える声で、精一杯へ以前を装って呟いた。

「携帯、持って、ません……生活に必要な、から」

涙は見えてないだろうか。泣きそうな顔になってはいないだろうか。顔は赤くなってないだろうか——それをただ、ひたすら気にする。彼はそんなこちらの心境になどまったく気づかず、呆れたように言ってきた。

「え？　いやいやいやいや、女子高生なら持つてるでしょ携帯。時計だって用なしにしてくれる便利アイテムだよ？」

「……と、けい？」

何故そこで時計が出てきたのか。思わず訊ね返す。

が、彼は勘違いしたようだった。まさか、と言いたげな顔で、言ってくる。

「時計知らないとか言わないよね……さすがに」

慌てて首を振る。さすがにそれくらいは知っている。この歳になってまで知らない人などいないだろう。こちらの反応に満足したのか、彼は怪訝を幾分か柔らかくさせる。

「あ」

と、ふと何かに気づいたように声を上げる。

「あー、そっかそっか。もう時計っていららないんだ、ほとんどの人が携帯持ってるから。魂持っても必要とされないんじゃないじゃ怒るよね。時間戦争が始まるのも時間の問題かもね」

「じかん、せんそう？」

突然変な方向に話が飛んで、また思わず聞き返す。少年はその眩きに、答えにならない答えを返してきた。

「のっぽの古時計とおじいさんが両軍の総大将なんだと思うよ、たぶん」

「……何の話、ですか？」

「明後日の話」

「……はあ」

とりあえず、適当な言葉を漏らす。何の話だったのか、いまいちまったくわからなかった。わからなかったが——まあ、気分は落ち着いてきた。涙ももう出ない。安堵はまだ残っているが、羞恥心はもうどこにもなかった。

気を使いすぎて妙な話をしようと思ったのなら——彼に感謝するべきなのかもしれないが。

と、冷静になって初めて気づく。

「ここ……学校、ですか？」

見覚えのある場所だった。教室棟の一階。一年棟と呼ばれる場所の廊下。何故こんなところにいるのか、記憶を辿る。が、昨日の夜、

家で予習してから眠りについた、そこまでの記憶しかなかった。

彼は暢気に呟いてくる。

「まあ、そだね。問題は、何故か閉じ込められてることなんだけど」
「え？」

聞き間違いだろうか。閉じ込められていると彼は言ったようだった。だがそれは、普通に考えるならありえないことだった。昇降口が閉められていたとしても、中からなら簡単に鍵が開けられる。出ることはできるはずだった。

驚愕と怪訝が顔に出ていたのかもしれない。彼はどうでもよさそうに窓を指差した。吊られて視線をそちらに向ける……

「……え？」

また間拔けな声が漏れた。窓の外もまた、闇だったのだ。月明かりも、星空も、町の光も何もない。ただの闇だけが広がっていた。

「窓開けてみて。そうすればよくわかる」

更に追い撃ちをかけるように、彼。素直に彼の言葉に従って、橙香は窓の鍵を下ろした。特に何もない。窓を引く。鍵が下りた以上、これで窓が開く。それは疑うべくもないことのはずだった。

が。引いても、窓はビクともせず、まるで万力に挟まれたように動かない。

「……え？」

また同じ呟きが漏れた。こうなることを予想していたのか、彼はため息を吐いていた。

「とまあ、こんな感じ。昇降口も職員玄関も体育館前の玄関もダメ。ここに何でいるのかもわかんないけど、外に出るのもダメなんだった。電波も来てない。何かよくわからないけど、異常事態だね」
「……それは、わかりましたけど」

つまり、何者かの手によって、拉致軟禁されてしまったわけだ。誰に拉致されたのか、何故監禁ではないのか。それはまったくわからなかったが。もしかしたら、本当に殺人鬼か悪霊がいるのかもしれない。

どちらにしろ、そんなことよりも問題があった。それを、橙香は問いかける。

「それで、あなたは？」

「へ？ 僕？」

「ええ。あなたは……誰なんですか？」

正直なところ、異常事態だと自分で言っているのに暢気すぎる。どうにも、そのせいで何かこの異常事態自体が胡散臭く見えてくるのだ。といっても、胡散臭いからといって何かが変わるわけでもないのだが。

「んー……」

というか、彼自体が胡散臭いのだ。何故か、彼は考え込むように天井を見上げた。釣られて見上げる。薄暗い中に、灰色の天井が見える。闇が緩和されたとはいえ、劇的に辺りが明るくなるわけではない。彼の胡散臭さが、薄らぐわけでもない……

やがて、彼はポツリと呟いた。

「『考えるバカ』」

「……は？」

意味がわからない。その反応に、彼は苦笑したようだった。

「あだ名だよ、あだ名。なんか最近よくあるじゃん？ 名前書かれると死んじゃうノートとか。そういうのの対策だと思ってもらえればいい。異常事態だしね、警戒くらいはさせて欲しい」

「……そんなノート、聞いたことないんですが」

いくら異常事態だからって、何かいろいろとおかしい気がする。

胡散臭いものを見る目で彼を見つめると、彼も彼で何故か呆れているようだった。

「これだから携帯も持っていない化石は……」

「……遠まわしに古い人間って言わないでください」

ムツとして言い返すが、そんなことはどうでもいいらしく。彼は勝手に先を続けていた。

「まあ、無駄にどうでも良い事ばっか考えてるからそんなあだ名が

ついたただけどさ。そんなに悪いことでもないと思うんだよね、考
えることって」

「たとえば？」

「無機物が魂を持ったら、人を呪うのか」

「……結論は？」

「場合によりけりで落ち着いた。だって魂持ってるって事は感情持
ってるって事だもん。他の人の考えなんて僕にはわかりません」

「……………」

最後まで聞いて、橙香は思いっきり嘆息した。ここまで話せばも
うわかる。彼は胡散臭くなんかない。まったく胡散臭くなんかない。
むしろ、これではつきりした。

単にバカなのだ。心の底から、それを認める。

「……………」

「何、その疲れきった顔？」

「知りません……私はこんなのになに怯えてたんですか？」

「こんなのとは何さ、こんなのとは。これでも馬と鹿のハイブリッ
ドだよ？ 立派じゃん」

「……いえ、もう何も言いません」

疲れた。完全に毒気が抜かれてしまった。呆れしか浮かんでこな
い。この状況なら危機感を持つべきなのだろうが、完全に空気が白
けきってしまった。

まあ確かに恐怖よりかはマシなのだろうが。恐怖と白け、どちら
かに嘆息しようとして。

——悲鳴が、闇を切り裂いた。

息を吸う。限界まで吸って、そして吐く。吐く時に声帯を震わせ
て、その息は初めて声になる。その声が叫びとなるか、それとも悲
鳴になるか。それはその声を発した当人の心境次第だろう。個人的
には、どちらも大差ないように思えたが。

「これは、考える必要もないね」

悲鳴だ。それも長い。取り繕う必要も、捏造する理由も感じない。紛うことなく悲鳴だ。女の。目の前の化石少女ではない。それはつまり。

考え終わるよりも早く、化石少女がうろたえる。声は震えていた。どうやら悲鳴に恐怖を覚えたらしい。長い髪が、彼女の動作に合わせて揺れた――先ほどのように、腰を抜かしたわけではなさそうだった。

「な、何であなたはそう暢気なんですか……!?!」

「だって、当事者じゃないし」

とは言いつつも、考える。悲鳴の聞こえた方角。悲鳴の聞こえてきた場所。悲鳴の理由。悲鳴を上げた存在のその後。

考えなければならぬことは多々あるが、とりあえずの問題は。

「どこ行く気で？」

その悲鳴の方角に歩き始めた、彼女だった。暗いせいで、走りたいのに走れないのだろう。その気配は背中からでもわかる。その背中を追いかけるように、彼も歩き出した。

足を止めることもこちらを振り向くこともせずに、彼女は言う。

「悲鳴です。誰かいます……知り合いかもしれません」

「まあ、そうだね。それで？」

「助けに行くべきです。今は異常事態です。知り合いじゃなかったとしても、協力し合えるかもしれません」

「危険に巻き込まれるかもしれないね」

失言だったかもしれない。そう思ったのは、彼女が不自然に足を止めたからだだった。肩越しにこちらを見てくる。その瞳はぼう々と照らされ、幽鬼じみていた。

声はそれよりかははっきりしていた――つまりは怒気を含んだものだった。

「……何が言いたいんですか？」

「いや、別に？　ただ、猪突猛進はいただけないなあって話さ」

「……見捨てる気だど？」

「冷静になれって言いたいのさ。とはいえ……」

ため息を一つ。空気を改めるためのその息が消えてから、彼は問いかけた。

「声のした方角、どっち？」

悲鳴は反響していた。が、だからといっておよその見当がつかないわけではない。少なくとも悲鳴を上げた一瞬だけは、その方角がはっきりしているのだから。最初の音を記憶に残すことに成功させられていれば、反響など気にしなくてもいい。

戸惑いと怪訝を潜ませて、彼女は答えた。

「三階。たぶん……教室です」

「理由は？」

「声の方角です。この上の遠くからでした。ですが、少しくぐもっていたように思います。廊下からならもっとはっきりしているはずですよ」

「……………ふむ」

思考を閉じて、頷く。そして地図を思い浮かべた。角張った『タ』の字。今いるのは教室棟の一階だ。一年棟ともいう。そして三階は三年棟。放送室などは別棟だ。あの悲鳴は教室からだというのなら、何も問題はない。断言できた。

「なら、十中八九危険はないよ。行こうか」

そう告げて、彼は彼女の横を通り過ぎる。ポカンとした顔は、何かに驚いていたようだった。或いは、突然の断言に反応できなかったか。

やや遅れて、彼女の声足音と共に聞こえてきた。

「……何故、断言できるんです？」

「悲鳴だよ」

「……悲鳴？」

「そ。普通は危険と取るんだけどね……今回ばかりは、たぶん違う。悲鳴を上げる時の動作を考えればいいんだ」

きっと、今の自分はしたり顔なのだろう。今は鏡を見たくないな
と思いつつも、続ける。

「普通に喋るのとはわけが違う。まず、息を吸わなきゃいけない
だ。大声出す時の基本だね。で、その後吐く。思いつきり。吐くん
だけど……あの長さだ。三秒かな？ 思いつきり吸って、三秒息を
吐く。近くに危険があったのなら、三秒も悲鳴は上げられないよ」
「……………」

「それに、悲鳴は重労働だよ。危険に対して上げたのだとしたら、
あれだけの時間悲鳴を上げる余裕はないはずだ。三秒は長すぎる。
本当の危険を前にしたとき、大概の人間は逆に息を止めるものだし
ね」

「……何でそんなことを知ってるんですか？」

「いろいろとあってね。今度試してみなよ。僕だって体験談だけ
だし……とはいえ」

考える。確かに、教室に危険はないだろう。それだけは断言でき
る。言い換えるなら、それ以外は何も断言できない。道中に危険が
あったとしても文句は言えない。

ため息を漏らして、彼は背後を振り向いた。

「……？」

「はい」

怪訝を浮かべている少女に、携帯を投げる。

「え……わ!？」

突然物を投げられて、少女は驚いたようだった。慌ててキャッチ
する。それを確認してから、彼は階段付近に設置されている掃除ロ
ッカーに手を伸ばした。開ける。箒、モップ、箒、箒、モップ、バ
ケツ、雑巾……大して目ぼしい物が入っていない。

「……何してるんです？」

「いや、武器くらいは持ってたほうがいいかなーと思ってさ」

が、モップは先端が外せない旧式のものだ。箒は先端がさばけて
いて武器にならない。バケツも雑巾も武器としては言わずもがな。

結局やめておくことにした。

「……まあ、いいか。行こうか」

そう告げて、また歩き出す。それと同じくらいのタイミングで、
気遣うような声が聞こえてきた。

「……携帯、私が持っていていいんですか？」

「ああ、いいいいいよ。僕、夜目はいいいいほうだから」

答えてから、苦笑する。暗いところは得意なつもりだ。わずかな
明かりさえあれば、後はイメージで何とかなる。明かりがなくても、
イメージだけで歩くこともできないわけではない。闇は嫌いではな
い。だから大して何も気にせず、階段を上がる。足音の音色が変わ
る——いや、反響が変わったのか。どちらにしろ、階段を上りきる
までは無言だった。

「そういえば君、何か武道やってたりする？」

「……何故そんなことを？」

「いや、武道経験者なら、もし仮に危険があっても楽になるかなと
思って」

あくまで気だけ、だが。彼女を守る義務などないが、守らなくて
もいいのだとしたらそれでいいのだ。思考形態としては男尊女卑も
いいところだが、危険なのに女を見捨てて逃げる男はカッコ悪い。
どちらにしろ、彼女は答えてこなかった。が、やっているのなら、
闇の中で腰抜かしたりはしないだろう。たぶんやってない。偏見で
そう判断する。気が重くなった。

「……………」

気づけば息遣いが増えていた。近い。

自然と足音も忍ばせている。もしかしたら、彼女はもう背後にい
ないのではないか。そう危惧するほどに、足音は小さかった。ただ、
隠し切れない呼吸の音だけが薄闇の中にある。

（……さて。この状況下で、いったいどんな危険がある？）

否定したことをもう一度掘り起こす。教室。悲鳴を上げた場所。
そこで悲鳴を上げる理由は。それは知っている。だからいい。悲鳴

を上げて……その後の危険性？ 何が危険になる？ 道中に、危険はなかった……

（……結局は、人災かな。それ以外はありえない）

やっぱりモップくらいはあっても良かったかもしれない。時間戦争の役にはたたないだろうが、喧嘩程度なら有効ではあった。後悔というほどではないが、悔いる。ため息は漏らさなかった。

その教室にたどり着く。三年二組。扉は二つあった。小学校の時、教室の扉は一つしかなかった。中学に上がってから、入り口が二つに増えたのだと思う。黒板側と、その反対。どちらからでも出られる。

どちらからでも、逃げることも進入することもできる……

呼吸の音も二つあった。浅く、速い息。これは知っている。焦りや恐怖の前になす術もなく、思考が圧倒されている時の息だ。思い出したのは、遊園地のお化け屋敷だった。意気揚々と中に入っていた友人が、数秒後には顔を青くして震えていた。怖いと思わなかった自分は、彼の顔を面白そうに眺めていた記憶がある。その時の呼吸と同質のもの。

扉は開いていた。そこから中へ入る。

そして、彼は見た。

腰を抜かしたのか、座り込んでいる女と。

驚いているのか、ただ呆然とした男。

「……!？」

背後から息をのむ、彼女の音。それを聞きながら、彼は見ていた。教室に。その中央にぶら下がる、人型。無感動にそれを見て。

やっぱりお化け屋敷みたいだと思いつながら、彼は安穩と呟いた。

「……明日は晴れても、気は晴れないだろうね」

テルテルボーズ。

死体が、ぶら下がっていた。

やっぱり、悲鳴は聞こえてこなかった。上げる気もなかったのか
もしれないが。

どちらにしろ、静寂だけは耳に痛かった。時計の振り子と同じように。

2 踊るネズミたち・始動編。

一つ、二つ、四つ、八つ。増えて十六、二倍して三十二。二の六乗で六十四。さらに増やして百二十八。数字を数えることで、無理やり思考する。考えるのをやめた時、人は獣に成り下がる。それは死と同義だ。だから考える。状況を理解するために、何度も何度も思考を走らせる。思考はすぐさま長い長いランニングとダッシュを開始する。小休止でさえ必要ない。休憩など寝るときだけで十分だ。だから彼は見た。

闇。真っ暗闇ではない。背後からは自分の携帯が、前方では二つの携帯が辺りを照らしている。薄闇。背後からは息遣い。化石少女のだろう。眼前に机とイスの森。黒板。教室。暗い。中央に一つ、テルテルボーズ。縄は見えない。ここでもまた闇。死体が一つ、天井からぶら下がっている。それを呆然と見ている、少女と男。男の手には長い棒。二人とも、テルテルボーズを見つめている……ふと思考が迷う。テルテルボーズ。

（それ、どんなポーズさ？）

そのままのポーズなのだろう。不謹慎だが、自問自答する。思考はそこで終わりを告げ、代わりに平常に戻る。冷却された脳は、いつもどおりに暢気な言葉を唇に喋らせていた。

「……まったくもって、何が何なんだか？」

暢気というよりは、白けきった声が漏れた。呟いたことで視線が集まる。薄闇に輪郭が溶けている。だから、男と少女が今どんな表情を浮かべているのか、判断はできない。どちらにしろ、誰も何も言いはしない。話は何も進まない……

だったら、今は平常な自分が進めるしかないのか。ため息混じりに、彼はその役割を受理することにした。

「君たち、第一発見者？」

「……あ、アンタたちは？」

質問に答えない、男の声。聞き覚えのないものだ。知り合いではない。化石少女が何も言わないことからして、化石少女の知り合いでもなかったようだ。つまりはまったくの赤の他人。なんで知り合いが一人もいないのかと、彼はため息を吐いた。

今度生徒会長でも目指してみようか。それならこんな事態でも、声くらは覚えていてもらえるだろう。不純な動機だが、別に生徒会長だって本気で学校を変えるためになるものでもないはずだ。せいぜいが大学への宣伝にしか使えないのだし。

「この学校の生徒です。悲鳴を聞いてここに来ました」

一秒くらいだっただろうか。何も言わないこちらの代わりに、背後の化石少女が代弁してくれた。そしてそのまま、疑問を呟く。

「……これは？」

彼女の呟きと共に、死体に自然と視線が集まる――この人は、ではない時点で彼はもう物なのか。死体を人として扱っていいものなのかどうか。声には出さずに悩む。

が、そんなことなどどこ吹く風、男ははまだ消沈した意気のまま答えてきた。

「自殺……したんだと思う。人を捜してたんだ。どこかに行けば、いるかもしれないと思って。そしたら……」

「見つけてしまったというわけだ」

口ごもった男の代わりに、その先を続けてみる。男は何も言わなかった。当たり前なのだろう。顔が青ざめているのは、死体を見たからか、はたまた自殺に怯えたか。どちらにしろ、その程度で意気消沈するのはあんまり理解できないことだった。

死なんて簡単に生まれる。闇の中ならそれはこの上なく顕著だ。わざわざ驚くことでもない。死体だって、もともとは自分たちと同じ、生きている者だ。つまり、必然的に自分たち生き物はどんなに抗おうともあの死人のように死ぬことになる。いつ自分がああなくてもおかしくはないわけだ。可能性があるのなら、それに怯える必要性はない。

（まあ、死んだら怯えも何もないんだけどね）

とまれ、ため息を吐いて彼は死体に近づいた。男といまだ放心したままの少女を通り抜け、死体にお目通り願うことにする。死体に近づくにつれて光量は減っていったが、それでも見ることにには不自由しなかった。

何の変哲もない、ただの死体だ。白目を剥いて、息一つせず。苦しそうに血の気のない顔を歪めている。見覚えのない顔なのは、顔が苦痛で歪んでいるせいか、ただ単に記憶にないせいか。ごくごく一般的な首吊り死体である——少なくとも、そのイメージ、というべきか。日本に死体は溢れていない。

ふと思いついて、彼は呟いてみた。

「外国の映画って、これくらいしてくれそうだよ」

「……映画？」

「ハリウッドの特殊メイクとかさ。映画同好会ってあったっけ、この学校。もしかしたら、そういう連中のいたずらかもね」

たぶん、なかったはずだが。なかったとしたら、このテルテルポーズな死体はメイクなしでここに存在していることになる。死は間近で身近というわけだ。自殺する理由が何なのかは、保留するにしても。

「……何でアンタ、そんなに冷静なんだよ」

男が呻くのが聞こえてきた。頭でも冷えたのか、或いは環境に適応したのか。底冷えするほどに冷たい声だった。

「だって、他人事だし？」

呟いてから、振り向く。死体の隣から入り口のほうを見ると、ここにいる全員の姿を見ることができた。ボサボサの髪は今時な男と髪の短いスポーツ風味少女と、長い髪をそのまま下ろした、化石少女。そして、特に特徴のない——強いて言うなら少年っぽい自分。遠い薄闇の中では、表情は見えない。ただ幽鬼じみて見えるだけだった。

四人。今ここにいる、生きている人間の数。

これで全員と見るべきか、それとも他にまだ巻き込まれた人がいると考えるべきか。思考材料は当然のように欠けている。小学校の時に習った虫食い算よりもひどい。どんな言葉も嘘になるし、どんな言葉でも本当にできる。そもそも何を考えればいいのかもわからない。まさにお手上げだった。

「……さて、これからどうしたものかな」

独り言の雰囲気を漂わせつつ、視線で問いかけてみる。何も考えが思いつかないというのは、あまりにも間抜けなことだった——誰か答えを持っていれば、それについて考えられるというのに。沈黙の中、ふと時計を思い出す。時計だったら、考えなくても自分のすべきことはわかっている。それは羨ましいことだった。

もしかしたら時間戦争は、そんな時計に嫉妬した人が起こすものなのかもしれない。それこそ神のみぞ知る未来の、この上なくどうでもいい与太話だったが。

沈黙の中、ハッと気づいたように男が声を上げた。

「警察だ」

「警察？」

「呼べばいいんだ。そうすれば終わりだ。それだけの話だったんだ」

「どうやって呼ぶのさ？」

「携帯持ってるだろうが！」

「君もね。ああ、あと僕は今持っていない。そこの化石少女が持っている」

怒鳴り声を適当に流して、ため息を吐く。携帯なんて、今更見る気もしなかった。明かり以外に役に立つわけがないのだ。本当に今更だった——またハッとした声。たぶん、携帯という言葉に反応した化石少女のものだろうが。

「なんで……!？」

驚愕の声もまた、化石少女のものだった。男はその反応を予期していたのか、してなかったのか。舌打ちしてから、八つ当たりのように叫んでくる。

「何でだ……!?! 何でこんな場所で圏外になるんだよ!」

その八つ当たりにも無頓着に、どうでもいい答えを返す。

「さて、それについての答えは……考えるのも面倒だなあ。答えが出ないの、わかりきってるし。職員室の電話も試したしね。回線繋がってるのに外に繋がらないんだから、どうしようもないよホント」警察を呼ぶなんて考えは、当の昔になかったのだ。目覚めて最初に携帯を見たときから、それはわかっていたことだった。たぶん男もわかっていたのだろう。携帯を明かりにして歩いておいて、わざわざ外に電話しない道理もない。

「にしてもなあ……人を見つけたのはいいんだけどさ。これで打ち止めなんだよね、どう考えても。これから何して暇潰せばいいのさ?」

ため息を吐く。馬鹿馬鹿しい思いで彼は苦笑した。本当に、これで終わり。

何もすることがない。何もしていないのにチェックメイト。将棋で言うところの詰み。あまりにも理不尽極まりない終わりだった。後でできることといえば、死体鑑賞と時計考察だけ。時計考察はともかく、死体鑑賞はまったく楽しくなさそうだった。

「暇、ですか?」

さっきの化石少女だ。本当に疑問だったのか、はたまた死体から少しでも離れたかったのか。答える必要があるのか疑問だったが、とりあえず答える。

「だって、事態が何も進展しない。閉じ込められて、自殺者一名。それでお終い。やることがないよ。これじゃあ生殺しだ」

「……何であなたは、そこまでわかってて暢気なんですか?」

「そう? 君だって僕と同じくらい暢気に見えるよ」

言い返すと、一瞬少女はたじろいだようだった。が、すぐに平然と言い返してくる。

「私は……冷静な、だけです。驚いて悲鳴を上げるタイミングは、

もう逃してますし」

「じゃあ僕もそんなものなんだろうね、きっと」

「……………あなたの場合は、根本からぶれてる気がします」

ため息の音。それ以上話す気が起きなかったのか、彼女は腰を抜かしたままの少女に近寄る。それから彼女は子供をあやすように少女に話しかけた。最初は当たり障りのない言葉から……自己紹介を始めた辺りで、彼は彼女たちから視線を外した。そういう話は当事者以外は聞かないほうがいいのだ。

そう決め付けて、彼はため息をつく。泣き出したのか、そんな声まで聞こえた気もしたが、彼はまったく気にしなかった。

視線を死体に戻す。苦しそうにだらりとぶら下がる肉体。肉体の呪縛から解放され、魂だけが悦楽の中にいると思うと、なかなか羨ましいものがないわけでもない。少なくとも、死んでしまえばこの重苦しい意味不明さを味わわなくてもいいのだろうから。魂を持つ前の時計と、死んで肉体から解放された魂。もしかしたら、死人が時計に宿るのかもしれない。だとしたら、時間戦争も単にただの戦争と一緒にいうことになるが。

手持ち無沙汰になったのか、男もこちらに近づいてくる。その男へと、彼は呟いた。

「女の子が抱き合うと絵になるのに、男同士が抱き合っても絵にならないのって、ちょっと不思議だよ。同じ人間なのに」

抱き合いたいとは思わなかったが。というか御免被りたかったが。男はげっそりと呻いてきた。

「……なんで、本当に暢気なんだよアンタは」

「ここで慌られてもうざいだけじゃない？」

「……正論だけに、まじでうぜえ」

まあ、そんなことはどうでもいい。とりあえずの問題は、この死体だった。

この死体から何を考えて、どこに結論を持っていくのか。この死体には何の意味があって、何の価値があるのか。名探偵ならここで

ズビシッと何かを見つけるのだろう。実はこれ、他殺なんですよーとか。死体はまだ生きてるんですよーとか。異常が日常な彼らの観察力が、今だけは羨ましい。危険を呼び寄せる超運だけはいらないが。

どうでも良い事に脱線した思考を戻しつつ、彼は死体の顔を見た。特に特徴のない顔立ちだ。すれ違って、たぶん気づかない顔。アウトオブ眼中な顔立ちだった。記憶に残す価値以前に、記憶に残す方法がない。そんな顔。呆れるしかなかった。

「……本当に没個性な顔立ちだね。何かすぐ忘れちゃいそうな顔というか……絶対に覚えられなさそうな顔というか」

「……不謹慎だぞ。同意はするが」

男も同じ事を考えていたらしい。気が合うのは良きことなのだろうが、本当に不謹慎極まりない。だが、やはり覚えられないものは覚えられそうになかった。何度見ても、記憶にも残らない。

死んでいたのが誰だったのか、これでは誰も覚えていられない。と。突然男が何かに気づいて声を上げた。

「……あん？」

「何？ 何かあった？」

「いや、この死体。カフスボタンがない」

言われて裾を見る。二つあるべきボタンが一つとしてついていなかった。引きちぎられたようなほつれだけが、痕跡として残っている。もう片方の腕にもついていないようだった。それが意味するところといえば。閃くと同時、彼は適当に呻いていた。

「……何なんだかね。何のために、誰が奪ったんだか？」

「奪った？」

「だって、ほつれがあるし。不自然でしょ」

「俺の知り合いには、それが格好いいと思ってる奴もいたけどな。ワイルドだとか」

「うーん……ワイルドが自殺するかなあ？」

「するんだろ。現に今、してるんだし」

とりあえず、納得しておくことにする。特に気にするべきポイントではないのだろうし。

「あ」

ふと気づく。死体は、その手の中に何かを持っていた。ノートの切れ端のようにも思える、それをその手から引きずり出す。破れるかと危惧したが、大した抵抗もなくその手からそれは出てきた。

「……紙切れ、か？」

男の呟きに答えず、畳まれていた紙切れを開く。

そこには文字が書かれていた。そして数秒後、それが遺書なのだと気づいた。男が覗き込んでくる。文字は乱雑で、読みにくいことこの上なかった。

赤い文字が、照らされている。

血文字だった。おどろおどろしさをアピールしたかったのか、それともペンがなかったのか。自殺。遺書。自分で死んでおいて、メッセージを残している。

自殺に対して毎回毎回感じるのは、何故自分で死ぬという方法で現世から離れておいて、それでも現世にメッセージを残そうとするのかという疑問だ。死んだのなら、もう何も気にしなくていいというのに。放っておいてももう何も思えないのに。

読み上げるのはあまりにも愚かだったかもしれない。それでも彼は、呆れながらその遺書を読み上げていた。

「これは悪魔のゲーム。誰も、生きて帰れない……」

読み上げてから、はたと気づく。

「これ、本当に遺書なの？」

違う物にしか思えない。が、誰も答えを返してくれない。沈黙は長かった。もしかしたら誰も聞いていなかったのかもしれない。どちらにしろ、もう一度読み上げようとは思わなかったが。

「……………だろ」

やや経ってから、男はそれだけを呟いた。

そして。本当に愚かだったのは、読み上げたことでもなかったよ

うな気がする。本当の意味で愚かだったのは、何も変わっていないのに気を緩めたことのように思える。

時間戦争の始まりだって、きっとその隙について起こるのだ。静寂に響かない時計の長針。振り子時計もここにはない。静寂を強調するものは何もない……

強調するのは。それを彼は、ため息をついて否定した。静寂を壊してなお、静寂を意識させる音。それは明確に耳に届いていた。三つ。光が規則正しく変化する。それは見慣れていた光景であり――この場においては、あまりにも非現実的な光景だった。

彼以外の誰もが、息を殺していた。否、息をすることができなかった。

――携帯が、まるで生きているように脈動している。

いや、実際生きているのかもしれない。時計より若いからといって、携帯に魂が宿らない道理はない。むしろ同じ無機物として、宿ってしかるべきだろう。日ごろ酷使されているのは時計よりも携帯だ。なら、恨みを先に抱くのも携帯だということなのだろう。

どちらにしろ。本当にどうでもいい気分で、彼はその事実を呟いていた。

「――メールの着信だね、どうも」

しかも、自分を除いて全員。いや、携帯は自分のだから、化石少女を除いて三人か。それはともかく、遺書を読み上げたタイミングでメールが来るとは。そのあまりにも狙ってましたと言わんばかりの悪質さに、彼は表情には出さないように苦笑した。

「圏外なのに」

そう誰かが呟いていた。

心臓が脈を打っているのか、それとも脳が脈を打っているのか。立っているのか、座っているのか。目を見開いているのか、硬く閉じているのか。様々な感覚の全てを失念して、それでも柳は自分の

手元を見ていた。脈動はもう収まっている。もう何もない……それでも、動けずにそれを見ていた。

自分の携帯。二年前、中学三年の春に買ってもらった旧式。使い勝手が悪く愛着もない、ただ見慣れてしまった携帯。何度も何度も見てきた、メールの着信を知らせる電光板。圏外。脳裏によぎり続けているのは、そんなごくごくありふれた単純な、それでも身近にはない異常を知らせる言葉だった。

息をするのが苦しい。気管には何も詰まっていない。なのに、息ができない。心臓が熱い。何故かはわからないが、それでも汗をかくほどに熱い。

メールを見るべきなのに、見てはならないと何かが叫んでいた。本能だったのかもしれない。理性だったのかもしれない。或いは心そのものだったのかもしれない——それでも、いつかは開かねばならない。決心が先か、妥協が先か、逃走が先か。見ないという選択肢だけは、選ぶことができなかった。

誰も動かない。死んでしまったかのように、音が聞こえない。空気が動かない。きっかけがないと動けないのに、そのきっかけが見つからない。あまりにも異様な空気に、完璧に吞まれてしまっていた。誰も動かない……

いや。

「……ふむ」

男が一人、そんな声と共に入り口へと歩き出していた。足音が響く。空気が少しずつ動き出す。男を追うように、全員の視線が集まっていく。男は若菜と少女、二人のところに歩いていく。視線は若菜ではなく少女に——より正確には少女の持つ男の携帯に向かっていった。男は少女に手を伸ばす。

「携帯。ちょっと貸して」

「あ……えと」

少女はおずおずと携帯を男に渡す。それを受け取って男は、無関心に携帯を操作し始めた。マナーモードなのか、操作音は聞こえて

こない。無音のまま時間が過ぎていく。男の指は、五秒も立たずにピタリと止んだ。

沈黙。男はただ、ずっと画面を睨んでいる。その姿は退屈そうでもあり、どうしてもよさそうでもあり――そのくせ何故か、どこか何かを楽しんでいるようにも見えた。

「……へえ。なかなか凝ってる」

ため息。次いで、ポツリと一言。何が凝っていたのか、何にため息をついたのか。その声に反応したのは、怪訝を浮かべている若菜だった。

「……何が？」

「自分の見ればわかるよ、たぶん」

「たぶんって何よ」

「内容が違うかもしれない。まあ、たぶん一緒だろうけどね……ああ、ありがと」

そう言って男は、少女に携帯を渡す。またおずおずと、少女は携帯を受け取った。そのついでか何かで、訊ねる。

「……見てもいい、ですか？」

「ああ、どうぞどうぞ……というか、君あてなんだけどね、さっきの」

「……え？」

少女が呟き返す頃には、男はもうどうでもよさそうに天井を見上げていた。完全に興味がなくなったのか、それとも何かを考えているのか。どちらにしろ、その頃には柳にも決心できていた。

いつの間にか口内に溜まっていた生唾を嚥下し、手元の携帯を見やる。メールを表示する操作など、もう体に染み付いている。それでも柳は、ゆっくりと携帯を操作した。

表示されるメール欄。未開封が一通。送信者は。

「……………」

その文字を理解するのに数秒を費やした。表示されていた名前が、あまりにも馬鹿げていたからだ。そしてその名前が、いつの間にか

携帯に登録されていたからだ——登録されていないメールは、送信者の名前をメールアドレスで表示する。

このメールは、見知らぬ『登録された』誰かからのメールだった。「……………何、これ」

若菜の声が聞こえる。震える声——恐怖とも驚愕ともつかぬ、そんな声で若菜は呟いていた。若菜が呟かなければ、きっと自分が呟いていた。遅れて、少女の息を呑む音が響く。闇の中、二人の表情は見えない……それでも、気配は怯えるウサギによく似ていた。

「……ようこそ、この素晴らしき遊戯の時間へ」

感情のない、それは男の声だった。読み上げていくのは、メールに書かれていた文章。

「殺人鬼が一人。この世界で飢えている。飢えた猫は獲物を殺す。最後には自分でさえ殺す。誰も残らない、誰も残さない。例外なく、誰一人として生きてない。殺人鬼が一人。猫が一匹。誰をも殺す、猫が一匹……殺される前に猫を当てよう。それとも、殺される前に自殺するか。どっちでもいい。どちらか一つ。猫を探すのは一人だけでもいい。見つけたら君たちの勝ち。殺されたら、君の負け」

ただ淡々と、彼はその先を呟いていた。自然と、視線がその文章を追う。彼以外、誰も口を開くことはなかった。

「負けたら君をいただこう。君の魂をいただこう。我が名は悪魔。絶望の果てに『まるまる』。君を待っている……『まるまる』には自分の名前かな。あってる？」

全てを読み上げて、男は暢気に問いかけてくる。だが、若菜も少女も答えない。ただ震えながら携帯を見つめていた。

間違いはなかった。文章は全て読み上げたとおり。『まるまる』と読み上げられた部分には『柳』の文字が入っている。誰かに名乗ったわけでもない。それでも、悪魔は名前を知っていた。

心臓はもう熱を発さない。熱を欲するほどに冷え切っている。それが身から来る寒さなのか、心から来る寒さなのか。どちらかから逃げるように、柳は問いかけた。

「……なんで、見ないで読めるんだよ」

「暗記科目は得意だね。一度見たものなら長文でも五分くらいは覚えてられる」

男は、こちらからすればどうでも良い事を自慢するように胸を張る。それがこの空気には、あまりにも異質だった。闇の中、男は肩をすくめる。

「ま、そんなことよりも問題は名前なんだけどね……君、悪魔なんて知り合いいる？」

「いるわけないだろう」

険悪な響きを持たせて呻く。と、男はやっぱりとでも言いたげな声を上げた。

「だよねえ。いたらLFが始まってる」

「LF？」

「ロウ・ファンタジー。現代を舞台にしたファンタジーのことね」

どうでも良い事を呟いて、男はため息をつく。

「にしても、悪魔と猫……殺人鬼ねえ。最悪だね、どうも。いつその事さっさと自殺しちゃう？ そうすれば終わるけど」

本気ではないだろう。おどけた調子で男は笑う。それは苦笑にもよく似た、やせ我慢のようにも思えたが。もはや言い返す気力もなく、柳は黙り込む。

反論の声は、予想通りに少女が上げた。

「冗談でも……そういうこと言うの、やめてください」

「ん、わかった」

男も抵抗せず、素直に応じる。それ以上言うこともなくなったのか、男は黙り込んだまま天井を見上げた。何かを考えているのか、それとも時間を潰したいだけなのか。

沈黙だけは、嫌というほどに長かった——いや、そう長かったはずはない。それでも長く感じたのは、ただずっと何も考えることができずにいたからか。

「……逃げなきゃ」

その沈黙を破ったのは若菜だった。焦っているのか、声が引きつっている。半狂乱なのか、それとも冷静なのか、よくわからなかったが。そんな声で、若菜は告げてくる。

「逃げなきゃ。一箇所に留まってる、きつと来る」

何が、とは言わなかった。そんなことなどもう言わなくてもわかっている。悪魔が来るのか、殺人鬼が来るのか。その二つよりも明確な存在が、近づいてきている。敵だ。悪魔と殺人鬼、その二つの内のどちらでもあるもの。ゲームの立案者と、実行者。最低な二つ。賛成したのは、やはり男だった。

「まあ、そだね。わざわざ死体鑑賞のためにここに残るのもどうかと思う。これからどうするかは置いて、どこか安全な場所でも目指しますか」

「安全な場所？」

訊ねてみる。心当たりがあるのなら、どこでもよかった。が、何も考えていなかったのか、或いは本気だったのか。よくわからない調子で男は答えてくる。

「実際廊下が一番安全なんじゃないかなーとは思っけどね」

「何で」

「だって、逃げられる。廊下なんだから、わざわざ追い詰められることもない。逃げ続ける自信があれば、の話だけどね」

それは確かにその通りなのかもしれない。だが、それを安全といっているのかどうかは甚だ疑問だった。危険から逃げられるというだけだ。決して安全というわけではない。

「……安全って――」

反論しようとした、その直後だった。

――カツン。

「……………え？」

足音。その眩きは誰のものだったのか。考える余裕を捨てて、柳は教室の外へと飛び出した。男も後を追うようにのんびりと外に出てくる。廊下には静寂が落ちていた。音は聞こえない。気のせいだ

ったのかと思うほど、辺りは静まり返っている。だが、耳を澄ませば、それを否定するのは無常にも容易なことだった。

——カッソ。カッソ。カッソ。

止まらない。近づいてくる。どこから。教室から若菜と少女も出てくる。表情が見えた。二人とも、寒さと共に怯えに震えている。男は相変わらずどうでもよさそうに闇を見ていた。闇。携帯で照らしても、遠い。響く足音。誰の。誰も歩き出してない。

誰の？ 考えるまでもない。考える必要もない。携帯を畳み、ポケットに入れる。気づけば、若菜の手を取っていた。聞こえたのは、間延びした声。

「え？」

それに答えずに——いや、答えたのかもしれない。どちらにしろ、柳は叫んでいた。いや、叫ばなかったのかもしれない。ただ、突きつけるような鋭さで言葉が吐き出されたことだけはわかっていた。

「逃げるぞ！」

「やれやれ、気の早い」

答えたのは、若菜ではなく男だったが。

若菜の手を引いて、走る。もう何も聞く必要はない。考える余裕もない。走り出す。逃げるように、闇の中を。続く足音は三つ、いや四つ。

逃がさない。

そう、誰かが叫んでいた。震える声で、叫び続けていた。

絶叫は、反響して無限に増える。

ひび割れた声で。ただ延々と、その叫びは響き続けた。

3 踊るネズミたち・逃走編。

苦しい。走るのが辛い。それでも止まる事はできない。逃げなければならぬ。握り締めた手の暖かさが、なくならないように。階段を駆け降りる。一階。すぐその教室に飛び込んで、若菜が入ってきてから扉を閉める。さっきの男たちとははぐれてしまったのか、姿は見えなかった。

息も絶え絶えな若菜の聲が、鼓膜を振るわせる。また泣き出したのか、きらりと頬を何かが伝っていた。立っていることもできず、さっきみたいに腰を抜かして倒れこむ。

「や、柳……」

声に応えることはせず、柳は閉ざした扉を凝視する。自然とモッブだった棒を握る手に力が籠るのを感じた。浅く早い呼吸を、意識的に深く遅い深呼吸に切り替える。目は閉じなかった――閉じれば、その一瞬に対応することができなくなる。

静寂はなかった。殺人鬼の足音が掻き乱すように辺りに慌ただしく響く。逃がさない。響いたあの咆哮を思い出す。足音が近づいてきていた。それを理解した瞬間、心臓がドクンと跳ね上がる。気づけば棒を握る手が、じつとりと濡れていた。

殺人鬼がいる。殺人鬼が追ってきている。それだけで心臓が痛み出した。何度も何度も胸の内で暴れている。もしかしたら、次の瞬間には破裂してしまうのかもしれない。それほどまでに、心臓がドクドクと脈を打つ。

「……………」

何かを堪えるように、若菜は息を押し殺す。それは今まで聞いた事のない幼馴染の声だった。それが、彼女を守らねばならないのだと自覚させる。

守らねばならない。何があっても、絶対に。そう意識して、柳は扉を凝視する。

開かない扉。開いた時には殺される。死は最低の理不尽だった。それを振り払うためにも、戦わなければならない。息を殺す。ずっと扉を睨みつける。音は止まない。慌ただしく走り続けている……音が響く度に、若菜の体が強く震える。

「絶対、守るから」

小さな声で本心から囁く。若菜の震えが一瞬治まったような気がした。心でもう一度繰り返し返す――守らねばならない。こんな理不尽で、失いたくはない。そのためなら、何だってしてやる。

響く足音が、突然止まる。階段を降りきったのだろう。恐らく、得物がどこに行ったのかを捜している。逃がさない。そう殺人鬼は叫んだ。息を殺す。扉を睨み続ける。乾燥し始めた眼球に、うっすらと涙が溜まり始める。それでも目を閉じることとはしなかった。瞼を閉じた瞬間に来る。絶対に。それは考えるならあまりにも馬鹿げた話だったが、それでもそうなる確信があった。

相手は悪魔が呼んだ殺人鬼。それを肝に銘じる。殺すためだけに生まれた鬼。

静寂だけが、ずっとずっと辺りに落ちる。息の音すら、ほとんど聞こえない。

カッン。

「……………！」

心臓が飛び出そうになる。それを堪えるように扉を凝視した。来るか。来ないか。それとも焦らし続けて、こちらが痺れを切らした瞬間に殺しに来るか。

死にたくない。だけど、死なせたくない。その思いだけを抱えて、柳は扉を睨み続けた。

静寂は長かった。何分経ったのか、何十分経ったのか、何時間経ったのか。永遠とも思える長い数瞬を忍び続ける。

やがて、歩き出した。

こちらとは、逆方向へ。昇降口のほうへと、殺人鬼は歩き出した。ゆったりとした間隔。体重はないが、足取りは重い。誰かを探して

いるのか、見失って途方にくれているのか。確かめなくなる。殺人鬼が誰なのか。凶器は何なのか。何で殺そうとしているのか。それら全て、扉を出て確かめなくなる。それでも柳は感情を押し殺した。

「……………」

ずっとずっと、待ち続けて。足音が聞こえなくなるまで、ずっと息を殺していた。足音が消えても、しばらくは喋ることができなかった。

「……はあ」

五分数えても音は聞こえない。ようやく柳は深く息を吐いた。助かったのだろう。足音は昇降口へと向かっていった。反響していた音の弱まり方からしても、もう近くにはいないだろう。床に棒を突き立てる。それに全体重を預けて、柳は脱力した。

「……どうする？」

どうするか。そう誰にでもなく問いかける。さっきまでいたバカや、話したこともない少女とははぐれてしまっている。彼らを捜すべきなのだろうか。それとも無視して殺人鬼から逃げ続けるのか。もし見えない何かが答えを教えてくれたのなら、自分は神だって悪魔だって信じてやれそうだったが。

「……おい、若菜？」

ふと気づいて、背後を振り向く。若菜が何も言ってこない。不自然なほど、彼女は口を閉ざしていた。こちらを見てすらない。聞こえてすらいなかったのか。ただその顔はひどく無表情で、そのくせこれ以上ないほどに青ざめていた。

はたから見てもそうだとわかるほど震えている。その震える手で、彼女は教室の中を指差した。

「や、やな、やな、ぎ……あ、アレ、アレ！」

歯の根が合わないのか、彼女の声は途切れ途切れに響く。何かに怯えている。でも何に——問いかけと回答は一瞬だった。声は出せない。その代わり、心の中で柳は叫んでいた。

（敵か！？）

恐怖の源泉などそれしかない。理解と同時、その方向を反射的に睨みつける。

汗で濡れた棒を構え。指されたその先を凝視して。

そして彼は絶句した。

死体が一つ。淡い闇に溶け込むようにして、眠っていた。

右を見て、左を振り返る。前を見て、肩越しに後ろを見やって。そして最後に天井を見上げて、バカを名乗った少年は途方に暮れた声を上げた。釣られて天井を見上げる。

「はぐれちった」

一階の、廊下。その天井を睨みつつ、橙香は思いっきり心の底から呻く。

「……バカですかあなたは」

本心から呆れるしかなかった。が、彼は特に何も思っていないのか、肩をすくめるだけ。殺人鬼がいるというのにあまりにも暢気すぎる反応だった。

それに毒されたのか、自分も人のことを言えるほど慌てたりはしなかったものの。

はぐれた。その過程をもう一度思い出す。その行為自体は必要でもなかっただろう。ただ単に沈黙を嫌っただけだ。何もしていない時の沈黙を。だから思い出す。

誰かの足音が響いて、若菜と名乗った同級生の、友達らしい男――恋人なのかもしれない――が、逃げ出した。そして西階段のほうから追ってきた殺人鬼から逃げるために、東階段を下りていった。そこまではよかったのだ。そこまでは。

「というよりも、運動不足です。遅すぎです、いくらなんでも。だからはぐれるんですよ」

はぐれたというより、置いてかれたといったほうが正しい。彼女らが三階の踊り場にいた頃、彼は階段を下りていなかったのだ。性

格と運動能力は正しく比例するもののだろうか。暢気だから遅いのか。考えてから否定する。だったら狂気の殺人鬼が一番足が速いことになりそうだった。

彼は天井を見上げたまま、よくわからない文句をぼやいてくる。

「帰宅部なめるなー、運動至上主義はんたーい」

「私だって帰宅部ですよ」

間髪いれずに言い返す。と、彼はそれで沈黙したようだった。特に文句を思いつかなかったらしい。それはどうでもいいことだった。

(……何なんでしょね、彼)

違和感。彼を見てると、まず真っ先にそれに襲われる。性格、感情、言動。その全てが、人としてどこかずれている。殺人鬼に怯えず、状況にひるまず、いつでもどこか他人事のように呟いている。行動だって正直おかしい。はぐれたのに、彼はそんなことなどまるでどうでも良い事のように扱っている。

そもそも考えれば、あの時本気で走っていたのかどうかも怪しかった。教室から階段まで、百メートルもない。もし仮にあの男がオリンピック級の運動能力を持っていたとしても、見失うなどという事はないのだ。たとえ目で追えなくても、この静寂では音が響く。どこに行ったかくらいは見当がつく……

もし仮に。

(はぐれることが、目的だったとしたら?)

あの足の遅さも納得できるだろう。わざわざ早く走る意味もない。殺人鬼から逃げつつ、彼らからはぐれる。はぐれることで得られるメリットは何だろうか。それがわからない。だから思考を保留して辺りに気を配る。追いかけてきた殺人鬼はもう足音も聞こえてこない。何処かに消えた彼らを追っていったのだろうか。

(……え?)

殺人鬼。ふと思いついたのは、あまりにも馬鹿馬鹿しい答えだった。それは真の意味で、命を天秤にかけた賭けでもあった。

二兎を追うものは一兎も得ず。殺人鬼の矛先を、彼らか自分、そのどちらかに向けさせようとしたのかもしれない。いや、もし殺人鬼が狙うなら、確実に数の少ないほうからだろう。それに、遅れていた。殺人鬼からすれば、彼は格好の獲物だったはずだ。

（標的を、自分に向けさせようとしていた？）

「まあ、それはいいんだけどさ」

「はい？」

突然彼が呟いてきた。返事をして視線を彼に戻すと、未だに彼は天井を睨み続けていた。今度は意識的に、その先を見上げる。灰色の天井。浮かび上がったのは一部で、その大半は闇に飲まれている。反響しているように聞こえる声は、本当はその闇の声なのではないか。その夢想を振り払うことはできなかったものの。

声帯と反響。二重の声音で、彼は闇と共に問いかけてきた。

「僕が遅れてることに気づいてたのはともかく、なんで君まで彼らからはぐれたのさ？」

「……はい？」

わけがわからず訊ね返す。と、彼はようやく天井から視線をこちらへと向けてきた。薄闇の中に浮かぶ彼の顔には、若干の戸惑いと怪訝が浮かんでいる。眉根を寄せて、彼は本当に理解できなさそうに呟いた。

「いや、だからさ。遅れてた僕とは違って、君は普通に彼らと一緒に走ってたじゃないか。つまり、君がはぐれる……理由、じゃないな。意味とも違う……えーと、君が選ばない限り、彼らとはぐれることはなかったわけだ」

適切な言葉を思いつかなかったのか、彼は困ったようにお茶を濁して、別の言葉を選ぶ。だが言いたいこと事態はそんなに変わっていないようだった。

「まあ、単刀直入に言う……なんで彼らについていかなかったのかって聞きたいんだけどね……んー、やっぱりニュアンスが違うんだよね。なんて言えばいいんだろ」

「なんで、彼らではなくあなたを選んだのか？」

「……それ、なんかラブコメくさい」

呆れというよりは苦いものを食べた子供のような顔で、彼は呻いてくる。ラブコメが嫌いなものかもしれない。その少し子供らしい反応に苦笑しつつ、橙香は視線を彼以外の何かへと泳がせた。

確かに、今となっては疑問でもあった。

メリットデメリットの話で考えるのであれば、まず人数が多いほうが安全でいられる。殺人鬼と対峙してしまった時、明らかに二人よりも三人のほうが有利だ——逃げるにしても、闘うにしても。それに、彼はあまりにも貧弱のきらいがある。武器も持っていない。いざという時に彼が役に立つかと問われれば、素直に首を捻るだろう。

人柄で考えたにしても、彼を選ぶのはおかしい話だろう。彼はどれだけ控えめに評価してもわけがわからない。何を考えてるのかわからないし、異常に適応しすぎている。それは本来なら不気味でもある。その不気味さは、彼らにはないものだ。あの男にしても、若菜と名乗った少女にしても。

では、何故そんな彼を選んだのか。それにまた苦笑する。彼にではなく、自分にだった。

（それしか思いつかなかったんです）

彼が遅れていると気づいたときには、自分も彼らから離れていた。それがもつとも自然だと思えたのだ。もちろんそんなこと声には出さないし、出せない。それこそどこかのラブコメだった。何故彼を選んだのか。今となっては疑問であり——それでも、同時に答えのない確信だけはあった。

たぶん、彼と一緒にいたほうがいいのだと。

「気にしないでください。特に理由はありませんから」

「……まあ、いいけどさ」

無然とした面持ちで、彼はふてくされたように呟いた。そのまま昇降口のほうへとテクテク歩き出す。暗闇のせいかな、速度はそんな

に早くなかったものの。

「……彼らとは合流しないんですか？」

「捜して見つかるものでもないでしょ。適当に歩いてれば見つかるかもしれないし」

「まあ、そりゃそうですね……どこに行く予定なんですか？」

「別棟。昇降口経由しないと」

言われて、校舎の地図を頭に浮かべる。タの字と9の字を足してちょうど二で割った形。昇降口を経由しなくても、真ん中の廊下から行けると思うのだが。

疑問を察知したのか、彼は質問よりも先に答えてきた。

「実を言えば、職員室にも寄りたいんだ。だから、昇降口」

昇降口の隣に、職員室はある。確かに職員室が目的なら、昇降口経由のほうが近いのだろう。それについて異論はない。

問題は、何故職員室に寄っていかうとしているのかということだった。それを訊ねる。

「何ですか？」

「マスターキー。隠れるにしても何にしても、入れる教室が多いことに越したことはないでしょ」

「……職員室も鍵かかってるのでは？」

それは当然の疑問だったが。彼は肩をすくめて、どうでもよさそうに答えてきた。

「外に電話繋がるかどうか試した時に入り込んだから、それは大丈夫だよ。まあ、その時はマスターキー拝借する予定もなかったんだけどね」

そういえばさっき、彼らと一緒にいたときにそんな会話をしていたような記憶がある。合流する前、彼はいろいろと動いていたらしい。それを聞きたいとは思わなかったが。

聞かなきゃいけないことはある。それを思い出して、橙香は声を上げた。

「ところでですね」

「ん？」

声に反応して、彼は足を止めて肩越しにこちらを見やる。顔に表情という表情はなく、どこかのほほんとした顔が見えた。今は特に何も考えていなさそうではあったが。

「本当に殺人鬼なんているんですか？」

あのメールを受け取ってから今まで、ずっと疑問だったのだ。悪魔。別段それについて口論するつもりはない。証明することが不可能な存在についての口論は不毛だ。たとえ胡散臭くても、意味のない事は考えないことにする。問題は殺人鬼だった。

人を殺す前の存在は、予備軍であっても殺人鬼ではない。人を殺したから殺人鬼なのだ。それについては疑うべくもない。殺人鬼。人を殺したからそう呼ばれる。だけど、殺された人はどこにもいない。死体はもとより、その痕跡も。

だが彼はそんなことなどどうでもいいのか、暢気にきっぱりと告げてきた。

「いたじゃん、今」

「私たちみたいなの……えーと、犠牲者？　かもしれませんよ？」

「……犠牲者が逃がさないなんて叫ぶかなあ、普通。常識的に考えるなら、待ってくれとかだと思うけど」

「そこは……ああ、ほら。ホラー映画ですよ。幽霊でもゾンビでも何でもいいですけど、逃げ出した友達に置いてかれた人が叫ぶじゃないですか。逃げないでー、とか。あんな感じで」

「……心からそう思ってる？」

「……すみません、思っていないです」

だろうねと、彼はため息を吐く。そしてそのまま歩き出した。置いてかれないようにについていく。それでも足取りは慎重だったため、置いてかれることもないだろうとは思えたが。

「……あ、そうだ」

突然彼はそんなことを呟いて足を止めた。それからキョロキョロと辺りを見回す。見えるのは結局ただの細長い教室棟の廊下だった

だろうが。

「どうかしたんですか？」

そう聞かれることを想定していたのかもしれない。彼はちょうど隣にあった一年一組の教室を指差して、呟いてくる。

「いや、蛍光灯を取りに行こうかと」

「蛍光灯？」

繰り返すと、彼は感情のない声で答えてきた。

「蛍光灯なら簡単に割れる。武器にもなるしね」

「割れたら武器にならないと思うのですが。普通は竹刀とか……せめてモップとか」

「いいんだよ、武器なんてオマケなんだから。簡単に割れるから欲しいんだよ。竹刀もモップも簡単には割れないし。そもそも大きな音でないし」

「……？」

思わず眉根を寄せる。蛍光灯を割るのが主目的ということなのだろうが、その理由が思いつかない。武器よりもそちらのほうに重きを置く理由は。

訊ねるよりも早く、答えは簡単に帰ってきた。

「割れば、危険があるって知らせられるでしょ？」

「助けを呼ばいいじゃないですか。叫ぶとか、悲鳴を上げるとか」
わざわざ蛍光灯を割る必要があるとも思えない。言い返すと、彼はあからさまに苦笑したようだった。

「さっきも言ったけどさ。悲鳴を上げるのは重労働なんだよ。思いつきり息吸って、思いつきり吐く。そんな面倒するよりも、蛍光灯地面に叩きつけたほうが早いよ」

「……そういうものですか？」

問いかけるが、彼は肩をすくめるだけだった。話はそれで終わりというように、教室の扉を開けて、中に入っていく。

「……」

が、突然彼が立ち止まる。何かを見つけたのか、青白い光に照ら

された表情は険しい。中を見てもみるが、ここからでは闇が濃くて見えなかった。彼には見えているのだろうか。

数秒、不自然な沈黙が訪れる。何か見つけたのかと声をかけるよりも早く、沈黙を破って彼は呟いていた。

「ああ、そうそう……そうだった。殺人鬼だけどさ」

殺人鬼。唐突な切り出しと共に、彼は闇の中へと消えていく。

「知りたいなら、この中に入ってくるといい。知りたくないのなら、来なければいい。選択肢くらいはあげるよ。ご自由にどうぞ」

「……？ 何を言って」

その声を、遮って。

やっぱりいつもと変わらぬ暢気さで。

「死体。ネクタイがない。首切られて死んでる」

片手で蛍光灯を振り回す。長さ一メートル。握り締めたらそれだけで壊れてしまいそうな、乳白色のガラス。その重さを確かめるように何度か振り回して、のんびりとぼやいた。

「……頼りないねえ、やっぱ」

「今更だと思えますけど」

「まあ、そうなんだけどね」

ため息混じりに、少女の呆れに同意する。確かにその通りだ。ガラスの時点で武器とするのに頼りない。漫画のガラスは見えない武器として活躍してくれるのだが、さすがに誰もこの脆さを武器にしようとは思わないだろう。しかも乳白色だ。透明じゃない。

それを最後に一回振り下ろして、彼はため息をついた。

「後手後手なんだから仕方ない。危険が来たら割るんだもん。頼れる武器なんて、そもそも使い手次第だしね。僕が使ったって意味ないし」

さすがに、仕方のないことだ。もともとの目的を考えれば、これ以上は望めない。これ以下もない。これ以外に選択肢などないのだ。

時計や携帯同様、一つの道具に一つの道具以上の性能を求めるべきではない……

と、身を案じるような声。

「やっぱり、モップのほうがいいんじゃないですか？」

「君、モップ地面に叩き付けて割れる人？」

「……そんなバケモノに見えますか？」

「……だよねえ。いや、モップで大きな音出せるんだったら別にそれでいいんだけどさ」

大きな音を出さなければ意味がないのだ。危険を伝える役目だけは、何があっても果たしてもらわないとならない。好き嫌いなど言われてられないのだ。

「まあいいや。これ割ったらどこでもいいから逃げてね？ 携帯で辺り照らすのも禁止。一目散にどこかにダッシュ。オーケー？」

「……まあ、別にいいですけど」

そうは言うが、彼女は何故かものすごく不服そうだった。というか、不服そのものだった。眉間に皺を寄せて、不満を声にくる。

「どうせなら、殺人鬼と戦えばいいじゃないですか。逃げるための一手を考えるよりも手っ取り早いと思いますけど。ゲーム的にも」

「……えー？ 僕が？」

「他に誰がいるんですか」

呻かれて、辺りをキョロキョロと見回してみる。先ほどの教室からはもう離れている。今は昇降口の前。乱立する下駄箱の群れが、闇しかない外への視線を阻んでいる。それ以外は大して変わらない廊下だ。特に見るべきものもない。特に何かがあるわけでもない。

それらをひとしきり眺めた後、ポツリと呟いた。

「あの今時少年とか」

「……いない人に期待してどうするんですか」

「大概の物事っていうのは、僕に関係ないところで進行してるものなんだけどね」

世界の主人公は自分ではないのだ。そんなの誰でも知ってるあり

ふれた話である。何かを成すのは自分でもいいのだ。戦うのだって、逃げるのだって、自分以外の誰かがすればいい。自分は考えるだけでいい……

（とは言うけどね。もう、するべきことはわかってるんだ）

殺人鬼が誰なのか。それをこの闇の中を探し回って当てる。といっても、それはあまりにも難しいことのように思えた。死体は転がっている。殺人があったことを明確に示すものは、捜せばそこ辺に落ちている。

ただそれだけなのだ。それだけ。そこから先は何もない。ここにいるのは警察ではない。ただの無力な高校生なのだ。指紋鑑定をする道具もなければ、死体検証のスキルもない。それにアリバイなんてあってもなくても同じものだ。簡単に捏造ができる。殺人鬼を推理する方法などどこにもないのだ。方法はただ、目撃するのみ。それもこの闇だ。それに顔を隠していれば、目撃しても意味がない。

勝つ方法はないのではないか——何となくそう思ってから、彼はそれを否定した。方法ならあるのだ。最強最高最低最悪にして、もっともお手軽な方法が一つ。といっても、それは言葉としてならお手軽というだけであって、行動に移すとやっぱり最強最高最低最悪だった。

（それ以外には……自殺を選ぶのもね。まあ、一番楽な方法ではあるんだけどさ）

苦しいんだろうなあ、とは思う。学校で痛みなく自殺することなど、十中八九不可能だろう。化学準備室にでも行けば怪しい薬品がいっぱいありそうだが、それが死に繋がるかどうかは別問題だ。

ある種、八方塞。塞がったものにさじを投げて、彼はどうしても良い事を呟いてみた。

「とりあえず、体育館に行ってみたくなった」

「……何ですか？」

「いや、何となく……今ふと考えただけどさ」

「？」

「体育館って、死体収容所っぽいよね」

本当に意味もなく呟く。が、呟いてから意外に意味があるような気もしてきた。死体がいっぱいなら、手がかりがあるかもしれない。実際には死体を見ても何もわからないだろうが、何となく何とかなるような気がしてくる。

死体。ふと、さっきの死体を思い出した。ネクタイのない、首を切られて死んでいた死体。何故ネクタイがないのか――それと並行して、一つ、さっきから考えていることがある。何かが足りないのだ。決定的なものが。それが引かかっている。困りものだったが、答えは当分の間出そうにない。

仕方ないから諦めて、彼女の言葉を待つ。しばらくは無言だった。長い長い沈黙の中、ただ不自然に時間だけが流れる。

気になって、彼は呟いてみた。

「……独り言じゃないよ？」

「知りません。黙っててください。というか、不必要に不安を煽らないでください」

「……煽ったかなあ」

純粹に首をかしげる。ただ単に思ったことを行っただけだと思うのだが。彼女はなぜか思いっきりため息を吐いたようだった。といっても、背後にいるのでその姿が見えたわけではないが。

「……………」

無言。足音だけが無駄に響く。何故か我慢比べのようだった。が、黙れと言われてしまった以上、喋るのものはばかられる。無言を突き通して、彼は職員室へと歩いてく。

「……………」

「……………」何か喋ってください」

だが、あっさり勝負が終わる。どうやら、彼女は沈黙を耐えるのが苦手なようだった。呆れと苦笑をない交ぜにして、呟く。

「注文が多いねえ」

「……誰のせいだと思ってるんですか」

「誰のせいだろ？」

とりあえず妥当なところは、悪魔と殺人鬼か。それ以外はあの今時少年と少女だが、さっき彼女が言ったように、いない人に期待するのも違う気がする。結局思いつかなかったから、彼は話題を変えらることにした。

「あー、そういえば、山小屋効果って知ってる？」

「山小屋？」

「雪山でもいいよ。あと、漂流効果でもいい」

「……全部聞いたことがないんですけど。それで？」

「遭難したりして食料がない時に嫌いな食べ物を出されると、皆喜んで食べるらしい。こう、何か感涙しながら。何でかわからないんだよね、どうにもさ」

「……いや、食べますよそりゃ。感涙はともかく」

「嫌いなのに？」

「……………そこ、疑問ですか？」

「そういう言い方だと、僕が非常識みたいだ」

「……いや、非常識でしょう」

呟いてから、彼女は嘆息した。どうやら呆れたらしい。呆ればばかり浮かべているような気もするが、何故彼女がそんなに呆れるのか、理由は何いつかなかった。たぶん殺人鬼か悪魔か、時計か携帯のせいだろう。

その呆れ声のまま、彼女は言う。

「第一、そういう『何とか効果』なら、真っ先につり橋効果が出てくるべきだと思うんですけど。怖いところにいると、それが恋愛感情に変わるとか何とか」

「……えー？ ただの自己暗示じゃん」

「暗示ですか？」

「逃避とも言うね」

「……バツサリですね」

「だって、そんなもんだし」

そこで今度はこちらが嘆息する。不謹慎なことこの上ない。恋愛関係をこの場に持ち出せる彼女には、正直なところ敬意を払えそうなのがしてきた。女の子は、こういうときに強い。

「そういえば、あなたの名前は？」

と。彼女も突然話題を変えてきた。あまりの不意打ちに、思わず後ろを振り向く。そこには想像したとおりの形で、彼女が携帯を持って立っていた。表情は、特に何かしらの感情を浮かべていなかったものの。

「いいじゃん、『考えるバカ』で」

「呼びにくいんですよ。短縮してバカって呼びますよ」

「……それは辛いねえ。まるで僕がバカみたいだ」

「……いや、もう何も言いませんけど」

何故かげっそりと呻かれる。

自分の名前。カラスを連想させる、あんまり好きじゃない名前。そもそも何故彼女がそんなことを気にするのか、よくわからなかったが。出し渋るように、彼は呟いた。

「……人の名前を聞くときは、まず自分からって言わない？　というわけで」

言わない、と続けようとしたところで、彼女の声。

「一年三組、あかぎりとうか。橙の香りと書いて、橙香と読みます。これでいいですか？」

「……失敗」

「何がです？」

「いやこっちの話」

そう呟いて額を押さえる。まさか、素直に答えるとは思ってもしなかった。最近の女子高生はプライバシーをもっと考えるべきだと思う。少しは自分の身を案じるべきだ。特に赤の他人なんかは名前を明かすときなどは。だから悪魔に名前を呼ばれるのだ。

「それで、あなたの名前は？」

どっちにしても答えなければいけないらしい。彼は暗鬱にため息

をついて、天井を見上げた。名前を言うのは嫌だが、彼女に疑われるのも面白くない。

諦観と共に、彼は答えた。

「二年二組、灰乃 黒羽……黒い羽だよ、黒い羽」

「……先輩だったんですか？」

「まあね。残念ながら、そう見られないのが玉に瑕なんだけどね」
「どうにも、外見が問題らしい。まあ、そんなことはともかくとして。」

「……くろは？ また、不思議な名前ですね」

彼女の言葉に、またため息。廊下に、黒羽の声は驚くほどよく響いた。

「カラスとか、悪魔の翼っぽくてね……あんまり好きじゃないんだ、この名前」

そして呟く頃には、職員室の前まで来ていた。

4 踊るネズミたち・決意編。

期待していたわけではなかった。そう呟いて、柳は苦々しく否定した。

期待していたのだ。そして期待すること自体が間違っていたのだ。それでも期待してしまったのは――単に、この環境に適応してしまったからなのかもしれない。

期待。いいや、それは確信だった。これはゲームだと悪魔は言った。ならば、それはあつてしかるべきもののはずだった。舌打ちする。それが理不尽な行為だと理解しながらも。苛立ちにもよく似た思いで、柳はもう一度だけそれを睨んだ。

死体。青白い血の氣のない顔。どこかで見たような氣もするし、見たこともないような氣のする男の死体。首を切られて、死んだ男が一人。舌打ちを彼らにとっての理不尽とするのなら、この仕打ちこそが自分にとっての理不尽だった。心の底から、本当にそう思う。何もなかったのだ。殺されて、この教室に横たわっていて。それを自分たちが発見して。それでお終いだ。むざむざ殺されただけ。殺されるくらいなら、少しくらいは犯人の証拠となるものを持っていてもいいではないか。なのに何も持っていない。証拠はもとより、思考材料さえ何一つ。

ゲームだと言うのなら――もしこれが、悪魔との魂をかけたゲームだと言うのなら。

それなら、たとえどんなに理不尽であっても、わずかの証拠くらい残しておいてもいいではないか。殺人鬼を当てることなどできない。勝つには、自殺するしか方法がない。

これでは、まったくゲームにならない……

「……クソ」

――これは悪魔のゲーム。誰も生きて帰れない……

思い出したのは、あの遺書だった。悪魔のゲーム。生きて帰れな

い遊戯。勝ち目などなく、殺されるか自分で死ぬか。ただその二つだけを選ぶことしかできない。本当にそのとおりだと言うのなら、確かにこれは悪魔のゲームだった。勝ち目などどこにもない。あるのは絶望だけだ。本当にゲームにならない。理不尽以外の何物でもない……

「負けてたまるか」

それだけ呟いて、死体から視線を外そうとする――その寸前。ふと気づいて、柳は視線を止めた。死体を凝視する。違和感があった。それも、見落としてしまいそうなほどに小さな。何かが足りない。

「……校章がない？」

襟元にあるはずの校章がない。それに吊られて思い出す。首を吊っていた男。あの男のカフスボタンもなかった。何のために奪ったのか。校章がないのは何を意味するのか。考えても、答えは見つかりそうになかったが。

「……これが付け入る隙なのか？」

どちらにしろ、これ以上の収穫はないだろう。諦観と共にそれを認めて、柳は教室の外へ出た。どこもかしこも静まり返っている。

闇の中、浮かぶ影が一つあった。その影がこちらに気づいて、問いかけてくる。

「何かわかった？」

若菜だった。顔にはわずかながら期待の色。気は引けたが、柳は偽らずに告げた。

「首を切られて死んでる。たぶん凶器は刃物。死体の校章がない。」

それ以外は何も」

「……そっか」

「……ああ」

それだけ呟いて、お互いに沈黙する。何を話すべきなのか。何をすべきなのか。それがわからなくて、柳は虚しい思いで天井を見上げた。

何かをしなければならぬ。それはわかっている。悪魔に勝たな

ければならない。殺人鬼を当てなければならぬ。それくらいはわかってる。だが、何をすればいいのかわからなかった。勝ち目などないのかもしれない。もう一度だけ、その虚無感を思い出す。それはこの闇によく似た絶望だった。先が見えない。暗中模索も、意味などないのかもしれない。

もし仮に、あの暢気すぎたあの男がいたのなら。もういない人間のことを考えるのはあまりにも愚かではあったが、それでも考えずにはいられなかった。あの男がいたのなら、この状況に対して何と言っただろうか。的外れな呟きのようでいて、きっと要所を押さええた言葉を言うに違いない。はぐれてしまったことを、今更ながらに後悔した。

「……どうしょっか、これから」

それは突然の呟きだった――慌てて視線を若菜に向ける。若菜は無表情のまま、何かを堪えるように床を睨んでいた。不安のために呟いたのか、それともこれからをただ単に確認したかっただけなのか。その判断はつかない。

どうしようもない孤立無援。状況は絶望的。ただ近くに殺人鬼がいないだけで、何一つ変わっていない。最初に逆戻りだ。

完全な八方塞。どうしようもなさ否定するように、柳は答える。

「分かりきったことを言うなよ……勝つ。それで、さっさと帰る」

「……そうだね」

どうやって勝つのか。それを若菜は訊ねては来なかった。ただ何かを決意したように頷くだけ。何かを決意したのか――それはわからない。だが、柳もそれを見て意志を固めた。

勝つ。棒を握り締める手が戦慄くのを感じた。

殺人鬼の推理はできない。それはもう理解したことだ。証拠がなければ、推理などできないのだから。ならばこそ、やることは一つしか残ってなかった。

「殺人鬼を捜そう……捜して、正体を暴く」

逃げなければ良かったのだ。あの時。あの時が最大のチャンスだ

った。また後悔する。その後悔を踏み台にして、柳は呟く。それで終わりだ。

「……行こう」

「……うん」

頷いたその声を聞いて、柳は歩き出す。

殺人鬼がいる闇を、正面から見据える。逃げ出す必要はない。ただ、殺される前に正体を暴くのみ。それが勝利の方法だというのなら、このゲームはただの賭けでしかなかった。殺されるか、それまでに正体を暴き、逃げ切るか。ただそれだけの賭け。

それでも、勝つ。そう決意して。

——誰かの悲鳴と、ガラスの割れる音を聞いた。

「うえ？」

突然の悲鳴に思わず呻く。悲鳴ということは、まあ、何かしらのアクシデントに遭遇したということなのだろうが。女の悲鳴だった。ということは、さっきのあの少女だろうか——それとも、五人目か。どちらでもありえそうだったが。

「……悲鳴だねえ」

事実だけをとりあえず呟く。と、返ってきた声の一つ。

「……あなたのせいだと思いますけど」

非難するような、というよりもそのまんま非難する声で、後輩らしい少女が言ってくる。が、その声もどこかぼやけている。それも仕方のないことではあった。

「いくらなんでも、欄間のガラス叩き割るのはどうかと思います」
扉を挟んで向こう側。職員室の外から彼女の声は聞こえてきていた。言われて欄間とやら——入り口の上に取り付けられた換気窓を見る。そこには小さいガラス窓があるはずだった。あくまで過去形だ。今そこにガラスはない。黒羽が叩き割ったからだ。

「だって仕方ないじゃん。ここしか入る場所ないんだし」

「だからって、もう既に一つ割ってあったじゃないですか。割る必要がどこにあったと？」

「中に誰か隠れてたら怖いじゃん。牽制だよ、牽制」

「……結果が、たぶんあの悲鳴だと思っただけです。いきなりあんな音聞こえたら怖いですよ。誰だって驚きます」

「……僕のせいなの？」

それだけ呟いて、視線を室内に戻す。携帯は今後輩が持っている。明かりとなるものはない……今度こそ、本当の闇が広がっている。放送室の闇との違いは、せいぜい振り子時計の音がないことくらいだろう——いや。

あの音に包まれた闇と、この闇との違い。それはもうわかっている。

（殺人鬼がいるかもしれない闇）

完全に閉ざされたままだった放送室とも、換気窓を叩き割る前の職員室とも違う。誰かが潜んでいるかもしれないのだ。無人の証明などできない。誰かが潜んでいる可能性も、誰も潜んでいない可能性も等しく無尽蔵。

闇の中では、きっと殺人鬼を相手に戦うことなどできないだろう。いくら夜目が利くとはいえ、この闇の中平然と殺人を犯す殺人鬼を相手にするのは不可能だ。手元の蛍光灯を割る余裕があるかどうか。それだけが気かりではあったが。

これ以上外で彼女を待たせるのも酷な話だろう。ため息を一つついて、黒羽は入り口の隣を見た。そこには胡散臭いほどの数、教室や準備室を開ける鍵があるはずだったが。

「……ない？」

マスターキーはもとより、鍵など一つもない。さっきここに来た時はあっただろうか。最初からなかったのか、それとも。思い出すとするが、そもそもそんなところを見た覚えがなかった。

もし、最初からなかったとするのなら。まあ、それは諦めるしかないだろう。

では、もし黒羽がこの部屋を去った後、誰かが鍵を持ち出したとしたのなら。

家庭科室を開けられたら、包丁を持ち出されてしまう。化学準備室を開けられれば、様々な薬品が殺人鬼の手に渡ることになってしまう。鍵を閉めれば安全でいられた場所も、安全ではなくなってしまう……安全な場所など、一箇所を除いてどこにもない事になる。それは黒羽にとって、あまり喜ばしくないことだった。思わず呻く。

「うわ……やられたかもなあ、これ」

「? どうかしましたか?」

呻きに反応して、彼女が問いかけてくる。さっきまで散々暢気だと言われた気もするが、今となっては彼女のほうが暢気なように思えてきた。現状を放置して時間戦争について考える余裕もなくなっってしまったわけだ。

「どうしたもなにも」

呆れを伴わせて呟きつつ、よじ登るための準備として蛍光灯をくわえる。これ以上の職員室の長居は不要だった。殺人鬼がいるかもしれない闇の中、暢気にくつろぐことなどできない。考えごとをするにしても、警戒と同時にではかどらないだろう。

「ふおっほいへ」

どっこいせと掛け声を上げて、無理やりよじ登る。割った窓ガラスで手を切るかと危惧したが、痛みはない。よじよじよじ登って、ぴよこんと飛び降りる。膝で衝撃をいなして、最後に口から蛍光灯を外す。

「……蛍光灯を口にくわえるの、危なくないですか?」

携帯で後輩がこちらを照らしてくる。その眩しさに目を細めつつ、適当に呟いておいた。

「仕方ないじゃん。置いてくるのもなんか違うし」

「こっちに置いていけばよかったじゃないですか」

「それだどこっちに危険があった時、知らせられないよ」

それでは意味がない。

「まあ、それは置いておいて」

ため息をついて会話の流れを変える。本題はそんな事ではないのだ。これ以上暢気に振舞ってもいられない。真面目な表情を意識的に作り上げて、黒羽は暗鬱に事実を呟いた。

「鍵、全部なくなってたよ」

「……え？」

予想外だったらしい。後輩は露骨にポカンとした顔で間拔けな声を漏らす。それに肩をすくめて、黒羽は先を続けることにした。

「マスターキーから何から全部すっからかん。何にも残ってなかったよ。誰かが持ってたのかもね」

「……誰がですか？」

「さあね。悪魔が奪ったのか、それともさっきの今時少年が持ってたのか……それ以外もありえそうだけど、有力なところはそれくらいかな」

もしかしたら、いまだ知り得ぬ五人目が持ってたのかもしれない。だとしたらイレギュラーなことこの上ないが。

「まあ、いいや。とりあえずガラス割っちゃったしね。誰かが来る前に移動しよう」

「割っちゃったって……何自分で割っというて人事みたいに呟いてるんですか」

「だって、他人事だし？」

少なくとも、誰かがここに来る前に移動してしまえば本当に他人事である。ばれない犯罪は犯罪でないのと同じように、知られない行動は完全に他人事なのだ。

「……はい？」

が。後輩はどうやらそれが理解できなかったらしい。思いっきり胡散臭そうな半眼で見つめてくる。そろそろそういう類の呆れにも慣れてきた頃だった。だから、特に何も思わずに話題を変える。

「さて……今度はどこに行こうか。目的もなくなっちゃったし」

目的のマスターキーももうここにはない。たぶんもう手に入ることもないだろう。だとしたら、いろいろと面倒なことになりそうではあるが。特に何も思い浮かばず、黒羽は頬をかいた。生温い感触が、頬を濡らす……

（濡らす？）

素直に疑問だった。濡れるようなものはここ一時間持った記憶はない。不思議な気分で、黒羽は闇に自分の手をかざしてみた。薄い闇の中、ぼんやりと右手が照らされていく……

「な……ちょ、え？ 先輩！？」

結果。何故か、後輩が慌てだした。そちらと自分の腕を交互に見やる。後輩の動きにあわせて揺れる携帯の光が、何度か右手を照らしていた。それでようやく自分の状態を理解する。どうやら、闇は自分という存在そのものを希薄にしようらしい。

手のひらから出血。怪我したのに、どうやら自分は気づいていなかったらしい。それに苦笑するよりも早く、後輩は悲鳴にも近い声で問いかけてきた。

「いつ怪我したんですか、それ！？」

「まあ、たぶんさつきだろね」

無理やりよじ登った時。あの時の危惧は正しかったわけだ。怪我を視認できないということは、怪我を理解できないのと同じことなのかかもしれない。さすがにそれはあまりにも馬鹿げた話ではあったが——たぶん、切り傷だから気づかなかったのだろう。それか、怪我を理解できないほどにテンパっていたか。後者はありえそうにもなかったが。

熱によく似た痛みも出てきたが、幸い左利きなので蛍光灯を振るのに支障はない。出血具合は手が血で濡れる程度。出血の箇所は手のひら。だが、気にしなくても死にはしないだろう。放っておけば止まるとも思えなかったが、この際無視することにした。

また、ため息を一つ。適当に呟きつつ、視線を右手から後輩に戻す。

「ま、これくらいはどうでもいいよ。それよりも――」

先のことを考えよう。そう言おうとして、自分の考えが甘いことを思い知らされた。

「よくありません！ 少し待ってください、確かハンカチが……」

やっぱり悲鳴に似た声で、後輩は思いつきり否定する。それに面食らって目をしばたかせる頃には、後輩はポケットをまさぐり始めていた。が、やっぱり個人的にここで立ち止まってるのもいただけない。とりあえず呻くことにした。

「んー……どうせ夢なんだし、ほつといてもいい気がするんだけどなあ」

「夢じゃなかったらどうするんですか」

「……どうしょっか？」

というか、どうしようもない気がする。確実に傷は残るだろうが、まあ、見方を変えればその程度なのだ。傷くらい残ったってどうでもいいし、わざわざ手のひらの傷程度が問題になることもないだろう。手首じゃないのだから。

そこら辺は同じ考えだったのか、或いは考えることを拒否したのか。後輩は不機嫌ながら律儀に問いかけに答えてきた。

「知りません。ほら、いいから手を」

「汚れるよ？」

「そんなことはどうでもいいです。早くしてください」

有無を言わせてくれなさそうだった。仕方がないので、素直に右腕を差し出す。迸るほど勢いの強くない鮮血は、自分のものだというのにどこか他人のもののように思えてくる。闇に落ちる赤色の液体。その熱を奪い取るように、冷たい感触が手を包んでいく。色はよくわからないが、たぶん白。どこか高級感溢れてそうなハンカチだった。ハンカチってそういうもののような気もするが。それが丁寧に巻かれていく。

その光景を人事のように眺めつつ、黒羽はやっぱり他人事の心境で呟いた。

「普通、こういう状況って立場が逆なんじゃないかなあ……女の子が捻挫とか怪我して、男の子がそれを何とかするっていう」

昔、そんな漫画を読んだ記憶がある。その頃から消えない、ある種の固定観念だった。本当に暢気でもうでもいい思考ではある。だがそれも、特にすることもない今では仕方ないのかもしれない。

「そうですか？ 保健室の先生だって基本女性ですし、小さい怪我なら治すのは女性だと思いますよ？ 手術とかはともかくとして」

と、漫画とかそういうのとは関係なさそうな観点から、後輩。特に否定する理由も思いつかず、黒羽は曖昧に呟いておいた。

「治すのは当事者じゃないかなあ。あくまで処置するだけで」

「そういう細かいことを気にしてどうするんですか……まあ、これくらいでいいでしょう」

少々引つかかる物言い、後輩が処置を止める。手のひらと甲を覆うように巻かれたハンカチは、もう既に薄く赤色に染まり始めているようだった。濡れていく感触。それはひとえに気持ちの悪いものでしかなかったが。

礼は言っておくべきだろう。その程度に考えて、黒羽は素直に呟いた。

「ん、ありがとう」

「あ、あ……い、いえ、どういたしまして」

困ったような照れたような、よくわからない生煮えの反応が返ってきたりもしたが。それについては特に考えず、もう一度だけ、黒羽は自分の右手を見た。

汚れていくハンカチ。これも恨みを持つのだろうか。それとも仕事ができたと胸を張るのだろうか——結局のところ、張ったところでみすばらしい姿を晒すだけのようには思えた。なら、やっぱり恨まれるのだろう。こうして少しずつ、人類は無機物に恨みを重ねていくのか。なら、時間戦争というより無機物戦争と名づけたほうがよさそうな気もしないではなかった。

赤くなるハンカチ。それでふと気づいた。

（……足りないもの、か）

ネクタイのない死体。その違和感。それが何を意味するのか。それが何を導き出すのか。

どちらにしろ、黒羽は暗鬱にため息をついた。何をしなければならぬのか。少しずつ組み立てていく。あくどい方法最低の方法色んなものもひっくるめて、最後を思い描く。

その像の完成の直前、黒羽は小さく呟いた。

「……返せないかもね、ハンカチ」

「？ 何か言いましたか？」

「いや？ ま、そろそろ行こうか。殺人鬼が来ないうちに」

二年一組。二年棟の中で一番昇降口に近い教室。何の変哲もない教室だった場所。廊下からそこを見つめる。何かが特別なわけでもない。何かが変わっているわけでもない……教室は、何も。それでもそこが悲鳴の場所なのだと、虚しい思いで柳は認めた。

「……………」

若菜は何も言ってこない。だから柳も喋らない。不自然な沈黙は、この現状を把握するための沈黙なのだろう。だがそれは、一目見るだけでそうとわかるほどに明確な異常だった。

ただずっと、沈黙する。言葉など必要なかった。それはあまりにも明確すぎて、言葉の意味をなくしてしまうほどの光景だったから。それでも呟いたのは……闇の中、これ以上沈黙に耐えることができなくなりそうだったからだ。恐怖でも畏怖でもなく。

「……また、死体だな」

首吊り死体。入り口を塞ぐように、換気窓から垂れ下がっている。青ざめた顔に血の気はなく、表情も苦痛に歪んでいた。瞳に生の色はなく、ただ濁ったまま虚空を憎々しげに睨んでいる。この寒さの中だというのに、男はワイシャツの上に何も着ていなかった。

自殺者を観察するのはこれで二度目だった。死体を観察するのは

三度目。少しずつ増えていく、最低の経験。悲鳴を上げるほどの焦りも、余裕をなくすほどの驚きもなくなってしまった。

自殺だった。これ以上ないほどに明確で、どうしようもないほどに克明な。自殺だった——それはあるいは意地だったのかもしれない。犯人を当てることができず、それでも悪魔に負けることもできず。もしかしたらそれは恐怖だったのかもしれない。犯人を当てることができず、悪魔に魂を奪われることへの。

どちらにしろ、この死体を見てわかることなど一つだけだった。そしてそれは柳にとってこの上なく苦々しいものだった。

この男は、答えを見つけることができなかったのだ。だから自分で自分を殺した。

悪魔のゲーム。悪魔。存在してはならないもの。非現実的な存在。人をたぶらかし、人を弄び、人を食らうもの。それをもう一度反芻して。ふと、柳は気づきたくないことに気づいてしまった。

これは、悪魔のゲーム。もし、それが。

(もしそれが、勝ち目のないゲームなのだとしたら?)

本当は殺人鬼がわかっていても外に出られないシステムだとしたら。本当は殺人鬼なんていなくて、姿の見えない悪魔が殺しを楽しんでいるだけだとしたら。本当は殺人鬼がわかっていても外に出ることができないのだとしたら。本当は殺人鬼なんていなくて、ただずっと疑心暗鬼に陥れさせたいだけなのだとしたら。本当は自殺しても悪魔に魂を奪われるのだとしたら。

そもそも、何故悪魔の言葉を信じているのだ? ルールを決めた当の悪魔が、そのルールを遵守してない可能性もあるのではないか? ルールを平然と捏造している可能性だってある。

敵は悪魔なのだ。疑い始めればきりがない。きりがなければ、考えても意味がない。意味がないのなら、ここで立ち尽くす必要もない。小さくため息をつく。

結局のところ、自殺するしかないのではないか——その思いを振り払うように、柳は若菜に呟いた。

「行こう」

「……うん」

どこを目指すのか。殺人鬼かあの男たちか、それとも悲鳴を上げた五人目か。その中の誰を捜すのか。それも言わずに歩き出す。捜して会えるものでもないだろう。だから、柳は何も言わなかった。若菜も何も言ってこなかった。

頭の中で、ただグルグルと言葉が回転する。

——そもそも、何故悪魔の言葉を信じているのだ？

死体に背を向けて、歩き出す。

そして、それは突然だった。

トータル、九名。現在の、参加者の存命者、五名。

ヒントを上げよう。踊るネズミにヒントを上げよう。愉快的愉快的なヒントを上げよう。

悪魔はネズミをおもちゃにしている。悪魔は猫と戯れたい。猫はネズミの中に。

悪魔は見ている。悪魔は隠れている。悪魔は偽っている。悪魔は欺いている。

魂が欲しいから、早く早くと待ちわびている。悪魔はずっと待っている。

悪魔はずっと、欺いている。

「……ふーん」

やっぱり暢気な声だった。歩いていた足を止め、天井を見上げ、窓を見て。無駄としか思えない動作の締めとして、先輩は間延びした声と共に振り向いてきた。

「また悪魔……ねえ。ヒントをくれる辺り、親切というよりも嘲笑的というか」

その手の中には、先ほどメールを受信した携帯がある。先に橙香が読んだメールなので、彼がそう思うのには素直に共感できた。

ゲームの開催者が、わざわざヒントを送ってきている。それはひねくれた見方をすれば、開催者側の勝利宣言でもあった。ノーヒントなら、このゲームは自分の勝ちだと。暗にそう囁いている。

それに気づいているのかいないのかはさておき、先輩は暗鬱そうにため息をついて、一言呟いてきた。

「よっぽど暇なんだねえ」

「……暇で片付けるのも、どうかと思いますけど」

「そう？ ヒントをあげるってことは、進展がないことに呆れてるわけでしょ？ つまり、何も変わらないから退屈なわけだ。動かないもの見てたって楽しくないしね。やっぱ暇なんだと思うよ」

「つ……まあ、そうかもしれないですけど」

咄嗟に何かを否定しようとして、ふと反論する意味がないことに気づく。実際確かにその通りなのかもしれない。ゲームは自分の勝ちだとしても、それで終わってしまったては確かに退屈だ。なら、悪魔は暇だったのかもしれない。

そんなことなどどうでもいい。問題は、このヒントの意味だった。ネズミが自分たちのことを指すのはわかる。猫はさっき殺人鬼だと示唆された。そして参加者の中にいるのも当然のことだ。だが、実際殺人鬼についてはほとんど触れていない。問題にされているのは、殺人鬼ではなく悪魔についてだった。

その悪魔についても、触れているのは欺いているということだけだ。参加者は九人、生きている者は五人。なら、もう四人死んだということなのだろうが。

疑問なのは、悪魔が何を欺いているのかだった。ヒントというかわらには、理解してしまえばそれだけでゲームが終わってしまうほどに強烈なものなのだろうが。

「欺いている……？」

何を。誰を。どうやって。どこで。いつ。どのように。それら

べてがわからない。完璧にお手上げだった。

「……というかこれ、本当にヒントなんですか？」

悪態のように呟く。悪魔に聞こえていたらそれはそれで面白くない展開になりそうだったが、呟いてしまった以上、気にしても遅い。仕方なく何かを待つが、それで何かが変わるということもない。

いや。気づいて、それを否定する。

さっきから、不自然に彼が黙り込んでいる。心なしか、表情が陰しいように思えた。何か、考えたくないことを考えているようにも見える。

「……どうかしたんですか？」

「いや……何でこのタイミングでヒントを送ってきたのかと思ってさ」

「……暇だったから、じゃあないんですか？」

「まあ、そうなんだけどさ。殺されたくないから必死こいて僕らが逃げてるのに、暇っていうのもどうかと思うわけだよ」

一つため息。そのまま彼は天井を見上げて、他人事のように言ってきた。

「ホラー映画の醍醐味だって、ゾンビじゃなくて怯えてる人間なのにさ。暇って事はアレだ、僕らが役者じゃ退屈ってことかもね」

「……いや、別にこれ、ホラー映画ってわけじゃないと思うんですけど」

「似たようなものでしょ。少なくとも、悪魔にとっては」

そこでまたため息。

「僕らは、姿の见えない殺人鬼から逃げている。死に怯えていると言ってもいいね。で、これはゲームだ。なら、最低でも悪魔が楽しめるものじゃないとならない……悪趣味だよ、どうにもさ」

「だから悪魔なんでしょう？」

素直にそう言うと、彼は苦笑したようだった。

「まあ、そりゃそうだ。じゃなきゃ悪魔なんて名前もつかないだろうしね……」

天井から視線を下ろし、彼はそのまま肩をすくめる。どちらにしろそれで話すことは終わりだったのか、彼は手振りで進もうと合図を送ってくる。それに頷くと、彼はすぐに歩き始めた。その後を追いつつ、問いかける。

「……ところで、どこに行こうとしてるんですか？」

それはさっきからの疑問でもあった。当初は職員室にマスターキーを取りに行ったのだ。隠れるための選択肢を広げておくために。だが、そのマスターキーももうない。この時間帯で鍵のかかってない場所などないだろう——本来なら、教室も閉ざされているはずだが。きっと教室は例外なのだろう。

だとすると、全ての場所が施錠されていることになる。今いる別棟のほうなど特に絶望的だった。なら、教室に向かおうとしているのだろうか。

問いかけに彼は、振り向くことなく答えてきた。

「んー。とりあえず、一階には用はないね。保健室と美術室と事務室には興味ない。入れないのは知ってるし。用事があるのは二階かな」

「二階？」

二階にある部屋といえば、音楽室と視聴覚室と図書館と放送室くらいである。別棟に三階はない。なら、その四つのいずれかに用があるということなのだろう。その中で隠れられそうな場所と問われると、首を捻るしかなかったが。今の彼の言い方から考えれば、きっと入れる部屋は全て把握しているのだろう。

「ところでさ」

と。突然彼は問いかけてきた。特にどうというわけでもない、いつでもありそうな、日常的な質問。

「君って、時計嫌いだったりする？」

「……時計？」

何故時計がここで出てくるのか。そもそもそれが何の意味を持つ質問なのか。意味のある質問だとは思えなかったが、とりあえず橙

香は怪訝を浮かべつつ答えた。

「……いえ、特に問題はありませんけど」

「のっぴじゃないけどうるさい古時計も？」

「たぶん……というかそれ、何の意味を持つ質問なんですか？」

「いや、君の答えからすれば、特に意味はないね。嫌いだって言われたらさすがに困り果てるって意味があったけど」

「はあ」

意味がわからず、ただそう曖昧な相槌を打つ。それに満足したのかは定かではないが、彼は何度か頷いたようだった。

その光景を見ながら、ふと橙香は思う。

死に怯える人間を見て、悪魔が楽しむというのなら。

彼の存在は、悪魔にとってこの上ないイレギュラーなのではないのかと。

——そしてまた、どこかで誰かの悲鳴が上がる。

5 踊るネズミたち・画策編。

悲鳴はどうしようもないほどに長かった。

ただずっと、ずっと長くこだまし続ける。いつになったら消えるのだろう——もしかしたら、もうずっと消えないのではないか。そう思うほどにこだました悲鳴は長かった。三階か、一階か。二階ではないだろう。同じ回想から響いた声ではない。もしかしたら別棟のほうから聞こえてきたのかもしれない。場所の判別はできない。その程度には遠い。

そしてまた無音が帰ってくる。沈黙、静寂、静謐。空気が漂わす死の匂い。悲鳴を追いかけようとは思わなかった。

「……行かないの？」

問いかけは若菜の声だった。どこか弱々しく、怯えているような声。それに、柳は苦々しい思いで答えた。

「追いかけてようにも場所がわからない。それに……不用意に動くところちの位置がばれることになる。遭遇しなきゃならないのは山々なんだが……こっちが先手を打たないとな」

「……そうだね」

それだけの同意を残して、沈黙する。死体のなかった、二年四組の教室。あのヒントを考えるために立ち寄った教室で、考える時間だけが無音と共にあり続けている。静寂は身を切るほどに痛い。

実際は若菜の言うとおり、悲鳴を追うべきなのだろう。それは理解していた。実際自分で言ったことなど、適当に思いついたことを並べただけだ。

考えなければならぬことを考え続けていた。

あのヒントの意味。残り五名。先ほどの男たちと、自分たち。そして五人目。五人目が殺人鬼——それは普通に考えるなら当然の流れだった。死体を一緒に見た四人。自分たち以外の、誰かが殺人鬼なのだと。

だが、今にして思えばそうではなかったのかもしれない。考える。ヒントの意味。

悪魔は欺いている。偽っている。ずっと。そのずっとが、いつかを指すのか。たぶん、このゲームが始まった時からだろう。最初から。最初から今まで、ずっと欺き続けている。欺けるものは何がある？

(……何でも、欺ける)

身分を証明するものなどない。自分を知っている人も若菜を除いていない。知り合いは若菜だけ。それは、気づいてしまえばあまりにも簡単な『最低』の作り方だった。

——悪魔が、生徒に化けている。

ずっと引つかかっていたのだ。これは悪魔のゲーム。別にそれはいい。ヒントを鵜呑みにするのはこの上なく癪だったが、それでも思考する材料はこれしかない。

『ゲーム』だと言うのなら、対戦相手も同じゲームに参加していなければならぬのだ。出題者と回答者が戦うのはゲームではない。クイズだ。ゲームだと言うのなら、何らかの形で悪魔もゲームに参加していなければならない。

それが意味することを、柳は心の中でのみ呟いた。

(……生存者の中に、悪魔がいる)

五人。その中から、自分たちを引く。あの男と、あの少女と、いまだ知りえぬ五人目。この中に、悪魔がいる……いや。

悪魔と、殺人鬼がいる。

悪魔は猫と——殺人鬼と戯れたがっている。ならば、悪魔と殺人鬼は別々でなければならない。一人二役では戯れとはいえない。悪魔と殺人鬼。五人目を殺人鬼だとするのなら。

あの男と、あの少女。どちらかが、悪魔という事になる。

それは最悪の結論だった。知らず知らずのうちに、心のうちに苛立ちが募っていく。あの二人のどちらかが、ずっとずっと、出会った当初から自分たちを嘲笑っていたのだ。それなら、はぐれてしま

った理由も頷ける……

(……? いや、おかしい?)

違和感だった。それは微細な。違和はすぐに疑問へと化ける。

嘲笑いたいのなら、傍にいないければならない。どんな顔で怯えているのか、どんな無駄な対策を取るのか。それを見たいはずだ。だというのに、はぐれるというのはおかしい。

そもそも、殺人鬼と悪魔が別々だというのなら、悪魔も殺人鬼に殺される可能性が出てくる。誰をも殺す猫。例外はない……悪魔も参加しているというのなら、やはり殺されることになる。

それはありえることなのか。ゲームの企画者でさえ殺される。そんなわけのわからないルールを悪魔が作ると思えなかった。だが、どこかで間違っているとも思えない。

「……何なんだ、これ」

呻くように呟いて、柳は背後の窓を見た。そこからなら、別棟が見えるはずだった——闇に飲まれている外。暗黒の世界。何が存在しているのかもわからない空間。闇は別棟の姿を隠すのに、非常に都合のいい存在だった。誰が移動しているか、いつもなら見えている。もし殺人鬼が別棟にいるのなら、その姿を見ることができる……それを防ぐための闇だというのなら、悪魔は性悪もいいところだ。絶望の果てに、君を待っている。名指しで指名された、悪魔のメッセージ。

絶望した時、自分たちはこの勝負に負ける。様々な希望を叩き潰されて、いつかは絶望する。それがいつなのか。一時間後なのか、三十分後なのか。十分後なのか一分後なのか。一日はかからないだろう。いや、朝が開けるまでには、きっと終わる。根拠はないが、それでもそれは確信だった。

悲鳴が聞こえてから三分は経っていないだろう。その三分の間にわかったことなど、たかが知れているが。暗鬱に息を吐いて、柳は窓から視線を離れた。教室の入り口を睨んでいた若菜が振り向いてくるのを待って、告げる。

「行こう。ヒントに意味がない以上……どっちにしろ、殺人鬼に会うしかない」

「……うん」

頷くのを見てから、歩き出す。その間も、ずっと何かを考えていた。これから先のこと。今までのこと。はぐれてしまった彼らのこと。悪魔のこと。殺人鬼のこと。守らなければ行けない者の事。

絶望の果てに、君を待つ。その言葉が、誰かの声で耳に響いていた。

「……また、ですか」

また悲鳴。金切り声とも絶叫とも違う、女の声。そろそろ聞き慣れ始めたような気もしないではないその悲鳴は、どうやら別棟から上がったわけでもなさそうだった。強く強く反響はするが、どうしようもなく遠い。恐らく教室棟のほうからだろう。どの階からの声なのかは、判断できそうになかったが。

先を歩く彼は、呆れたように呟いてきた。

「悲鳴ねえ……よくあげようと思うよね、実際のところ」

「驚いたら上げるでしょう、当然」

「殺人鬼がいるのに？」

不思議そうに、彼は後姿からでもそうとわかるほど首を捻る。本当に疑問だったらしいが、彼には常識というものがないのかもしれない。いまいちわからなかったが、深く考えずに答える。

「……それを覚えていられるほど冷静なら、悲鳴なんて上げませんよ」

「そりゃそうなんだけどさ。何というかさ、不安を煽るために悲鳴上げてるような気がしてならないんだよね。どうにも」

「……不安を煽る？ 悲鳴で？」

理解できずに訊ねると、彼は『だってそうでしょ？』と無然とした面持ちで呟いてきた。

「ホラー映画とかによくある手法……って言うのもどうかと思うけどさ。恐怖を誘うために静まり返った空間で悲鳴を上げるっていうのは、本当にありふれた方法なんだよ。悲鳴が一番簡単で、一番効果的なんだ」

実際確かにそういう手法を用いられたビックリ映像を知っている。悲鳴は効率的。。だが、橙香はすぐに反論した。

「とは言いますが、それはあくまでホラー映画とかの方法でしょう？ 実際被害者は恐怖を煽りたいわけではないはずです」

「本当に被害者ならね」

「……はい？」

わけがわからずに訊ね返す。と、彼は表情を若干苦笑の形に緩めて、それでもどこか硬い表情で肩をすくめた。そのまま、友人に話しかけると同じ口調で言ってくる。

「もしかしたら、殺人鬼が上げてるかもしれないでしょ？」

悲鳴を、殺人鬼が上げている。彼は苦笑めいた声でそう言ってきた。思わず問い返す。

「……それ、意味あるんですか？」

殺人鬼が悲鳴を上げるのだ。不安を煽るという意味では確かに有効なのかもしれないが――わざわざ自分の居場所まで知らせてしまうのだ。そんな愚を犯すくらいなら、自分だったら音さえ上げずに殺人を犯す。

「あるよ。こんなの、正直に言っちゃえば釣りと一緒になんだからさ」だが、彼はその問いに平然と、想像していない答えを返してきた。怪訝を浮かべる。理解できないまま、橙香は彼の背中へと同じ言葉を繰り返した。

「釣り？」

「……悲鳴を聞いた人間が取る行動って、いくつあると思う？」

「……え？」

それは突然の問いだった。いきなりの話題変更に橙香は戸惑う。が、それも一瞬だった。考える時間も、それに近いくらい短いもの

だった。問いの答えを見つけることなど、不可能だと思ったからだ。
「普通に考えるなら、何でもありでしょう？　いろんな人がいますから、選択肢だって無限に……」

「まあ、細かいところを気にするならそうなんだけどさ」

また苦笑したらしい。背中が不自然に揺れる――そして、彼はゆっくりと肩越しにこちらを見てきた。その表情を、すぐにため息を吐いて消す。

のほほんとした顔が、その一瞬だけ能面じみて見えた。

「……実際は、三つだけだよ」

「三つ？」

「そう、三つ。悲鳴のポイントに移動するか、悲鳴のポイントから離れるか……それとも、完全に無視するか。基本的には一番目なんだろうけどね。善良で大多数な一般人とか、正義感の強そうなさっきの子達みたいのなら。臆病者なら二番。一番正しいのも二番。三番は……まあ、アレだよね、人として」

アレが何なのか、さっぱりわからないが。聞いても意味などないのだろう。橙香は呆れを隠さずのため息を吐いた。言いたいことをようやく理解する。それは確かに釣りだった。

「悲鳴をエサに、釣り針は凶器。釣り糸は忍耐で、釣竿は……お好みでどうぞ。まあ、そういうわけだよ。特にこの状況だね。勝つためには、殺人鬼捜さないといけないし」

「……効率的、ですね。殺人鬼は、声張り上げて待ってればいいだけなんですから」

「この状況下なら、悲鳴もネズミ捕りも大差ないって言えるね。誘われてきた獲物を……」

手のひらを開いて、そのまま握り締めるジェスチャー。バクンと一口、とでも言いたかったのだろうが。言われて考える。

悲鳴はネズミ捕り。事実『殺人鬼』という危険を把握していなかった自分たちは、最初悲鳴に駆けつけたではないか。あの場に殺人鬼がいなかったのが、単に幸運だっただけで。

「とはいえ、本当に危険なのかもしれないね。殺人鬼に殺されそうになってたりとか。そうだとしたら、助けに行くべきなのかもしれないけど……残念ながら、場所がわからない」

「時間も経ちすぎちゃってますしね。今から行っても間に合うかどうか……」

「まあ、今回も無視って事で。オーケー？」

「はい。それでいいと思います」

同意すると満足したのか、彼は笑って頷いた。体を反転し、闇の中をまた歩いていく。暗いせいか、廊下は果てしなく長いように思えた。淡い光だけを頼りにしてるのかどうかはわからないが、彼はずんずん進んでいく。といっても、足音を殺して、警戒を全開にしての行進だ。そんなに早くはない。

だというのに、彼は暢気に呟いていた。危機感の欠片もなく。

「……んー、後もうちょっとなんだけどなあ」

「何がですか？」

「無音で歩くこと。理論的には衝撃を全部関節で吸収させればいけるはずなんだけどなあ。忍者だってできるのに」

「にんじゃ……」

呆れを浮かべて呻く。が、彼は特に何も言っではこなかった。集中して、時々足の運び方を変えている。本気で忍者にでもなるつもりなのかもしれない。どちらにしろ、馬鹿馬鹿しいことこの上ない。呆れだけを含んだため息を吐いて、自分も足音を殺して歩くことに専念する。

また、無言の沈黙。纏わりついてくる空気の冷たさが戻ってくる。その沈黙が気になって、橙香は問いかけた。

「何で、殺人鬼は人を殺すんでしょうね」

意味がない。今回の殺人に理由なんてないのだ。世間一般を騒がせるような、お金や愛や憎悪や偶然。そんな明確な――あるいは抽象的な――理由。人を殺すのに必要な理由。この殺人鬼にとってのそれは何なのか、それが気になって問いかけた。

悪魔は楽しみたいからこのゲームを作り上げた。では、そこに現れる殺人鬼は？

……もともと答えを期待した問いではない。ただ、何も言わないでいると気分が悪くなる。沈黙が嫌いなわけではない。だが、今回の沈黙だけはどうにも好きになれなかった。

声が聞こえる——どうやら、苦笑しているらしい。

「理由なんて、必要なのかな」

問いかけるわけでもなく、彼は呟く。それはどちらかといえば、自分の中で呟いた言葉を確かめているようだった。

殺人に理由なんて必要なのか。それを確かめている。背中しか見えないが、彼は心なしに笑っているようにも見えた。

「……殺人の理由か。まあ、最近は何でもありだしね。殺したかったから殺しましたって言われても、たぶん僕は驚かないよ。そういうゲームだから、でもいいし」

「……質問に答えてない気がするんですが」

「殺人鬼に聞くしかないでしょ、その質問。下手の横好きでいろいろ知ってはいるけどさ。さすがに個人の嗜好まで知ってたらただの変態じゃないか……とはいえ」

そこでまたため息。振り向きもせず、面白くもなさそうに——それでも笑いながら、彼は考え込むように天井を見上げた。

今思うと、何かを考える時に天井を見るのは、彼の癖なのかもしれない……

その視線が下がる。思いついたことをただ呟くように、彼はポツリと言ってきた。

「楽しいからだろうね。少なくとも、鬼と呼ばれるくらい人を殺した人間はね」

「……少なくとも？」

違和感のある言い方だった。それではまるで、殺人鬼以外の人間が人を殺しているようにも聞こえる。繰り返した橙香に、彼は笑って頷いた。

「人間なんて結構単純なものでさ。感情だけで人を殺せるんだよ。憎悪や怒りはともかくとして……疑心とかね」

「疑心？」

また繰り返す。そうすると彼は小さく苦笑した。

「ほら、よくあるでしょ？ 勘違いから始まる泥沼殺人劇」

「よくあるんですか……？」

「あるんだよ。疑わしきは罰せずなんて法律の世界だけだしね。人間、白か黒かで分けないとやってけないわけだよ。灰色は許せない。だからどちらかだと決め付けて排除するんだ。それがたとえ白に近くても、排除」

「まあ、それはいいんですが……その言い方だと、この異常事態に巻き込まれた誰かが殺人を犯したように聞こえるんですが」

「可能性の話だよ。ありえないことじゃないんだ。たとえば……もしさっきの悲鳴が五人目のものだとして、五人目が殺人鬼じゃないのなら」

「……？」

また彼は天井を見上げる。薄闇の廊下。普段よりも高く見える天井。誰が潜んでいるかわからない闇。

「さっきの悲鳴が、惨殺体を見てあげたものだとしよう。悲鳴の主は誰が殺したと考えるかな？」

「それは……」

思わず言いよどむ。それは意識的に排除していた答えだった。が、その反応を見て彼は薄く笑う。彼も同じ事を考えていたのだろう。

「最初に集まった僕ら四人のうちの誰か。当然だね。自分以外が犯人で、残りの総数が五人しかいないんだから。そして、僕らも自分たち以外の誰かを、特に五人目を疑っている。結局のところ、殺人鬼以外の皆がそうなんだと思うよ？ 誰かを疑っている」

自分以外の四人。そのうちの誰かが悪魔で、誰かが殺人鬼。今まではまだ会ったことのない五人目がそうなのだと信じていた。だが、もしそうではなかったのだとしたら。

さつき出会った男と少女。そのどちらかが殺人鬼なのだとしたら。「誰かを疑って、でも尻尾がつかめなくて、死体ばかり増えていて。それが限界に来たら? ……自分の安全を守るために、誰かを殺すんだ」

「そんな、無茶苦茶な」

確かに昔、そんな推理小説を読んだことがある。閉ざされた孤島。外に出ることのできない環境で起こった殺人事件。殺人鬼は見つからず、最後には生き残った者同士で疑いあい、殺しあった。だが、それはあくまで物語だ。だから否定する。それに対して何を思ったのかはわからない。彼は肩をすくめるだけだった。

数秒の沈黙。それからまた、ポツリと彼は呟いてきた。

「実際、殺人鬼なんて誰でもいいんだと思うよ」

「……はい?」

「誰が殺人鬼かわからないっていうのは、誰が殺人鬼でもいいっていうのと同義なんだよ。誰が殺人鬼か指定されてないから、誰でも疑えるんだ。自分以外なら誰でもね。私以外の誰かが殺人鬼です。でも誰が? 私以外の誰かが。ほら、誰でもいい」

「……極端すぎませんか?」

さすがに無理やりすぎる。反論すると、彼はどうしてもよさそうに肩をすくめたようだった。

「そりゃ極端さ。ある意味極限とも言える。よく言うじゃん、極限状態の人間は何をするかわからないって。疑ってる人間が犯人扱いされないのは、フィクションだけだよ?」

「だからって、それだけで誰も彼も疑いますか?」

「疑うさ。こんな状況じゃ、誰もアリバイ証明なんてできないからね。というか、意味がないんだそんなもの。いくらだって疑えちゃう。信じる価値がない」

「わざわざ二人組なんです。お互いがお互いのことを証言すれば……」

呟くが、即座に反論が飛んでくる。

「口裏合わせしたんだろって言われてお終い」

「う……」

それに言葉を詰まらせている間に、彼はのんびりと先を続けた。
「実際意味なんてないんだよ、二人組なんてさ。この状況じゃあ、誰も無罪の証明はできない。人を簡単に信じられる状況ってのは平時だけだよ。今は無理だ。せめて、殺人鬼以外の全員が一緒にいないとね」

確かにできないのだろう。精神的に追い詰められた人間を黙らせるには、それなりの証拠が必要になる。アリバイに意味はない。もう人は信じられない……

一呼吸置いて。沈黙を一瞬確かめて、彼はまた天井を見上げた。
今度は考えるために、ではないだろう。

「殺人鬼なんて、誰でもいいんだ」

あっけらかんとどうでもよさそうに、彼は呟く。だがその声は、底冷えするほどに何度も何度も辺りに反響した。

殺人鬼なんて誰でもいい。その声が、耳にこびりついて離れなくなる。誰でもいい。誰も、自分の無罪を証明できない……

それこそ馬鹿馬鹿しい思いで、橙香は暗鬱に呟いた。

「……はぐれるべきじゃありませんでしたね」

疑われないためにも。

「そうだねえ」

短く同意してくる。今度は天井を見上げて、彼は数秒沈黙して――その間に放送室のある突き当たりを右折して。

そして、小さく呟いた。

「あ、いや、撤回。はぐれなくても大差ない」

「……なんですか？」

「いや、だってさ。死体が作られた時間がわからない。もし僕が起きる前に殺人してたなら？　そして僕が起きた後、その殺人鬼が何食わぬ顔で被害者を装っていたら？」

「……殺人鬼と、一緒にいたことになる？」

「そゆこと」

小さく同意して。そのまま彼は、誰にも聞こえないのではと思うほどの声量で小さく囁いていた。

「……失敗だった。つい……る……思ってた……た」

「え？」

最後のほうが聞き取れず、思わず声を上げる。が、彼はまた苦笑したようだった。

「失敗だったって話。こんなどうでもいい話、聞くだけ無駄だったでしょ？」

「……いや、そういうわけでもありませんけど」

ためになったかはともかくとして、気分くらいは紛れた。それだけでも会話には価値がある。

「……にしても、結局何が言いたかったんですか？ 当初の質問から思いつきり脱線してるような気がするんですけど」

「いいじゃん脱線。事故じゃないんだし……ああ、まあ、オチが欲しいっていうなら教訓っぽいものをあげられるけどね」

「……？」

いぶかしむように、彼の背中を見つめる。当然のように、彼は振り向きもしなかった。もう笑っているわけでもない。ただ、感情を込めずに囁いてくる。

「疑心で人を殺したくなければ、全員で犯人を作り上げるんだ。一番疑わしい人間が……ってね。そうすれば、一時的でも疑心による殺人は止まる。根本的な解決にはならないけど、一時的には団結できる。不安から逃れるために。学校でのいじめと同じだよね」

「……同じですか？」

「同じだよ。結局排除してるんだからね。からかうか殺すかの違いだよ。まあ、後は簡単に人を信じちゃいけないよってことさ。いつだって裏切れるからね。他人なんて」

それから、三度目のため息。足を止めて、小さな声で彼は呟いた。
「……やってくれる。だけど、確定かな」

「……はい？」

確かにその言葉を聞き取った。が、彼はそれについてはそれ以上何も言っていない。

辺りを見回して、今更気づいたように彼は言ってくる。

「この辺って、図書館だよ」

露骨な話題逸らした——だが、聞いてもきつと彼は答えないだろう。だから、考える代わりに地図を思い浮かべる。タの字。図書館は『タ』の上の横線部分だったはずだ。教室棟と別棟を繋ぐ、廊下に面している。二階。この下が、昇降口だと記憶している。

答えずにいると、また彼。

「今考えたんだけどさ」

「はい」

「携帯の明かりって狙われるよね」

「………：すんごい今更ですね」

「夜目はいいほう？」

「……微妙ですね。まあ仕方ありません。消しますよ。狙われるよりはいいですから」

彼が頷くのを確認してから、携帯を畳む。パタンと小さな音。一瞬で、闇が辺りに戻ってくる。彼の姿も、残像を残して闇に溶けた。それでもう、どこにいるのかわからない。後は声と足音だけで判断するしかない。

「……で？ これからどこに行くんですか？」

問いかける。当然答えが返ってくると疑わずに。実際何かを考え込んでいるのなら、数秒は待たなければならぬだろうが。

声は不気味に反響するだけだった。何秒待っても、何分経っても。彼の声は聞こえてこない。さっきまで、隣にいたはずの影。輪郭。闇に飲まれて、どこにもない。呼吸の音も聞こえてこない。

「……先輩？」

呼びかける。だが、やはり声は返ってこない。足音はもとより、近くにはもう呼吸の音もない。それに気づいたその一瞬、背筋に冷

たい何かが走った。

悪寒。怖気。それによく似た、焦りと恐怖。

いない。彼がどこにもいない。いつの間にか、音も形もなく消え去っていた。そんなはずはない……どこかにいるはずなのだ。人は無音ではいられないはず。

ふと、思い出す。

彼は、無音で歩く練習をしていなかったか？ 何のために？

足音を消す理由。殺人鬼に見つからないように。

本当にそうだったのか？

連鎖的に、何かが脳裏で囁いてくる。

——殺人鬼なんて、誰でもいいんだ。

それを、彼はどういう意味合いで呟いた？ 本当に、誰でも疑えるという意味でだったか？

勝手にそう思い込んだだけで。実際は。

——実際は、自分が殺人鬼であっても問題はないんだと言いたかったのではないか？

それは突飛な発想だった。論理が破綻している。彼はそう言いたかったわけではないだろう。だが、今になって思えば彼はどこか不自然だった。

自殺者を見ても驚かなかった。

一人で勝手にどこかへ行こうとした。

そして殺人鬼についてあんなに考えていた。

最初から、人としてどこかずれていた。

それだけで、疑うに足るのではないか？

——カッン。

「……！」

何かがどこかで動いた。響く足音に、体が即座に反応し、音を探すために闇を見回す。だが、足元からまた音が響く。自分の足音。増えて無限に響いていく。息が引きつる。呼吸が浅くなる。深呼吸ができない。冷や汗が、頬から一筋地面に落ちる。

「……………」

怖い。闇が怖い。何が起こってもおかしくはない、その闇が何よりも怖い。何も信じることができない。何もかもが敵でしかない。怖い。その静寂が、何よりも怖い。

足音はない。物音もない。呼吸する音も、吹く風の音も。何一つない。携帯を開かなければ。だけど開けない。殺人鬼。狙われる。闇。闇。闇。

その中で一つ。風を切る音が、どこか遠くから聞こえたような気がした。

何かを振り下ろす音。ズダンと大きく何かが動いた音。

今更ながらに思い出す。危険に面したとき、人は息を吸えない。

悲鳴を上げる余裕なんかない。彼の言葉だった。

響いた音。バリんと、何かが割れた音。その音が前から聞こえたのか、後ろから聞こえたのか。それさえ失念して、橙香はその音を聞いていた。

——蛍光灯が、割れた音。

悲鳴なんて上げられない。そう言われたのを思い出す。

次いで聞こえた音は。

「がアアああアアあああああつアアああああアッ!!」

悲鳴。上げられないと言っていたはずの音。魂も凍えるほどに――

いや、魂さえも消えそうなほど強く響く悲鳴。いや、違う。悲鳴じゃない。悲鳴はこんなに苦しくない。

それは彼の断末魔だった。

危険。割ったら逃げてね。そう言われた。誰かがそう言った。ずっと、さっきまで一緒にいてくれた人。もう何も聞こえない。どこからも何も聞こえてこない。闇と静寂だけがこれからもずっと残り続ける。

もう、いない人をもう一度呼ぶ。

「先輩……?」

問いかけても、どこからも答えは返ってこない。虚しく響いて消

えるだけ。

逃げてね。

そう言われたのに。何故か、その場を動くことができなかった。逃げ出せない。逃げ出し方がわからない。道がわからない。闇の歩き方がわからない。

動くのが怖い。動かないのも怖い。

(……いやだ。いやだいやだいやだいやだ………)

ただ、呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

「……!？」

それは或いは咆哮だったのかもしれない。悲鳴などではないだろう。聞き覚えのある、男の咆哮。肺から搾り出したような絶叫が、ビリビリと空気を振動させる。それは震えを感じさせるほどに、危険の色を濃く孕んだ叫びだった。

思い出したのは、断末魔というその言葉。

人が死の苦痛に震えるときに上げる、心の底からの絶叫。

「柳……今の」

服にしがみついて、若菜が小さく呟いてくる。反応する必要のない声だった。言わなくても、お互いにわかっている。

(たぶん……あの男)

聞き覚えのある男の声。突然現れて安穩とした言葉を呟き続けて、また突然姿を消した男。恐らく、あの男の悲鳴だった。

声の出所ははっきりとわかった。二階の図書館前。ここからそう遠くはない。

闇の中、柳は少しだけ逡巡した。悲鳴の意味と、悲鳴の理由。このゲームの勝利条件。すぐさま、それを繋げていく。判断はその一瞬で終わった。

「……行くぞ」

それだけで若菜も全てを察する。これはチャンスだった。目撃する。ただそれだけでいい。殺人鬼を殺人鬼たらしめるには、それだけいい。

そのために走り出す。闇に足音が響く。だが、そんなことなどもうどうでもいい。

もしかしたら、殺人鬼はこちらに向かっているのかもしれない。もしかしたら、殺人鬼はあの男の悲鳴を餌にして、どこかで待ち伏せしているのかもしれない。追い詰めているのか、追い詰められているのか。わからない。わかるはずもない。

或いはその二つはこの場においては同一だったのかもしれない。だが、勝ち方だけはわかっている。

人一人殺されて、ようやくそのチャンスを得た。あまりにもそれを得るのが遅すぎた。失われた人間は、もう戻ってこない。あの男はもう、暢気に馬鹿馬鹿しく言葉を吐くことさえない。悪魔に魂を奪われた。

もう、死んだ男。彼の声を振り払うように、柳は囁いた。

「若菜」

走る音に掻き消されそうなほどの、そんな小さな声で。

「殺人鬼の顔を見たら、すぐに逃げろ」

聞こえていなかったのかもしれない。反応は返ってこなかった。だが、それを気にすることなく廊下を疾走する。こう急いでいては、突然殺人鬼が来ても対応できない。それでもよかった。時間は稼げるから。手の中の武器を握り締める。

体は次第に熱を持つ——それに反比例するように、心は熱を失っていった。

(……俺が勝たなくてもいい)

殺人鬼を足止めする。それが自分に課した、柳の役目だった。殺人鬼を足止めする。その間に、若菜が殺人鬼の顔を見る。後は若菜が逃げるまで、自分が足止めすればいい……

(……ビビるな。これは死じゃない。たとえば痛みがあらうと、これ

は死なんかじゃない)

ゲームオーバーと死は違う。ゲームと、生きることとは違う。

それを何度も何度も肝に銘じる。たとえ悪魔に食われることになろうとも。

そして。

走るのを、柳はやめた。若菜も、それに合わせて走るのをやめた。

「……………」

さっきの髪の長い女が、図書館の前で立ち尽くしていた。ただ茫然と何かに怯えている。焦点が定まっていなかったのか、彼女はこちらを見ているのに、こちらにまったく気づいていなかった。携帯の類――明かりは持っていない。闇に取り残されたのか。

時間だけが、延々と流れていく。

「……あ、え？」

聞こえてきたのは、そんな声だった。彼女の瞳が、ようやく何かを見据えるようになる。それはちょうど、こちらと彼女の中間に向けられていた。

女の視線の先。柳たちの視線の先。割れたガラスの破片が、キラキラと光を反射する。その光景は、ある種魔的な雰囲気さえかもし出していた。まるで、宝石と一緒に捧げられたいけにえのように。

死体があった。ガラスに埋もれるように。何かに殴られたように、うつぶせに倒れて。ネクタイを奪われて。

誰も、何も言わなかった。言葉が見つからなかった。何を言うべきなのか、何を言えばいいのか。この状況で、何をどう言えばよかったのか。完全に言葉を喪失して、誰もが何も言えなかった。

それでも、ようやく。間抜けで馬鹿馬鹿しくて愚かでも、柳はただそれだけを呟いた。

「……何で……だ？」

死体は、あの男ではなかった。

また知らない顔の死体だった

6 踊らないネズミ。

考える。とりあえず、何でもいいからいろんなことを考える。のつぽの古時計はその人生——時計生？——を壊れるまで時計として過ごしたのだから、ある意味フル時計でもいいのではないか。オーラル時計でもいい。大きなのつぽのフル時計。別に何も変わっていないように思える。ならいいじゃないか、フル時計。百年は長い。そのうち動き出すかもしれない。やっぱり呪うのだろうか。

とまれ、思考そのものを一時的に停止する。そのまま彼は嘆息した。

「……いやはや、失敗した。本当に失敗した」

誰にも聞こえないように、自嘲する。

近くで人の気配がする——どうやら、もう動いたらしい。来るのは予想していたが、ここまで早いとは思っていなかった。それに苦笑しつつも、独り愚痴る。

「真面目に予想外だったよ……ここまで早いとはね。それとも僕が遅かったのか」

たぶん後者だろう。本来なら、もう少し早く独りになるべきだったのだ。

「失敗した。ついて来るなんて思っても見なかったよ」

それはさっきも呟いた言葉だったが。もういない人に毒づいても意味なんてない。

「まあ、確かに悪いことをしたなあとは思うけどさ。他人を簡単に信じるなって言っただけだからね。僕を恨むのは間違いだよ」

誰かに確認するように、安穩と呟く。といっても、辺りには誰もいない。当然のことだったから、彼は特に何も思わなかった。彼女には悪いことをした。それで今回の反省はお終い。

だから彼は、この後の行動について考えることにした。

「……といっても、どうせ人探しだしね。行動については後で考え

よう」

当面の問題は。

そう呟いて、彼はため息をついた。わかってる。考えなくてもわかってることだ。

「……武器がない」

それはつまり、自分が今無防備であることを意味する。武器が欲しい。だからといって戦いたいわけでもない。戦うわけにも行かないのだ。そんなことしたら、確実にばれる。ばれるわけにはいかないことが、たくさんばれることになる。

せっかく誤魔化したのだ。最後の最後まで誤魔化しきらないと、ぜんぜんまったくよろしくない。『五人目』の存在が『殺人鬼』として機能しなくなり始めた以上、ここではばれるわけにはいかない。

とはいえ。本当に、とはいえ。遠目に、彼は自分がいた場所を見つめるように目を細めた。見えない。それにため息を吐いて、彼は心の底からばやいた。

「まさか、本当に動くとは思ってなかった」

想像していなかったわけではない。それは可能性の一端だった。色んな矛盾。色んな情報。一つのヒント。参加者の数。存命者の数。それを考慮するなら、真の意味でその答えが一番可能性の高い答えだった。

うまい擬態の方法を考えたものだ、本当に。彼女が見つけるよりも早く見つけられたのは、本当に幸運だった。彼女が先にアレを見つけていたら、全てが台無しになるところだった。

「まあ、結果オーライだったけどさ。僕の運がいいのか、彼女の運が悪いのか……」

たぶん後者だろう。が、まあそんなことはどうでもいい。考える。次の行動は。

わざわざ一時間近くかけて確認したのだ。それをもう一度確かめに行かねばならない。それだけで、状況は劇的に変わるはずだった。さっき言ったことを思いだす。殺人鬼なんて誰でもいい……本当に、

誰でもいい。

天井を見上げて、目的地を頭に思い浮かべる。同時に、彼らの行きそうな場所も。

「しばらくは……アレに集中してくれそうだろうしね。見つかるのも面倒だから……」

彼らから遠いところが、とりあえずの候補か。一時的に判断を保留する。他に考えなければならぬことは。

「んー……結局人探しか。となると……隠れられる場所かな」

となると、自然と行く場所が限られてくる。効率的に行かねば、時間がさらにかかってしまう。もしかしたら見つからないのかもしれないが、それはあまり面白いことではなさそうだった。彼らにとっても、自分にとっても、彼女にとっても。

数秒、迷う。それから意を決して、彼は頷いた。

「ん、決めた」

とりあえず、ここから離れよう。万が一にも、彼らに見つかったら後が面倒だ。独りになったメリットをすぐ殺してしまうのはいただけない。さっさと逃げなければ。

「さて、闇も気にせず進もうか」

想いだったが吉日というやつだった。彼はすぐに歩き出す。無音で歩くコツは掴んだつもりだ。下手の横好きは、こういうときに役に立つ。いたずらに使えるような知識や思考形態ほど、こういうときに。

と。ふと気になって、彼は背後を振り向いた。闇の中には、きっと『死体』が転がっているのだろう。『彼』がいる方向を検討づけて彼はまたため息をついた。

「まあ、君がそういう奴で助かったよ。殺しに来たんだったら、殺し返さないといけないところだった」

そう呟いてから、彼は歩き出す決心をする。

「……にしても、殺人鬼が猫、ねえ？ 昔の猫は、ネズミに悪戯される側のはずなんだけど。時代は変わったのかな……」

とりあえずは、そこが気になった。が、まあ、そんなことどうでもいい。

歩き出す直前。彼は死体へと振り向いて微笑んだ。

「それとも、この状況下であっても悪戯してみせてくれって事かな？
ネズミらしく」

7 踊らされるネズミたち・奇襲編。

死体を見下ろす。何度も、何十度も、何百度も繰り返す。何も変わらない。何秒も、何十秒も、何百秒も凝視する。それでも何も変わらない。変わるはずがない。それがわかっていても、それはあまりにも異様な光景だった。

矛盾する。自分の考えていたはずの結末と、これでは何もかもが矛盾する。

「……………どういう、こと？」

若菜と名乗った女の子の言葉。馬鹿馬鹿しい言葉だった。それは。考える必要がないほどに、その言葉自体が馬鹿馬鹿しい言葉だった。呟くだけならまだしも、考えることさえ馬鹿馬鹿しい。わかりきっている。この光景だけを見れば、それだけで答えが出てきてしまう……………だからこそ、それは違和感でしかなかった。

死体。物言わぬ骸。もう一度だけ、無感動に見下ろす。何度見ても、変わらない。わかりきっている。死体が変わることなどありえないのだから。それでも、呟くのは馬鹿馬鹿しいことだった。

「あの人じゃ……………ない？」

それが自分の呟きだったのか、それとも女の子の呟きだったのか。それさえもわからない。ただ、ひどく動転しているのだけはよくわかった――女の子が、ではない。自分がだ。こういう感情を浮かべればいいのかわからない。

先輩だと言ったあの人が生きていることに安堵するべきなのか。それとも、死体がここにある意味を真に受けて戦慄するべきなのか。

わからないままに、立ち尽くす。死体を挟んで、ずっと。止まっているのは危険だと知っているのに、動くことができなかった。

男がポツリと、愕然とした声で呟いてくる……

「あの男……………なのか？」

その言葉はちょうど、先ほど自分か女の子のどちらかが呟いた言葉と対称になっていた。

あの人じゃないのか。あの人なのか。

この死体はあの人じゃない——なら、殺したのは、あの人なのか。否定できる材料はなかった。証拠がどこにもない。有罪も無罪も証明できない。

誰も、それ以上の言葉が続けることができなかった。死体は空ろになった瞳で床を見つめている。年上なのか、同級生なのか。それさえわからない死体。判別できるのは、存在しないネクタイの空白だけだった。

無音。呼吸する音だけが、冷たく無常な空間に響いている。

それを破ったのは、あの子だった。

「……窓」

「……え？」

男の呟き。突然のことに反応できなかったような声だった。それを見無視して、女の子は小さく声を荒らげた。

「もっと早く気づくべきだったのよ……！」

何に。そう問いかける暇もなく、彼女は近くの壁を照らす。窓。彼女が呟いた言葉。それを捜していたのかもしれない——窓は彼女からそう遠くない場所にあった。そこへと彼女は駆けていく。窓の外は、相変わらず闇一色だった。

外はもう存在していないのではないか——そう思うほどに、闇以外の何もない。

「……………」

窓の前で、彼女は躊躇するように立ち止まった。だが、一瞬だけ。意を決して、彼女は窓の鍵を開ける。小さな金属のこすれる音。力を込めて、彼女は窓を開け放つ。

……だが、結局開くことはなかった。当然だった。それは悪魔の力によって閉められているのだから。それは彼女も知っていることのはずだった。

開かない。それに驚いて、彼女は何度も何度も窓を引っ張る。

「あの人じゃ……ない？」

さっきと同じ——だが、かすれた、信じられないとでも言いたげな声だった。瞳には驚愕がありありと浮かんでいる。彼女は何をしなかったのだろうか。あの人なら、彼女の考えがわかったのだろうか……

「……若菜？ お前、いったい何を」

「犯人を当てたら、出られるんでしょ？」

問いかけの声を途中で遮って、彼女は答える。驚愕を浮かべてこそいれ、彼女は冷静なようだった。

ふと気づく。この異常事態の終わり方。犯人を当てるか、自殺すれば外に出られる……思う暇もなく、彼女の考えを橙香は呟いていた。

「犯人があの人だったなら、窓を開けて外に出られた？」

「……うん」

彼女が頷く。外れたことがショックだったのか、そこに元気はなかった。仕方ないことなのかもしれない。当たりだと思っていたものがハズレだったとしたら、きっと自分もショックを受けるだろう。あの人は、殺人鬼じゃなかった。それに橙香はよかったと呟いてふと疑問を抱いた。

（……何がよかったと？）

安堵した理由。それがよくわからなかった。が、答えを探そうとは思わない。それよりも優先して、しなければならなかった。考えた。考えている余裕はない。

「昇降口からじゃないとダメなのかな……」

そんな声が聞こえた気もしたが、無視をした。

今、あの中はどこかで独りなのだ。蛍光灯を割ったということは、その身に危険が迫っていたということ。もしかしたら、殺人鬼に追われているのかもしれない。だとしたら、すぐにでも追いかけないとならない。幸いまだ遠くには行っていないはずだ。

「あの人を捜さない……」

「待て。というか、待ってくれ」

だが、それを止める声の一つ。柳と呼ばれた男だった。顔には困惑が浮かんでいる。だが、そんなのに構ってる余裕はなかった。声にわずかながら怒りを込めて、問う。

「何故止めるのですか？ 早く捜さないと、もしかしたら……」

「そいつはわかってる……だが、どうにも妙な気がするんだ」

「……妙？」

はやる気持ちを抑えて、訊ね返す。自分ひとりじゃ捜すこともできない以上、彼らの助けは必須だった。無碍にすることもできずに、言葉を待つ。彼は何か悩むように目を閉じて、それからゆっくりと呟いた。

「もしアイツが殺人鬼じゃなかったとして……なんで、悲鳴を上げた場所に死体があるんだ？ それじゃあまるで、アイツを疑ってたさいつて言ってるようなものだろう」

「そう殺人鬼が仕組んだのでしょうか。そうすれば、殺人だってしやすくなります」

「おかしいだろ？ 仮にそうだとしたら、殺人鬼が死体担いで移動してることになるんだぞ？ 逃げられたら死体を置いて、逃げた奴を疑うよう仕向けるなんて面倒を思うのか？」

言われて、橙香は沈黙する。確かにその通りだった。

死体とはいえ人間一人担いで校内を探し回り、殺人を犯す。失敗したら死体を置いて、また死体を担いで人を殺しに行く。それは考えれば考えるほど不自然だった。それは第一に、誰かが逃げ出すことを前提としている……

「不自然すぎる。そんなことがあると思うか？」

「……ですが、現実起こっています。認めるしかないでしょう？

窓だって、あの人が犯人じゃないと」

「待った、それだ。それがさっきから気になってるんだ」

と、彼はもったいぶるように深呼吸する。

「外に出れる条件は、殺人鬼が誰か当てることだ。だがよく考えてくれ。誰でもいいからあてずっぽうで『こいつ犯人!』って指定してけば、いつか外に出れちまう。悪魔のゲームが、そんな簡単なものだとは俺には思えない」

彼は慎重に言葉を選んで、またゆっくりと先を続けてくる。そのゆっくり差に苛立ちが募っていくのを、人事のように橙香は感じていた。

「……証拠が必要なんじゃないか？ 目撃証言でも、物的証拠でも、何でも」

「……何が言いたいんですか」

苛立ちの混じる声で問う。彼は橙香を真正面に見据えて、挑むように呟いてきた。

「俺はまだ……あの男が犯人なんじゃないかと疑ってる」

「……それが一番自然だから、ですか？」

「……ああ」

蛍光灯を割った意味も、悲鳴を上げた原因も、突然姿を消した理由も。

殺人鬼だからという理由以外では、その全てに説明がつかない。危険などなかったのに危険を装ったのだと。そのようにしか思えない。

あの時の条件で考えるなら。蛍光灯を割って悲鳴を上げれば、闇の中で身動きできない自分を簡単に騙すことができる。姿を消した理由も、凶事を犯すためという理由で簡単に説明できる。だから死体がある。凶器は隠し持っているのかもしれない。

それは確かに一番自然な流れだった。

(……でも)

それでも、何故か彼の言葉には納得できなかった。理由はない。だが、それでも何かが違う気がする。何かが引っかかるのだ。前提から間違っているような、そんな違和感。それがさっきからずっと消えない。

こちらの不満が伝わったのか、彼は肩をすくめて告げてきた。

「あくまで、俺はそう考えてるだけだ。もしかしたら、違うのかもしれない。もしかしたら、本当に昇降口からじゃないと出られないのかもしれない。この状況下で確かなものなんて何もないんだ……殺人鬼がいて、誰かが殺されて、死体があることしか」

それから、小さくため息を吐く。空気は冷え切っていた。沈黙は重く、交わす言葉も思いつかない。あの人なら適当にどうでも良い事を呟くのだろうが、橙香にはまったく思いつかなかった。

「あ、あのさ……ちよつと、提案があるんだけど」

と。突然、若菜が口を開く。今まで蚊帳の外だった分、手持ち無沙汰だったのかもしれない。どちらにしろ、彼女はどこか張り切っているような感じでその提案を呟いた。

「ちよつと状況を整理してみない？　そうすれば、もしかしたら何かが見えてくるかもしれないし」

「……………」

彼共々沈黙する。確かにその通りではあった。今まで別行動だった分、こちらが掴んでいない情報を彼らは掴んでいるのかもしれない。彼もそれを考えているのか、考え込むように腕を組んだ。

「……はぐれてから、だな」

彼が呟く。

「殺人鬼が追ってきて、一階の教室に逃げ込んだ。殺人鬼が昇降口に向かったらしいことを確認して……その時に死体を一つ見つけた。で、死体から手がかりを捜そうとして五分くらい。手がかりは何もなかった。それで、殺人鬼を捜そうとして……」

途切れた彼の言葉を継ぐように、若菜が続ける。

「悲鳴と、ガラスの割れる音が聞こえてきたの。で、悲鳴の場所――二年一組に行ったら、また自殺者……それからヒントのメール。考えるためと隠れるために何もなかった二年二組に行って、数分位したら、悲鳴が二つ。それがさっき。で、走ってきて……今かな」
それで終わりらしく、無言でこちらの話を催促してくる。

行動は全て覚えていた。だから、暗証するのと同じ感覚で呟いてく。

「はぐれた時は一階にいました。でも、あなた達の姿が見えなかったから、とりあえず歩き回ることになりました。目的地は職員室で、あの人はマスターキーを欲しがってました。その前に武器として蛍光灯を取りに行つて……このときに死体を見つけてます」

「……蛍光灯と、マスターキー？ 何のために？」

「蛍光灯は悲鳴よりも早く危険を知らせるため、マスターキーは隠れる場所を増やしておきたかったからだそうです。何故か、鍵は全てなくなってしまうていたみたいですが……数分くらい職員室にいて、仕方がないから歩き出して、その時にヒントを。その意味を考えつつ歩いて……悲鳴を聞いて。ちょうどここに来た時、あの人と別れました」

「……あの男、どこを目指してたんだ？」

それは確か質問した記憶がある。返ってきた答えは、答えと呼べるほど明確なものではなかったはずだが。

「二階のどこかを目指していたみたいです。隠れられる場所を探してたと思うんですが」

「……マスターキーがないのにか？」

「ええ。鍵のかかってない場所に心当たりがあったみたいです」

その後時計について聞かれた気もするが、それはたぶん関係ないだろう。どちらにしろ、こちらの話はこれでお終いだ。それを悟ったのか、彼は両手を組んで、若菜は目を閉じて、それぞれの方法で考え込む。それに倣うわけでもないが、橙香も天井を見上げて考え込むことにした。といつても、それでわかることは少ないだろう。彼らの言葉を反芻する。

(……?)

そしてふと気になることに思い至る。

「死体、何か奪われていましたか？ この死体のネクタイみたいに」
「……ああ。一人目は校章がなくて、二人目はブレザーがなかった。」

それが？」

「……こっちの死体は、ネクタイが奪われてたみたいです」

「ネクタイ？ 何の意味が？」

今度は若菜の疑問。それに首を振る。

「……わかりません。殺人鬼の嗜好だとするのなら、私にはわかりません」

何の違いがあるのだろうか。あるいは、意味が。考えてもわかりそうにはなかった。そもそも、殺人鬼の嗜好などわかるはずがない……

一人目はカフスボタンのない自殺者。

二人目は校章のない死体。

三人目はネクタイのない死体。

四人目はブレザーのない自殺者。

五人目は、ネクタイのない死体……一つだけ、ないものが被っている。それは微細な違和感だった。同じものを盗まれている。

（……何の意味が？）

実際意味などないのかもしれない。気分次第で身包みをはぐ、そんな殺人鬼だっているだろう。気まぐれで人の物を盗む悪魔だっているだろう。わからないものの解を出すことはできない。

だが、これでわかってしまったこともある。それを呟いたのは、自分ではなく若菜だった。

「……死人、増えちゃったね」

それが意味すること。考えたくはなかったが。それを彼は呟いていた。

「残りは四人だ。殺人鬼と悪魔が、その中にいる……」

四人。姿のないあの人を含めた数。少しずつ少しずつ、殺人鬼が追い詰められていく。それとも自分たちが追い詰められていくのか。彼らはきつと、あの人を疑っているのだろう。

（では、私は？）

誰を疑っているのか。あの人ではないだろう。何となくだが、そ

んな気がする。だが、状況から考えるなら彼らでもない。ならば、誰を疑えばいいのか。わからないままに、橙香はもう一度視線を死体へ向けた。男の死体。どこにでもいそうな、無個性な顔……

男——男？

「……え？」

思わず声を漏らす。それはとても大きな違和感だった。はまり込んでいた歯車が、大きな音を立てて外れていく。外れたものが姿を変えて、どこかにはまり込んでいく。

狂い始めたロジック。それはまったく意味のわからないものだった。

死人は四人。そうヒントを送られてきた。そしてそれを信じていた。

だが、それでは数が合わない！

「どうかしたの？」

若菜の声。期待よりも怪訝のほうが強い、怪しむような声だった。その声を脳裏に残し、彼女を無視して考える。

(違う)

これじゃない。この声じゃない。悲鳴を上げたのは、女。彼女以外の女。

——生きていたこの『五人目』は、女でなければならないのだ。

「……十人目？」

「え？」

その眩きが誰のものだったのか。それさえも失念するほどに、呆然とする。それはありえてはならない答えだった。脳裏に言葉が走る——悪魔は偽っている。

もしかしたら、それは『ヒントそのものが嘘』だという意味だったのかもしれない。増えた可能性。だが、それが一番考えられそうだった……と。

「……え？」

不意に何か光ったような気がして、橙香は目を細めた。彼らの背後――階段のほうで、何か光った気がする。相変わらずの闇だった。その中で、何か動いたと錯覚したのだろうか。耳を澄ます。闇の中で光るものとは何か。

判断は一瞬だったろう。それ以上の時間をかけて間に合うはずがなかった。気づけばそれは、もはや影ですらなくなっていたのだから。

何かが、音もなく闇から飛び出してきていた。淡い光の中、煌いたのは銀色の光。

気づけば、鬼がそこにいた。

叫びが空気を振動させるのと、それが始動し始めるのはほぼ同時だった。

「しゃがんで!!」

「え……うわ!」

彼の悲鳴。彼がしゃがむのに遅れて、刃は空を切る。突然の殺人鬼の出現に若菜が悲鳴を上げる。が、そんなことを気にしてる余裕なんかどこにもなかった。力任せの一撃だったのか、殺人鬼は大きくバランスを崩す。その間に、彼は大きく殺人鬼から離れていた。その手に握られていたのは、どこにでもある包丁だった。ブレザーに身を包んだ、女。ただ、そうとわかるのは服装と体格だけだった。

顔には、演劇部の持ち物だろう能面。顔を見ることはできなかった。

「十人目……!?!」

自分たちを追ってきていたはずの。だけど、それはありえないことだった。確かに最初、殺人鬼は逃がさないと叫んだのだ――男の声で。逃がさないと叫んだのがこの女であるはずがない。アレは男の声だった。女であるはずがない。

殺人鬼が、女であるはずがない……

(何なんですか、これ……!?!?)

わけがわからない。だが、その理不尽さよりも目の前の理不尽のほうが今は問題だった。刃の冷たさが、空気を凍らせる。振り上げられた一撃。彼が弾く。

それは短い時間だった。決して長くはない。その短い時間の中、橙香は確かにそれを聞いた。

カランと、彼の手から棒が吹き飛んでいく音と。

「殺さなきゃ殺される、なら殺さなきゃ、殺さなきゃ殺さなきゃ殺さなきゃ殺さなきゃ」

確かに、殺人鬼がそう呟いていたのを。

殺さなきゃ、殺される。理解できなかった。何が言いたいのか、どういう意味なのかも。それを掻き消すように、彼が叫ぶ。

「……！！ てめえ！！」

「柳！！ ダメ！！」

「……………！！」

何がダメなのか。武器を落としてしまった苛立ちからなのか、それとも保身を取ったのか。どちらかはわからない。どちらも一緒なのかもしれない。どちらにしろ、彼は口惜しそうに叫んでいた。

「……逃げるぞ！」

橙香にとっては逆走だった。また、別棟に戻ろうとしている。どこに向かえばいいのか。それさえわからずに、彼らは駆け出していた。橙香もその後を追いかける。殺人鬼も、聞き取れない悲鳴を上げて追いかけてきていた。

どこに逃げればいい。このまま走り続けるのは無理だろう。いずれ、どちらかの体力が尽きる。それは最低の耐久レースだった。あちらの体力が尽きればこちらの勝ち。だが、こちらの体力が切れれば死。それは圧倒的なまでの理不尽だった。どこか、隠られる場所を探さなければ。

別棟の二階。隠られる場所。彼が目指していた場所？

——カチ、コチ、カチ、コチ、カチ、コチ、カチ、コチ。

不意に古めかしそうな時計の音を聞く。近い。それは幻聴などで

はなかった。どこかから、かすかにその音は漏れている。突き当たり。さっきも通った道からそれは聞こえてきていた。

思い出したのは、あまりにも暢気な声だった。

——のっぽじゃないけどうるさい古時計も？

その一瞬で、橙香はその意味を理解した。

アレは意味のある質問だったのだ。彼が行こうとしていた目的地。本来ならそこへ行こうとしていたのだろう場所へのヒントだったのだ。前方を走る彼らへと、橙香は叫ぶ。

「放送室！ 鍵は開いてるはずですよ！」

放送室。近い。すぐそこにある。防音設備がどうかで、作りも厚いはずだった。だが、底から音が漏れている。先に行く二人が、ハッとしたように息を呑む。すぐ目の前に、放送室の扉が迫ってきていた。

もしここが開いていなかったら、自分たちは殺人鬼に追いつかれることになる。そしたら確実に誰かが死ぬだろう。足の遅い自分だろうか。それとも彼女が大事そうな彼だろうか。彼女ではないだろう——それだけは、何となくわかっていた。

息を呑む暇なんてない。それでもその音が聞こえたのは、ただの錯覚だったのだろう。目を閉じていたのは、その一瞬を見たくなかったからだろう。

ガチャリと、鈍い音が響いた。

「早く！！」

手短な叫び。それは或いは悲鳴だったのかもしれない。乱暴に分厚いドアが開けられる。瞬く間に彼らは放送室へと入っていく。いつでもドアを閉められる体制で、彼が何かを叫んでいた。耳では聞き取れない。それは命令だった。それに合わせて、橙香は迷わず部屋の中へと飛び込む。転ぶのとそう大差ないほどの感覚。全身を激痛が駆け抜けた。

「アアああアアアアアアアアああアあ！！」

悲鳴のようでもあり、断末魔のようでもあった。自分が上げた声

ではない。それは殺人鬼が上げた声だった。彼の息を振り絞る呼吸音。部屋に入った直後、ボタンと大きな音がした。

そのまま彼は即座に鍵を閉める。がちやりと、鈍い音が響く。次いで聞こえてきたのは、何度も何度も扉を叩く鈍い音だった。声は聞こえない。ただずっと、何度も何度も殺人鬼は扉を叩く。くぐもった音だけが、ただ延々と続いていた。

誰も、何も言わなかった。その音が、いつの間にか聞こえなくなっていたとしても。誰も、口を開こうとはしなかった。

「……………」

呼吸が上がっていないのは距離が短かったせいだろう。あの人がいれば『火事場のバカ力』とでも言いそうではあったが。携帯の明かりしかない部屋で、ただのろのろと倒れこむ。

外からは何も聞こえてこなかった。防音設備の結果なのか、それとも殺人鬼が何もしてないのか。その判断はつきかねたが。何一つ聞こえてこなかった。今あるのは、古めかしい振り子時計の音だけだった。

どちらにしろ、これで確定したことが二つあった。考えたくもない、暗鬱すぎるのが、二つ。それを、橙香は力なく呟いた。

「殺人鬼……顔、隠してましたね」

あまりにも、馬鹿馬鹿しいことだった。能面で顔を隠して、人を殺す。あまりにもできすぎた光景だった。それ故に最低だった。

「は、はは……特定は不可能……戦えってのか？」

それを理解してか、彼は笑う。苦笑というよりも、泣き笑いに近い笑い方だった。

それを見ながらも、橙香も苦笑する。もう、恐怖なんて浮かんでこない。むしろ笑い出してしまうそうだった。我慢の限界が来たのかもしれない。どちらにしろ、殺人鬼に対する感情は麻痺してしまっていた。

「……どちらにしろ、助かった代わりに閉じ込められました。ここに」

認めたくはないことだったが、暗鬱に呟く。外には絶対、殺人鬼が待ち構えているはずだ。ノコノコと出てきたこちらを殺すために。それはある種の我慢比べだった。殺人鬼が諦めるか、それともこちらが観念するか。

振り子時計の音だけが、不気味に辺りに響いている。百八十回。三分。それだけを何とか数える。そのはずなのに、分針は何故か五分先に進んでいた。時間感覚は希薄になっている。音を立てる時計があるのに、それは不思議なことだった。

「……あれ？」

と。突然若菜が呟いた。入り口で固まったままの彼と自分を置いて、彼女は背後で何か見ている――それが彼女なりの時間の潰し方のようなのだが。若菜はぼんやりと、床に投げ出された二つの箱を眺めていた。薄暗くても、それが何の箱なのかはわかる。

「……デジカメの、箱？」

写真用ではなく、ビデオ用の。確かにそれは放送室なら合ってもおかしくはないものではあったのだろう。だが、問題なのは中身が入っていないと言うことだった。

「……何の意味が？」

それがわかることなど、きつとないのだろう。何となく、意味もなくそう思った。

その直後だった。

また、悲鳴。防音扉を切り裂くような、それは鋭い女の悲鳴だった。

聞き覚えのある、悲鳴だった。

8 躍らせるネズミ。

人間も時計も携帯も変わらないのではないか。闇の中でふと思う。チクタクチクタク音を発しているわけでもなければ、電波を受信するわけでも、二本足でテクテク歩くわけでもない。共通点を探すのは酷な話なのだろうが。それでも彼は考えていた。

人も時計も携帯も、実際大して変わらないのではないか。

まず動作する。次に目的がある。三番目辺りに同じことしかない。四番目に自分からはあんまりその場から離れようと思わない。五つ目辺りに……何があるだろうか。何番目まであるのかは考えてみないとわからないが、とりあえず彼にとっての最後は決まっていた。歌うように呟く。

「どっちも、最後には壊れる」

寿命かどうかはさておき。まあ、そんなものだった。

魂の有無に関わらず、動かなくなった物は廃棄処分だ。方法としてだが、たぶん焼却処分。人間だって最終的には火葬だ。その後はつばに押し込められて終身。やっぱり変わりない。跡形が残るかどうかの違いしかないではないか。そこで彼はため息をついた。

違いがないのなら、やっぱり物だって何かを呪ったりするのだろう。夢に出てきたりとか、耳からあのチクタク音を離れなくさせたりとか、電波を受信しなくなったりとか。

とりあえず、彼はそこで天井を見上げるのをやめた。空気は冷え切っている——まるで、凍り付いているように。実際凍りついても問題のない気温ではありそうだったが。

これまたとりあえず、手持ち無沙汰のまま彼はポツリと呟いた。

「……まあ、仕方のないことだよな」

廊下に声が響く。だが当然、誰も聞いてはいなかった。当然のことではある——放送室は自分が最初にいた場所だ。隠れる場所にはもってこいである。とはいえ、土壇場でそれに気づく辺り運がいい

というか何というか。いや、悪いのだろう。そこに隠れたら最後、意を決するまでは出られない。やっぱり時計と同じなのだ。四番目。特定の場所から、あんまり動こうとはしない……殺人鬼というつかえ棒のせいだが。

だが、それもお終いだ。どんなに長く見繕っても、後五分したら出てくるだろう。いくらなんでも悲鳴が大きすぎた。音漏れのする放送室にも聞こえていたはずだ。

誰も聞いてくれる人はいない。それを理解しながらも、彼は独り言のように——つまりは独り言などではなく——囁いた。足元を見下ろして。

「独りでいたんだしさ……何が起っても、何も言えないよ？」

人が転がっていた。これ以上ないほどに明確な、殺人現場っぽい光景。気持ちよさそうに白目を剥いて、体を床に投げ出している。別に驚く必要もない。それは見慣れたものだったのだから。カフスボタンのない死体だってネクタイのない死体だって校章のない死体だってブレザーを盗まれたのかワイシャツ姿の死体だって見てきた。驚く必要などない。

やっぱり時計と同じだった。誰もが同じことしかしていない——死んでいる。

問題は、それが二つあったことだった。能面を被っている女と、ネクタイのない男。

より正確に言うのであれば、死に掛けてる女が一人に、死んでいる男が一人。

「全員殺せば、殺されることはない……まあ、確かに間違っちゃいないさ。とっても単純だ。自分以外の誰かが犯人なんだから、ね。全員殺せばいい。本当はそれを止めるために捜してただけ……ま、発想自体は悪くないんだ。別に、僕は責めないよ」

聞いているだろうか。それともやっぱり意識が吹っ飛んでいるのだろうか。彼女を見下ろして、彼は小さく首を捻った。怒涛の急展開なのか、それともこれが始まりなのか……今にして思えば、時間

にして一時間も経っていない。

ホラー映画なら、ここから起承転結という転になるはずだったのだが。

「……本当は始まりなんだよね、これ」

で、すぐ終わる。あまりにも馬鹿馬鹿しい。名探偵もヒーローも超人も皆無。悪魔と殺人鬼と一般人だけがここにいる。ただ、悪意だけの物語。

それ故に、悪魔のゲーム。

「……さて、どうしようか？」

死体と死に掛けから目を離して、独り自分に問いかける。

答えなどわかりきったことだった。考えなくてもいい。考えなくても終わりの形は見えている。ゲームの流れは見えている。あとはどう終わらせるかだった。

これまた物と同じなのだ。目的があるから、動く。壊れるのは最後でいい。百年も待たなければいけないのか、それともぽっくり逝くのか。それは置いて。いて。

「そろそろ、終わりにしたいからね」

全てを終わりにしなければならない。もう夜は明けるのだ。ならば、この闇も開けてしかるべきなのだ。だから、終わらせる。方法は二つある。どっちもでもいい。どちらにしても、今度こそ完璧に全てをこなさなければならぬ。どちらもミスは許されない。

殺すか生かすか。生殺与奪は自分が握っている。これは悪魔のゲーム。これは殺人鬼が誰かを当てるゲーム……悪魔は、ずっと欺いている。

これはその言葉の通りのゲームだった。

「とにかくにも終わりは彼ら次第かな。いつ放送室から出てくるか。話はそれからだ」

近くに放り出されていた包丁を拾って、そう呟く。必要なのは、舞台を混乱させずに、最後に全てをひっくり返すことだ。予想外のアクシデント。だが、それのおかげで早く終わりにすることができ

る。当分の間、彼女も目覚めることはないだろう。

問題はない——意識的にそう思うことにして、彼は自分の右の手のひらを見た。違和感と不快感とこそばゆさを感じさせる、拘束感。白色のハンカチ。それと包丁を交互に見て。

「……やっぱり、返せないよねえ。使い終わったらとんでもないことになってるだろうし」

面白くもない想像——だが、彼は小さく唇を歪めた。誰も聞いてはいないだろう。この闇の中、意識があるのは自分だけなのだから。それでも、呟く……

「独り言じゃないよ？ 君はヒントを与えすぎたんだ」

悪魔を笑う。誰も答えない。それは当然のことだった。

声は闇に消えるだけ。それでも彼は、微笑も声も隠さなかった。キラリと一度、包丁が鈍い光を放つ。氷よりも冷たいそれを、一度だけ強く振りぬいて。彼はこの上なく愉快そうに微笑んだ。そろそろ彼らが出てくる。隠れなければ。

「……それじゃ、頑張ってみますか？ いろんな意味で」

闇に溶ける、その直前。彼は『死体』を見下ろして、この上なく愉快だと微笑んで。

囁くように、嘲った。

——チェックメイト。

9 踊らされるネズミたち・壊滅編。

誰も、何も喋ろうとはしなかった。

静まり返った空気。それに混じって、むせ返るほどの鉄の匂い。それは今まであつてしかるべきだった、生の残り香。今まで何故か存在していなかった、それは赤い匂いだった。

血濡れた、死者が二人。能面を被っている女と、ネクタイのない男の死体。さっきは死体が一つだけ転がっていたはずの場所。男の死体の上に覆いかぶさるように、女が死んでいる。ただ呆然と、その二つを見つめていた。

さっきまで殺人鬼だった女が、今は死体として死んでいる。それが何を意味するのか、考えれば考えるほどに混乱する。殺人鬼が死んでいる。殺人鬼を殺した殺人鬼が、まだどこかに隠れている。

でも、誰が。誰が彼女を殺したのだ。

「……これで、決まったな」

無表情で、無感動に。彼の声が、辺りに響く。何が決まったというのだろう。若菜もそれがわかっているのか、何も言わない。だが、それを聞きたいとは思わなかった。聞いてしまえば、何故か後戻りができないような気がしたから。

「また……殺された。包丁が奪われてる……なら、死因は切られたことによる出血死か」

彼の声。死んだ女を見下ろす。能面にこびりついているのは、女の血。殺さなきゃと叫んでいた女が、今日の前で死んでいる。

思い出したのは、あの人が呟いていた言葉だった——疑心で、人は人を殺せる。

彼女も……能面の女も、きっとそうだったのだ。殺されなければ殺される。その言葉の意味も、今なら寸分違わず理解できる。

——殺人鬼がいるのなら、殺人鬼でさえも殺してしまえばいいのだと。

殺される前に、全て殺してしまえばいいのだと。

あまりにも、それは馬鹿馬鹿しい発想だった。自分が助かるために全てを犠牲にする、それは人として最低の行為だった。そして当然の行為だった。

無表情で――怒りや憎しみや敵意、そう言った感情を押し殺すための顔で、彼は囁く。

「悪魔のゲーム……か。確かに、悪魔のゲームなんだろうな、これは。ずっと、ずっと何かがおかしかった。だけど、これで終わりだ。終わりにんだ」

聞きたくないと、何度も繰り返す。それでも、それが結論なのだと。若菜もきつと、認めている。違和感はあるとしても、それが一番自然だから。

「……アイツが、殺人鬼だ」

何故そう言いきれなのか。実際証拠なんてどこにもない。誰にも有罪の証明はできない。なのに、彼はそう言いきる。若菜は何も言わない。薄闇の中では、彼女がどんな表情を浮かべているのかもわからない。

だが、それでも橙香は否定した。肯定するわけにはいかなかった。「ですが、それでは辻褃が合いません……死体が五つあって、生存者が五人いた理由も。最初に逃げ出したときに、逃がさないと叫んだのが誰だったのかも」

あの時、確かに誰かが歩いてきていた。そして確かに逃がさないと叫んだのだ。そんなことができるのは、当然背後にいただろう殺人鬼しかいない。だが、あの人はすぐ近くにいたのだ。叫んでもいない。ただ走っていただけだった……違和感だけが重なっていく。

響いたのは、威圧するように低い声だった。

「だったら、これはどう見るんだ」

闇の中、殺意を感じるほどに目をぎらつかせて。瞳の中にある苛立ちは憎悪にも近い色をしていて――それは明確な敵意でもあった。一瞬前までの隠蔽のための無表情も、もう跡形もない。

その瞳を死体に向けたまま、彼は呟く。

「生存者は五名だった。だったんだ……その一人が、殺された。誰に？ 俺たちは全員放送室にいたんだ。なら、殺せる奴なんて一人しかいないだろう！？」

最後には、押し殺された叫びへと変わっている。それは彼にとっての悲鳴だったのかもしれない。押し潰されそうな心の抑圧の代理だったのかもしれない。だが、もう疑うべくもない。

「悪魔が嘘つきだから、違和感が出たんだ。全ての違和感は嘘だったから。それで終わりだ」

彼はもう、あの人が殺人鬼なのだと信じ込んでいる。

そして自分は信じていない。

状況的に考えるなら、おかしいのは自分なのだろう。あの人の言葉が、そのまま答えになる。

——殺人鬼以外の全員がいれば、アリバイは成立する。

奇しくも、今のうちに。それは既に絶対のものだった。覆すことに意味などなく、覆す方法もありはしない。疑う余地などないのだ。あの人が、彼女を殺したことなど。

(……それでも)

違和感は消えない。色んな違和感。殺人鬼への違和感や悪魔への違和感、あの人への違和感や——自分への違和感。何一つ信じることができない。何一つ確かなことはない。嘘だったのだと片付けることができない。

自分でさえも、自分の感情に折り合いをつけることができない……それでも、自分は未だにあの人を信じている。馬鹿馬鹿しいと、愚かだと理解しながら。それでも、疑うことができなかった。

闇の中、手を差し伸べてくれた。それだけ。それだけの理由で、自分はあの人を信じている。橙香にとってはそれだけで十分だった。

誰かが何かを言う前に、橙香は呟いた。

「ここで、別れましょう？」

「……え？」

返ってきたのは、彼ではなく若菜の声だったが。二人とも同時に同じ困惑を浮かべるのを見ながら、橙香は微笑んだ。想像通りの反応だったからだ。

「あなたがたは出口へ……昇降口へ向かってください……私は、あの人を捜します」

「……!? わかってるのか!? アイツは――」

ようやく理解が追いついたのか。予想通りの彼の叫びだった。

「ハンカチ、まだ返してもらってませんから」

それも、途中で遮る。何を言っているのかと。正気を疑うような困惑と絶句。実際自分が正気なのかどうかも怪しい。だが、別にどうでも良い事だった。だから、彼らからも視線を離す。

見据える先にあるのは闇。あの人が見えているかもしれない黒。どうせあの人のことだ。この闇の中でも平然と歩いているのだろう。見えているのか見えていないのか。どちらにしろ、立ち往生などはないはずだ。完全な闇の中でも、あの人はどこかを見ていたから。

闇。数十分前は、泣きそうなほどに怖かったもの。自分を飲み込んでしまうもの。その印象は今でも変わらない。自分を殺してしまうもの。きっとそれも、間違いではない。

それでも。あの人を捜すのにためらいはない。

「……さようなら」

橙香は歩き出す。彼らは立ち尽くしたままだった。

反響する足音。無限に響く音。怯えている暇なんてなかった。ずっと、ずっと耳を澄ます。

闇の中に、あの人を捜すために。

沈黙は長かったように思える。だが、それでも数分も経過していないのだろう。

何も言えず、闇に吞まれて消えた少女の背中を見送り続けた。足音さえも消えて。それでも何も言えなかった。何を言えればいいのか。

何と言えはいいのか。ただそれだけのために時間を費やす。色んな言葉があるはずなのに、真っ白になった頭は何も思い浮かばせてはくれなかった。

沈黙を破ったのは、若菜の声だった。

「……よかったのかな。止めなくて」

心配そうな声。それはただ彼女の身を案じただけの声だった。彼女は殺人鬼を追った。もうわかりきっている明らかな敵を、味方だと信じて。

それは愚かの一言でしか表せないほどの愚行だった。状況が既にあの男を示している。疑うべくもないのだ。違和感何も関係ない。あの男なのだ。全てあの男で終わりなのだ。

それでも、彼女は妄信的なまでにあの男を信じていた……

「何を言えば、止められたんだよ」

吐き捨てるように、ただそれだけを呟く。自分でもわかっているのだ。止めるべきだったのだと。むぎむぎ『猫』に『餌』をやる必要などないのだと。それくらいわかっているのだ。誰にだって、どんなバカにだってそれくらいわかる。

それでも、彼女を止める言葉がなかったのだ。引き止めようとして、だけど結局言葉もなくて。ただ見送るだけしかできなかった。この感情は、恐らく後悔なのだろう。彼女を、ある意味で見殺しにすることへの。

「……理解、できねえよ」

わかるわけがない。殺人鬼を追う気持ちなど。

わかることなど、もう彼女を追うこともできないという事だけだった。闇は濃い。階段を降って一年棟に向かったのか、それとも上って三年棟に向かったのか。或いは二年棟に行ったのか。それさえもうわからない。

「ねえ、柳」

耳に届いたのは、何かを確かめるような声だった。

「……何だ？」

「もし、もしもだよ？　もし……あたしが殺人鬼としか思えない状況に立たされてたとしたら……それで、どこかに隠れてたとしたら。柳は、あたしを捜す？」

問いの意味が——真意が理解できずに、背後にいるだろう若菜を見る。少しだけ離れた場所に彼女はいた。薄い携帯の光では、若菜の表情は照らせない。闇の中に浮かぶ輪郭。声からも顔からも、真意を導き出すことはできそうになかった。

答えによっては、何かが狂ってしまうかもしれない。抱いたのは、そんなひどく漠然とした不安だった。何故そう問うのか。わからない。わからないものが多すぎる。それでも、答えるしかない。

「追うんだろうな。たぶん」

「どうして？　何をするために？」

「……知らねえよ。そもそもそんな状況が来るとも思っていないし」
もしもの話なのだ。ただの仮定であって、そもそもそんなこと考えたこともない。考えたくもないことだった。若菜が誰かを殺す。そんな状況、起こってなんか欲しくない。

ため息をついた。無意味な質問。無意味な回答。

「……どっちにしろ、追うだろうさ。その先に殺されたんだとしたら……まあ、素直に諦めるさ。とりあえず、無責任に信じてお終いだ。たぶんな」

それを終わらせるために。不安を振り払うように、柳は苦笑して見せた。若菜は何も言っていない。何も変わらない。何も動かない——いや。

「……理解できてるじゃん」

若菜もため息をついたらしい。或いは苦笑だったのか。

「あの子も、きっと同じ心境だったんだと思う。殺してないと信じてるんだよ、きっと」

それは、もしかしたら彼女を引き止められなかった言い訳だったのかもしれない。柳にはよくわからなかった。ただ、沈黙したまま若菜の言葉を待つ。

言葉は、まったく関係のない簡潔な誘いだった。

「……そろそろ行こっか」

「そうだな」

短く呟く。これ以上ここにいる必要性もない。

終わりにしなければならない。もう答えなどわかりきっているのだ。殺したのはあの男だ。後は昇降口から出ていくだけ。それで終わりだ。

最後に死体を一瞥する。死んだ男と女。悪魔に魂を奪われる。もしかしたら、そこに転がっていたのは自分だったのかもしれない。何かのミスで殺されて。そう思うと、彼らには哀れみを禁じえない。悪魔に奪われた魂の行方はどうなるのだろう。わかるはずはなかった。

どちらにしても、もう終わる。これは少し特殊な一夜の夢だった。それでいいのだ。いつかは笑い話になる。自分だけが見た夢だったとしても、思い出のページくらいにはなる。忘れることのできない、悪夢という思い出として。終わってしまったえばその程度のものなのだ。だから、終わらせるために歩き出さなければならない。

歩き出そうとした時だった。

——カッン、と。

その音が、静かに強く響いたのは。

「……！」

叫びだしたくなる、その衝動を殺す。響く足音の意味。

それは明確に大きくなっていった。近づいてきている。走っているのか歩いているのか。その区別さえつかないほどに強い反響音。

それはさっき別れた少女の足音ではなかった。少女の足音よりも重く、だが柳のものよりも軽い。その音は、聞き覚えのある音だった。そして、予想していた音だった。

もう答えはわかっている。このゲームは終わりなのだ——自分たちが、この学校から外に出た時点で。もう勝ちは見えている。あの少女ではなく、自分たちに。だったら、確実に潰しに来る。それ

は疑う余地もなく、確信ですらなく、ただ当然の流れだった。

殺しに來た。あの男が。負けないために。

足音は響き続ける。少しずつ、少しずつ。確実に、近づいてきていた。どちらからか。恐らく、放送室のほうから。背後からではない。音の反響は、目の前の闇から響いていた。

「……柳」

背後に隠れるようにして、若菜の声。にじみ出ていたのは、不安と恐怖を等分にした感情だった。殺される。殺すためにやってくる。負けないためにやってくる。自分たちを勝たせないために。

それだけは避けなければならなかった。負けることだけは許されない。負けた瞬間が終わりなのだから。言い換えるなら、勝ってしまえばそれで終わらせることができるのだ。勝たせるための一手。必要なのは時間。

「若菜」

だから、しがみついてきた幼馴染を呼ぶ。勝利の一手。全て予想していたからこそ、笑いたくなるほど冷静な声が漏れた。その声で、告げる。

「ここから先は、お前一人で行け」

「……え？」

それは酷な命令だったのかもしれない。背後で、若菜の体が震えたような気がした。気ではなかったのかもしれない。だが、今はそれを無視して冷たい声で囁いた。

「俺は時間を稼ぐ。その間に、お前は昇降口から外に出ろ。そうすれば俺たちの勝ちだ。だから、お前が勝て」

「え、あ……ちょ、ちょっと待ってよ？ 何言ってるのよ？」

近づいてくる足音。武器はもうない——薄闇の中、モップの柄はもうどこかへ消えていた。徒手空拳での対峙。考えなければいけないのは、どうやって殺人鬼の時間を失わせるか。

だからこそ、その時間を得るために言葉を突きつける。

「負けるわけにはいかないんだよ、若菜。だから、確実な方法でい

く。役割分担だ……俺が時間を稼ぐ。お前は、勝ちに行け」

「柳……!？ 何勝手なこと言ってるのよ! いいから一緒に――」
「行くわけにも、いかねえだろ? 逃げてでも殺されたんじゃ意味がないんだ。相手は悪魔だぜ? なにができるかわかったもんじやない」

「でも……!」

それでも食い下がってくる若菜に、苦笑する。

「でも何もねえよ。これが一番確率高いんだからさ」

本心を述べるのなら、このまま一緒に逃げ出してしまいたかった。殺人鬼も悪魔もゲームも、何もかもを放り出して。今すぐにでも逃げ出してしまいたかった。

死。死が怖い。自分の死も、若菜の死も。

(……目の前だけを、見ろ)

感情は完全に無視をした。今だけは、それが不要だとはっきり言えたから。自分に命令する。自分は勝つための捨て駒。踏み台。そうあることだけを望む。少しずつ、覚悟で自分を固めていく。

その最中。ポツリと呟いた。

「帰ったらさ。今度新しくできるカフェに行こう」

「……カフェ?」

「そ。そこでコーヒー飲んだりケーキ食ったりしてさ。くだらないこと話して、馬鹿馬鹿しいことで頭抱えて、アホみたいなことで盛り上がって……いつもみたいに笑ってさ」

そうやって、いつもどおりに戻るのだ。このくそつたれた非日常ではなく、どこにでも落ちている日常へと。殺人鬼とは無縁で。悪魔なんて存在しないのが常識で。そんないつもどおりへと。

戻るのだ。戻るためにも、勝つしかないのだ。

「だからさ。さっさと終わらせてきてくれよ。お前が行けば、帰れるんだ」

だからこそ、柳は笑った。不安を紛らわせるために。未来に思いを馳せるように。沈黙は長く、静寂の中にあるのは殺人鬼の足音だ

け。背中の若菜は動かない。

不意に、その熱が消えた。

足音の中にあっただのは、消えてしまいそうなほど弱々しい声だった。

「約束、だよ」

「ああ……約束する」

それが別れの言葉だった。お互いにもう、振り向くこともない。走り出した若菜の音が遠ざかっていく。それに比例するように、殺人鬼が近づいてくる。携帯の明かりは、闇の全てを照らしてくれない。近づかねば、姿も見えない……ただひたすらに待つ。

(……来いよ)

心に火をくべる。恐怖を闘争心に変えていく。目の前の闇を、ただずっと凝視した。何もこない。何も現れない。殺人鬼の姿は、依然として闇の中……五秒、十秒、二十秒。翔るようにゆっくりと響く音。

カッン。

その音が、最後に聞こえた足音だった。静寂。静謐。息を殺して、殺人鬼を待つ。眼前の闇の中に、殺人鬼はいるはずだった。濃い闇の中、照らされたものは何もない。無音は、あまりにも長く続いた。そして。

「いやあ、悪いね少年。騙すようなことしてさ」

聞こえてきたのは、声だった。どこか間の抜けた、暢気な声。闇の中響いたその声。殺人鬼の声だった――あの男。姿はない。それでも近くにいるはずだった。闇の中、一步踏み出す。一步分、闇が消える。また歩く。何もない。三步目、四歩目。

五歩目にして。

初めて、柳は絶望を知った。

「君は最後だよ。一番君が扱いにくいからね。ま、そういうわけでまた今度会おう、メイタンテイ。全てが終わった後にでも」

デジタルビデオカメラ。人目につかないよう、廊下の端に。

闇にあったのは、ただそれだけだった。

闇の廊下を駆け抜ける。薄闇の廊下。響くのはけたたましい自分の足音。反響して反響して反響して、幾重にも増えて錯覚を呼ぶ。走っているのは自分だけではないのではないか。そんな錯覚。

(……！)

それを振り切るようにして、若菜は更に強く床を踏み抜いた。反発は体を前へと押し出す。減速することさえ許さず、加速することだけを自分に命じた。止まることなどはや論外だった。振り向きたい――あの馬鹿な幼馴染のところに戻りたいという衝動さえ殺して、走り抜ける。

「勝てって……！」

勝てと言われた。

殺人鬼は自分が受け持つから。時間は稼ぐからと。しがみついた時に感じた馬鹿の体。震えていたのだ。自分だって怖いくせに。自分だけが恐怖を受け持とうと、いつもみたいに振舞って。

そんな馬鹿が言ったのだ。

「勝てって！」

叫びは小さく、意志は強く。もう一度、強く床を踏み抜く。反発に身を任せて前へ。少しでも早く前へ。階段を駆け降りる。転べばひとたまりもないだろう。その速度で駆け降りる。一秒遅れるたびに、あの馬鹿は死に近づいていく。その事実が自分を駆り立てる。

踊り場で小さくターンする。速度を殺さずに、また加速する。止まらない。止まる気もない。ただ前へ。ずっと前へ。

(約束だから)

あの馬鹿との約束。このわけのわからないゲームを終えて、現実世界に戻って。また、いつもみたいに笑って。いつもみたいに馬鹿と一緒に。

一緒にいたい。また、戻りたくなる。その衝動をまた殺して、闇

を見据えた。止まらない。踊り場から駆け降りる。

——だからこそ、そこが終わりなのだと気づけなかった。

脛の辺りに熱を感じた。何かを蹴飛ばしたのだと理解した、その時にはもう遅かった。止まらない。止まらない。ゴールにあるゴールテープ。その一瞬でそう理解した。止まらない。加速した体はもう止まらない。バランスを崩して、何もかもが吹き飛んでいく。意識さえ、もうないのかもしれない。明かりが吹き飛んでいく。

止まらないとどうなるのか。体が宙に浮く。

もうそれだけで十分だった。そして全てが終わりを告げるのも。転げ落ちていく。受身すら取れず、階段を。激痛は永遠に続くのではないか。何度も何度も階段の角にどこかがぶつかる。激痛は熱だった。熱は血の味がした。血は闇の色をしていた。視界が黒く染まっていく。

その時初めて若菜は絶望というものを知った。知ったときには希望はなかった。

(……やだ)

消えていく。何もかもが消えていく。闇。明かりはもうない。どこかに吹き飛んだ。闇。意識も闇に落ちていく。転げ落ちた体が止まる。最後に強く頭を打ち付けた。闇。思考さえも黒一色。闇。

闇。その中で理解したのは、何かに躓いて階段を転げ落ちたことだけ。涙は流せなかった。悲鳴も上げられなかった。ただ外気の冷たさだけが熱を撫でていた。もう動けない。

悪魔だった。悪魔のせいだった。何もかもが悪魔のせいだった。もう勝つことができない。どこかを目指さなければならぬのに。早く行かないといけないのに。勝てと言われた。

約束があった。あったのに。

(いやだ)

割れた。何かが。心だったのかもしれない。砕けた。悲鳴も上げられない。涙も流れなかった。ただ自分と悪魔が憎かった。終われない。ここでは終われない。わかっている。わかっているのだ。

（いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ……）

なのに、体が動かない。意識でさえも停滞していく。気絶する。それは絶望だった。意識が消えていく。激痛にもう、耐えることができない。悲鳴を上げたかった。叫びだして彼を呼びたかった。謝りたかった。

聞こえた声は、絶望の音をしていた。

「やりすぎたかな……まあ、いっか。そんなの関係ないし。まずは一人目。残るは三人」

それが最後だった。そして最後に理解した。

こいつがさっき躓いたものの正体だったのだと。

それが最後だった。

「……ここにもいない」

呟いて、三年二組の教室を閉じる。首を吊って死んだ、男がいた教室。誰も人気のない場所にあの人が隠れているのだとしたら、そこが最も可能性の高い場所だった。死体に集まる者などいないのだから。

嘆息して、橙香は歩き出した。手の中にある、あの人の携帯を頼りに、警戒しながら。先ほどまでは嫌というほど辺りが騒がしかった。さっき別れた彼らだろう。出口を目指して駆けていったのかもしれないし、殺人鬼と遭遇したのかもしれない。

ふと思ったのは、本当に彼らは外に出れるのかという事だった。初めから考えてしかるべきだったことだ。もしあの人が犯人だとするのなら、彼らは出られる。自分はきつと出られないのだろうか。どちらにしろ、彼らは勝てる。

だが、あの人が犯人でない場合は。自分が信じているあの人の通りだったのなら。彼らは出られない。昇降口で立ち往生することになる。それを殺人鬼は見逃すだろうか？

悪魔は見逃すだろうか……？

わかるはずもない。結局のところ、何が正しいのかもわからないのだ。嘘つきの悪魔。姿の見えない殺人鬼。嘘のせいで、ヒントがあっても何も特定できない。誰が殺人鬼なのか。

「……考えても、わかりません」

結局のところ、考えるのは自分ではなくあの人の役目なのだ。だから探す。殺人鬼よりも早く捜して、あの人と一緒にこのゲームを終える。終える……

終えたら、もう会えないのだろうか。それはふと感じた疑問だった。これはゲーム。一夜限りの最低な夢。だとしたら、この後あの人はもう会えないのだろうか。

（それは……嫌）

理由はわからない。ただ、それだけは嫌だった。こんな最低な状況じゃなくて、もっと普通の時に話をしたい。馬鹿みたいなことを話し合って、くだらないことで笑って。そういう、普通の関係を作りたいかった。

だけど、それも夢の話。これが終わったら、全てなくなってしまふ。それは仕方のないことで——諦めるしかないことだった。ため息は出なかった。ただ、目だけが熱かった。

「……っ」

気づけば泣き出してしまふそうだった。あの人に初めて会ったときのように。ただ、今度は安堵ではなかった。胸の内にあるのは、何かが欠けていく痛み。何かを失ってしまう痛み。

それを振り切るように、橙香は歩き出した。捜さねばならない。最後には忘れてしまうのだとしても、するべきことは変わらないのだ。捜さねばならない。

そして、それは突然だった。

「……え？」

一瞬で闇が辺りに満ちる。何が起こったのか——理解するのは簡単で、そのくせ困難なことだった。携帯の電源。電池切れ。もう、辺りを照らしてくれることはない。闇。闇しか見えない。それは何

もないのと同じことだったのかもしれない。

わかつていることは一つだけだった。

この闇では、歩き出せない。どこを捜しても、もう何も見る事ができない。完璧な闇の中では、どうすることもできない。何もできない。ただ、闇に蹂躪されるだけ。冷たい外気と、無音の静寂。悲鳴を上げてしまいたかった。そうすれば何かが変わると信じて。

「……………」

だが、声が出せない。闇。その中に潜むものの存在が、橙香の声を失わせていた。この闇の中で、自分の存在を誰かに知らせることはできない。闇の中にいるのは誰か。あの人か、彼らか。それとも最低だった。何もかもが最低だった。もう彼を捜すこともできない。殺人鬼を見つけることも、逃げることもできない。近くに壁はない。歩くことさえできない。闇は、ただそれだけの存在であるのに恐怖でしかなかった。

独りであることを知ってしまうから。自分しかいなくて、他は誰もいなくて、何もなくて。そのくせ何かいそうで。だから、闇が怖い。独りであることが怖い。

それはあの人と会う前に確認してしまったことだった。少しずつ少しずつ、一人の孤独が自分を削っていく。闇への怯えはもうない。ただ、誰かが近くにいて欲しかった。

あの人が近くにいて欲しかった。

もう泣き出すことさえできない。救いの手はもうどこにもない。

闇だけがある。そうして不意に、橙香は全てを悟った。

——この闇は、自分を壊すためにあったのだと。

そう悟った、直後だった。

何かが、動いているのを感じたのは。

「……！」

気づいたときにはもう遅かった。抱きしめられた——いや、羽交い絞めにされていた。ただ、優しいくらいに軽い力で。だからそう錯覚したのかもしれない。悲鳴を上げようとは思わなかった。もう、

全てを受け入れてもいいと思った。口元に何かを当てられる。甘い匂い。それに奪われるように、意識が消えていく。

消える意識の中、あの人の声を聞いた気がした。

「手荒で悪いね……まあ、眠っていてくれ。抵抗させる余裕も、説明する時間もないんだ。あと二人残ってるからね」

10 踊ったネズミ、躍らせたネズミ。

疲労は既に限界だった。

痛みは既に臨界点を超えていた。体力は既に底を尽きた。残っているのは気力だけだった。激痛。鈍痛。灼熱。痛みは熱だった。その熱に溶かされている。まだ意識は保っている。船の中、波に揺られているような気分。体は動かない。声さえ上げることができない。重い。体が重い。まるで関節に鉛が詰まってしまったかのように、重い。それが限界というものだった。生が終わる瀬戸際。きつとこんなものなのだろう。人は死が怖いのではない。人は痛みと終わりが怖いのだ。

自分がロストする瞬間。それがたまらなく怖いのだ。

ため息でも何でもつきたい気分だった。あまりにも馬鹿げている。何もかもが馬鹿げている。何故血に濡れているのか。誰の血なのか。自分のではない。なのに、何故こんなにも全身が血まみれなのか。もしかしたら、どこか怪我でもしたのかもしれない。転んだ場所にはガラスが散らばっていた。この熱はそれのせいかもしれない。動けないのだから、怪我を捜すことはできなかったが。

意識を失ってからどれくらいだっただろうか。彼女はふと考えた。携帯は当の昔にバッテリーがへばっている。確かめる術はない。そもそも、いつ気絶したのかも覚えていなかった。ただ、何かに躓いて思いつきりずっこけた記憶はある。闇の中で全力疾走したのは間違いだっただ。たとえ殺人鬼候補の人間に逃げられてしまって、慌てていたとしても。それは仕方のないことだった。そこで気づく。いつ気絶したのか、覚えていたではないか。

気絶して落ち着いたのか、もう心は乱れない。その落ち着いた心境が体に命じたことは、ただ単に瞼を開くことだった。状況を把握しなければならぬ。重い。眠いわけでもないのに、瞼を開くのは相当の労働だった。それでも、開く。

誰かの後頭部が見えた。

(……は?)

見覚えのない後頭部。たぶん、さっきの殺人鬼候補ではない。声は上げられなかった。上げる必要があったのかもわからなかった。意識は急速に理解する。

誰とも知らぬ男に、何故か背負われている。

どこを指しているのか。男の肩越しに見えたのは、昇降口だった。

「あー、血が足りない。こんな体で肉体労働……本当にスパルタだよ、この作戦。無茶ぶりもいいところだよ、本当に」

男の愚痴が聞こえてくる。それに何の意味があるのか。肉体労働。たぶん、自分を運んでいることだろう。どこに？ 向かう先は昇降口の外——闇を写したガラス扉。外？

開かないガラス扉。外に出られないはずの昇降口。疑問は、一瞬で驚愕と歓喜と恐怖に変わった。

闇が解放されていた。開かないはずのガラス扉。今はぽっかりと口を開いている。外。

このゲームから解放されるのか。希望は恐怖でもあった。それを確かめるのは怖い。だが、男は止まらない。ずんずんそちらに近づいていく。止まらない。止まらない。こちらの意思など無視して、男は開放された闇の前に立った。

不意に、開放感。背中から地面に下ろされる。体が動かないことを気絶したままだと思い込んだのか、男はこちらを一瞥すらしなかった。ただ、つまらなそうに呟いていた。

「……ま、これであと一人なんだ。もう慌てる必要もない」

そのまま、ようやくこちらを一瞥する。まるで物でも見るかのような目で、男はこちらを見下ろしていた。何の感慨も抱いていない目。男はこれまたぞんざいにこちらの体を掴んで。

「よっこいせ」

どうでもよさそうに。闇へと突き飛ばした。その間際、ふと彼の

右手首に目がいく。赤いハンカチを、リストバンドのように巻いている。それに何の意味があったのか、よくわからなかったが。とりあえず、闇に意識が溶けていく。それは夢が覚める感覚だった。

本当に。気絶していた間に何の進展があったのかも含めて、本当に何が何なのかわからないままだった。

こうして、悲鳴を上げ続けて包丁を振り回した恥ずかしい自分は、闇の中へと消えていった。

「や、メイタンテイ。君を待ってた」

気楽に呟く。立つのももう億劫だったから、開放されたガラス扉の隣で座り込みながら。闇を晴らすのは小さな光源。それに照らされて、彼は無表情にこちらを見つめていた。額には汗。どうやら、走り回っていたらしい。ご苦労様と声をかけたかったが、それをしたら最後、意識が彼のどちらかが飛んできそうだったのでやめた。

彼はこちらの挨拶など完璧に無視していた。ピクリとも笑わない。冷たい声音で問いかけてくる。

「さっきの女。アレは誰だ」

背負っていたところを見ていたらしい。別に何もやましいことはしていないので、気楽に答える。

「五人目だよ五人目。もういる意味ないから退場してもらった。さすがに苦労したけどね。タイミング間違えると、君に見つかっちゃうから」

本当に彼女は無意味そのものだった。登場から終了まで、本当に何がしたかったのかわからない。本当に紛らわしくて厄介な人だった。まあ、その分最後には利用させてもらったが。彼女の事を考えると、右の手首がジンジン痛む。今そこには、後輩から借りたハンカチが巻かれているのだが。

ハンカチも含めてそんなことなどどうでもよかったのか、彼は更に問いかけてくる。

「最初にお前といた、あの女は」

「あー、あの子ね。退場してもらったよ。傷つけるとちょっと大変そうだから、化学準備室から拝借したクロロホルム使ってね」

さすがに、無茶をしたとは思ったものの。後輩が抵抗してこなかったのは本当に救いだった。もし抵抗されていれば、あんなにうまく眠らせることはできなかっただろう。悪いことをしたと思うが、アレが考え得る最善だった。仕方がない。

だが、それも彼にとってはどうでもいいことだろう。黒羽は苦笑する。本当に言いたいことなど、もうわかつているのだ。聞いたら彼は絶望するだろうか。それとももう、絶望しているのだろうか。表情から読み取することはできそうになかったが。恐らく両方ともありえないだろう。犯人を当てさえすれば、たとえ死んでいても勝ち。解放されるのだから。

問いは、やはり予想通りのものだった。声もやはり、冷たいものでしかなかった。

「……若菜はどこだ」

「退場してもらったよ。いの一番にね」

今にして思えば、よくうまくいったものだと思嘆を禁じえない。トリックからして思いつきり杜撰だったのだ。

最新のデジタルビデオカメラは遠隔操作が可能。それであらかじめ撮っておいた足音を再生し、何らかの理由で――殺人鬼を止めるでも、二手に分かれるでもいい――やってきた片方を、階段で待ち伏せする。後は何らかの手段で突き落とすだけだ。慌てて、敵が一人しかいない以上油断するタイミングを見計らったのだ。とはいえ、本当にうまくいったものだ。苦笑するしかない。拙すぎだ。

その苦笑を、黒羽は彼に向けた。やはり、彼は無表情だった。絶望したのかもしれない。死に至る病。絶望をそう説いたのは誰だったか。霞み始めた思考では、もう思い出すこともできなかったが。

「そんなことよりもさ。君にはやるべきことがあるんじゃないかな、メイタンテイ？ タイムリミットは確かにないけど、こんなところ

にいるのも退屈だろう？」

「……そうだな」

同意の声に、覇気が簞る。それはある種、隠していた怒りと憎しみと闘争心の発露でもあった。燃え滾るのか冷え切っているのか、心境はわからないが。たぶん心は冷静で、感情は熱血色なのだろうと思った。どちらにしろ、ここで怒りのまま襲われたらひとたまりもない。何しろ、血が足りてない。

まあ、そんなことなどどうでもよくて。彼はとうとうと語り始めた。

「死体は誰が殺したものだったのか。何でお前が死体を見ても慌てなかったか。何であの時はぐれたのか。ヒントの意味。何であの時彼女と別れたのか。既に死んでいた四人の死体。お前が殺した五人目。そして消えていった二人と一つ……考えれば、わかるはずだったんだ」

ある種、一夜限りの走馬灯でもあった。何があって、何が起って。何を騙して、何を偽ったのか。ヒントの意味。あからさまだ。何もかもがあからさま過ぎて、気づかないはずがない。苦笑を消すことはできなかった。苦笑を消す意味もなかった。

「まず、死体については何も言えない。一つわかっているのは、その犯行時間が俺たちが目覚めるよりも早い時期だったということだ。殺人鬼はその後、俺たちと何食わぬ顔で合流した。そして、何食わぬ顔でメールを送った。悪魔なら電波なんて無視できるだろう」

彼は笑わない。無表情。能面のように。それはいつそ、この闇に一番よく似合う表情でもあった。感情はそのまま色を持つ。黒色は、何もない色。

だからこそ、無表情はこの闇によく映えた。

「足音で錯覚した。最初に俺たちが逃げ出したとき。教室で聞いた殺人鬼の足音。アレだって、さっきのトリックが使えるんだ。ビデオカメラの遠隔操作。殺人鬼がいることを集団の中にいるうちに示しておけば、自分が疑われることもない。あの叫び声だって、録音

しとけばどうにでもなる」

「答え合わせは最後にしよう。次」

「そして一階ではぐれた。あの時の理由は簡単だ……恐怖を煽るため。教室に隠れた俺たちを、お前は足音で煽ったんだ。殺人鬼の足音として。お前と一緒にいた彼女が教えてくれたよ。お前らは職員室――昇降口のほうへ向かったと。俺たちは、殺人鬼がそっちに向かったんだと思ってた。だから、ずっと沈黙して耐えた。そして、死体を見つけた。殺人鬼の恐怖と死体の恐怖を、お前は同時に俺たちに味わせたんだ」

苦笑。少しくらい怒りに身を震わせるかと身構えたが、彼は予想に反して無表情のままだった。

「職員室のガラスを割ったこと。これも同じだ。突然の音は恐怖を呼ぶ。現に、五人目が悲鳴を上げた。マスターキーがなかったというのも嘘だ。お前は、化学準備室に入ったと証言している」

「そうだね。それで？」

「ヒントだ。アレの意味をずっと考えてた。悪魔は嘘つきで、偽っている。何を偽ったのか？ それは自分の身分だ。悪魔は自分の身分を偽って、生徒に化けていた。そしてヒントのトータル。アレも嘘だ。わざと嘘をついて、お前は情報を攪乱させた」

無言のまま、先を促す。

「蛍光灯を割って、彼女からはぐれた理由。はぐれたければ彼女を殺せばよかったのに、お前はそれをしなかった……殺すよりも、利用することに重みを置いたからだ」

「それは？」

「彼女は言うなれば、お前の信者だった。つまり、彼女がいれば、お前が疑われてもそれを否定してくれる。お前にとっての味方だったのさ。だから殺すわけにはいかなかった。だから、その間にはぐれて行動している人間を殺すことにした……そして、五人目だ」

もう先を促す必要はないだろう。苦笑も無理やり消すことにする。無表情で睨みあう。それは永遠ともいえそうなくらいには、長い時

間だったような気がした。実際は一分にも、三十秒にも満たなかっただろうが。

「アレがお前の最高の失敗だった。俺たちが合流したことを、お前は知らなかった。だから、最低のタイミングで五人目を殺してしまった。あの時、俺たちは全員放送室にいたんだ……お前しか、彼女は殺せない」

殺せない。確かにその通りだった。あの時彼女を殺せたのは自分だけだった。彼らが放送室にいたことは知っていたが。別段それを指摘する必要はないだろう。あったとしても、最後でいい。

「あとは、ビデオカメラのトリックとクロロホルムで十分だ。一人ずつ、一人ずつお前は殺していった。一人になった人間を……！」
声に、初めて感情が宿る。叫びほど強くはなく、囁きというほどに弱くなく。それは、地獄の業火を人の身に押し込めたような激情だった。

憎悪。殺意。敵愾心。それら全てを、その声に込めて。

彼は、それでも無表情のまま呟いた。

「お前が、殺人鬼だ」

それが、彼にとっての答え。

ずっと待っていた。その答えを。待ち焦がれたと言ってもいい。笑い出したくなるほどに、その答えが欲しかった。そのために動いたのだ。そう言われるために画策したのだ。文字通り、血を流すほどの努力をして。その答えだけを、ただずっと待っていた。

だから、笑う。凄惨に。

嘲笑もなく、哄笑もなく。

三日月に瞳を細めて。

「さすがだね、メイタンテイ。名前の通り、そして僕の期待通りだ。先に礼を言っておくよ……ありがとうとね」

血の味のする唇を、ゆっくりと動かした。

「事態はもっと単純なんだよ、迷探偵。君は迷いすぎだ」

「……まあ、迷ってくれるように動いたのは僕なんだけどさ。そういう意味では謝るべきなのかもね」

笑う。その行為すら億劫だった。それでも事態は自分の思い描いたとおりに進行した。ならば笑うべきなのだ。人目をはばかることなく。勘違いを恐れることなく。

彼は無言だった。表情には憎悪。今度こそ、彼は無表情ではいられなかったらしい。それを責める気にはなれなかった。責める意味もない。

数秒の沈黙。破ったのは彼だった。

「もう、お前しかないんだ。嘘をつくなら無駄だ……殺人鬼」

「別に、嘘を言おうなんて思っちゃいないよ。この際きっぱり宣言しとこう……僕は、殺人鬼でも悪魔でもない」

そう思わせるように尽力したのは事実だが。それもそうしなければならぬ理由があったのだ。彼が納得してくれるかどうか。それが問題ではあったが。

とにもかくにも話さなければ始まらない。苦笑をため息に変えて、黒羽は暗鬱に呟いた。いつ彼がぶちぎれるかわかったものじゃない。弾薬庫で花火大会でもしているような気分だった。

「それじゃ、答え合わせというか……ま、死体については後にしよう。アレは本当にどうしようもないから。一人目の自殺者と、足音についても後回し。はぐれた理由は……まあ、そうだね。あの頃はまだ殺人鬼の存在が不確かだったからかな。間違っても、恐怖を与えるためじゃない。第一、君がどこに隠れるかわかってなければ、死体なんか置けないじゃないか。未来予知なんかできないよ僕は」

「……職員室のガラスは」

「それか。職員室の中にいるかもしれない誰かへの牽制のためだよ。こっそり忍び込んだらグサ、何て洒落にもならない。間違っても、やっぱり恐怖を誘うためじゃないよ？　というか、あの悲鳴はむしろ予想外だったんだ」

実際、五人目には本当に悪いことをしたと思う。本当に予想外だった。

「マスターキーは」

「ああ、アレは五人目が持ってた。包丁持ち出しに行ってたらしいね、どうも。本当にイレギュラーだった……というか、彼女の行動全部が完璧にイレギュラーだったんだな。後輩からはぐれた理由の一つも、実は彼女だったりする」

「……殺すためにか」

「だから、違うってば。彼女に一人ではぐれられてると、いろいろ迷惑だったんだよ。状況把握できないし、何しでかすかわからなかったし。本当は協力してもらおうと思ったんだけどね……ああ、他の理由は、君たちに後輩のお守り押し付けようと思ったんだよ。やっぱり一人だと心配だからね。だから、蛍光灯割って叫んでみた。来てくれた時は思わず頭下げようか迷ったよ。本当にね」

結局五人目の彼女は見つからず、空回りもいいとこだった。しかも拳句の果てに、危惧していた通りに殺人未遂。冗談でも笑えない。まあ、そんなことはどうでもいい。

「さて、順序は変えたけど、ヒントについて。これも実は、全部嘘なんかじゃないんだ。このゲームに参加している総数は九人。あの時の存命者は五名。で、猫……殺人鬼は被害者の中に。そして悪魔は偽っている。君も惜しいところまではいつてるんだけどね。悪魔がこのゲームに参加している人間の中にいるっていうのは、悪くない」

「……だが、人数が合わないぞ。少なくとも、十人はいた。ヒントは……」

図書館前に転がっていた、ネクタイのない死体。あれのことを言っているのだろう。

「間違っていないよ。全てが言葉の通りさ」

だが、黒羽はそれを平然と否定する。彼の怒気も殺気も消えてはいないが、そこにわずかの動揺が浮かぶ。

「ここで、ようやく強奪品が役に立つわけだ。カフスボタン、ネクタイ、校章、ブレザー。奪われたものは四つ。死人もヒントの通りなら四人」

実際うまくやったものだと思う。苦笑している間に、彼は動揺を生めるように目を細めて、言ってきた。

「……何故、略奪品を全て知っている？」

「ああ、それか。簡単だよ。君の答えは半分当たっている」
「……？」

「君たちが目覚めるよりも早く、僕が起きたってことだよ。放送室の時計、うるさかっただろ？　僕は最初、あそこにいたんだ。だから、君たちよりも早く死体を見つけてたわけで。二度見たもので驚くのも無理だったって話だよ」

そこでため息を一つ。もう眠ってしまいたい。本当に血が足りていない。そろそろ限界が近い。ここで語るのをやめたらどうなるだろうか――どうにもならないだろう。それに苦笑して、黒羽はかろうじて動く左手を広げた。

「さあ、考えよう。ヒントは全て正しいとして。トータル九名。存命していた『参加者』は五名。『死体』は四つ。悪魔は何かを偽っていて、強奪品も四つ。そして現れた、存在してはならない『六人目』……」

実は本当に単純なのだ。悪魔が騙し屋で、でもヒントは正しくて。現れちゃいけなかった六人目。言葉の妙。陰気で悪魔らしいミスリード。

答えは、あまりにも間抜けに過ぎた。

「『六人目』は、生きていたんだよ。悪魔だったんだ……いや、死体は全員生きた悪魔だったと考えるほうが自然かな。俗に言うサクラって奴だよ。で、自分で勝手に動いて死体ごっこ続行。そりゃ増えたように感じるさ。死体が動くなんて、普通考えないもん」

自分は殺されたのだと偽って。でも、それを公表して。悪魔は正直者だった。黒羽よりも正直者だった。

「無理がある。そんなの、顔を見れば……」

「君ね。意外に往生際が悪い。だったらその死んだ奴らの顔、思い出せる？　僕は思い出せないよ。最初の自殺者でさえ、ね。あの時僕は言ったはずだよ？　顔を見ても、すぐに忘れちゃいそうだと」

事実その通りなのだ。まったく覚えていない。彼もその通りだったのか、数秒呆然としていたようだった。が、それも悪魔ならではだろう。勝手にゲームに招待する連中だ。人の記憶に残らなくすることができても、問題はないだろう。

「というわけで、死体は全員悪魔だった。ヒントの意味、悪魔は偽っている。これは、自分を死体だと偽っていたということなのさ……んで、最初に勘違いした足音と叫びについて。足音は五人目だけど、叫んだのは……というか、叫べたのは悪魔だけだよ」

それが何を意味するのか。もう考えなくてもわかる。誰も死んでいない。誰も殺されてなどいない。苦笑する。

これはゲームだった。文字通り、寸分違うことなく。

「殺人鬼なんか、どこにもいなかったんだ。悪魔は、僕らを絶望させることができればそれでよかったんだよ」

絶望は死に至る。答えのない闇。殺されれば永遠の苦痛。姿を見せず、ただ増えていく死体。理解できないヒント。発狂する参加者。そうして少しずつ、参加者を絶望に追い込んでいく。これはそういうゲームだったのだ。

悪魔は、騙す側のプレイヤー。自分たちは、その嘘を暴く挑戦者。猫はネズミの中に。あのヒントはそこで止められていた。その後続く言葉は、『いる』でも『いない』でもいいのだ。言葉を濁すのは、詐欺でも定番なのだから。

答えに彼は何を思うのか。沈黙は長かった。いや、短かったのかもしれない。

「……ここで納得できれば、ハッピーエンドだったんだろうな」

声は、予想通りに冷たかった。或いは悲しげだったのかもしれない。彼の表情を見る気はしなかった。感情は断絶されている。言葉

は届かない。

「もし仮にそうだとしても……お前は五人目を殺したんだ。それだけは、嘘になんてならない。お前は……お前は、殺人鬼だ」

それが答え。彼にとつての、否定などできない答え。それは仕方のないことだった。真実は一人一つ。それか自分で考えたことだ。口にしないとも、それだけは変えようのない事実……

だったら、それこそバッドエンドで終わるのだが。

「五人目は死んじやいないよ」

——だってアレ、気絶してただけだもん。

「……は？」

「いや、は？　じゃなくてさ。気絶してただけなんだって、アレ」
この期に及んで言い逃れをしようとしているのか。それとも本気でそう言っているのか。ふざけているのかもしれない。座ったままの男はどこか苦しそうな顔で、それでも苦笑していた。

「ふざけるのもいい加減にしろよ。いいか、五人目は血を噴出して死んでたんだ。出血多量だ。生きてるはずがないんだよ」

アレは確かに死んでいた。血の海に沈んで、まったくピクリとも動かなかったのだ。アレが死んでいなくて、何だというのだ。

「んじゃ、逆に聞けどさ……」

が、男は苦笑を消さない。問いかけは、闇の中を反響せず、静かに耳に届いて消えた。

「君、人間がどれだけ出血すれば死ぬか、わかる？」

「……そんなわけ、ないだろ」

知るはずがない。ただ、大量の血液を失えばとしかわからない。具体的な量を聞かれても、そんなのわかる人は——少なくとも高校生には——いないはずだ。

答えに満足したのか、男は頷く。

「だよね。でも、君は死んだと思い込んだ。殺人事件といえば死体で、死体といえば血だ……ま、悪魔・死体バージョンは、逆に出血がどこにもなかったんだけどさ」

言われて思い出す。校章を奪われて死んでいた、あの死体。証拠を探すばかりに気を取られて、気づかなかった。確かに、出血がなかったのだ。首を切られて死んだのなら、それはあってしかるべきもののはずだった。呆然とする。今まで何故それに気づかなかったのか。

こちらの反応をどう取ったのかはわからない。だが、男はさつきからずっと苦笑したままだった。

「ま、今度はそれと逆をやってみたわけだよ。僕が殺人鬼を演じるのに必要だったからね」

「……何を、したって？」

問いかける。それは聞かねばならないことのはずだった。男が殺人鬼でないというのなら。そう錯覚させるほどの大事をしているはずなのだ。男は何も答えない。ただ、ゆっくりと自分の右手首に手を伸ばす。闇の中、それを凝視した。赤いハンカチ。何かに濡れているように見える、赤いハンカチ……

傷。

「……！」

その一瞬で理解した。右の手首。挟まれたように一閃。大きな大きな傷の跡。どろりと、固まりかけた血が漏れていた。赤いハンカチ。白と赤で、斑模様を形成している。

そのハンカチを手首に巻き戻しながら、男は辛そうに息を吐いた。「ま、これでわかってもらえたと思うけどさ。五人目が沈んでいた血の海は、あくまで僕の血だよ。僕が殺人鬼っぽく見せるために、必要だったんだ……信じられないかい？」

答えられない。そんなことをする必要があったのか。何故そんなことをしたのか。それをするためにどれくらいの覚悟が必要なのか。

わからない。ただ、うろたえた瞳で男を見た。男はこちらの反応をどう取ったのだろうか。男は自分の足元を左手で指差して、つまらなそうに呟いてくる。

「信じられないのなら、ここに置いてあるビデオカメラを見るといい。僕の行動が全て撮影されている……実を言えばこれ、暗闇でも撮影可能な代物だね。リモコン操作も可能で、実はすごい便利だったりする。闇の中、携帯がなくても歩けるくらいには、ね」

そんなことなどどうでもいい。ビデオカメラで撮影。それが意味することに、柳は気づいてしまった。気づいてしまったからこそ、理解できなかった。

この男は。

——この男は、初めから自分が疑われてもいいように保険をかけていたのだ。

それはつまり、最初から自分が殺人鬼を演じるつもりだったということ。殺人鬼を演じて、最後の最後にネタ晴らしをするつもりだったということ。理解できない。理解できなかった。

「何故……!?!」

問いかける。声は予想以上に強く辺りに響いた。それに男は目を丸くする。苦笑はそのままに、男は肩をすくめたようだった。

「何故って、そうしなきゃ疑われた時に罪を晴らせないでしょうが。一人で行動したほうが気楽だったしね。ま、我ながら妙案だったと

——」

「違う! そんなことが聞きたいんじゃない!」

見当違いもいいところだ。自分が何をしでかしたのかわかっていないのか。男は今度はポカンとする。それに苛立ちを感じて、柳は声を荒らげた。

「そんなことしなくても、全てがわかったならその瞬間に俺たちに言いに来ればよかっただろうが! わざわざ殺人鬼装って他人を嘲って、不安を煽って! 何のために、そんなことをしたんだ!?!」

意味がない。本当に意味がない。答えがわかったのならば教えれ

ばいいのだ。殺人鬼のフリをして何かをする意味なんてどこにもない。そのために自分の手首を切って。何がしたかったのか、本気で理解できなかった。

「ああ、それか……いや、本当はそうするのが遅かったくらいなんだよ」

が、彼は笑うだけだった。疲れきった顔で――それでも、どこか安らかそうに。

「五人目は君たちを殺そうとしていた。その理由は知っているかい？」

それは突然の問いかけだった。だが、知っている。殺さなければ殺されると呟いていた。

「殺されたくないから、全員を殺そうとした……」

「それってつまりさ、殺人鬼が誰かわかっていないから、全員殺して安全になろうとしたってことだろう？　僕は、それを避けたかったんだよ」

粒いてから、男はため息をつく。数秒の間。それだけの時間でも、理解するには十分だった。

「殺人鬼のフリをして、居ない殺人鬼の代わりの標的になろうとしていたのか」

「正解だよ。それが一番簡単だったからね……とはいえ、実はもう一つ別の方法があったりもした……というか、こっちのほうが正規だったのかな」

「別の方法？」

繰り返すと、男は満足そうに頷く。

「僕が殺人鬼になる方法。皆殺して『僕が殺人鬼だ』って言いながら外に出たら、それで皆解放でしょ？　ていう、とんでもなく簡単で最低な方法」

そのまま笑顔で、サラリととんでもないことを言ってきた。思わず絶句する。

殺人鬼を当てるのではなく、殺人鬼になる。それは確かにこの上

なく簡単で、これ以上ないほどに最低な方法だった。確かにその方法なら外に出られただろう。悪魔のヒントを思い出す。猫はネズミの中に。

猫はネズミの中にいる。もしあのヒントがそう続いていたのだとしたら……確かに、男の言う方法が正規だったのだろう。

「……なんでそっちを選ばなかったんだ？」

自分が傷つくくらいならと、そっちを選ぶ人間も多いはずだ。それなら、勝利を確実につかめる。後者の理由で男がこの方法を取ったとしても、不自然には思えなかった。

男はそれに露骨に顔をしかめて、つまらなそうに言うてくる。

「めんどくさいじゃん。悪魔に寄せられるのも癪だったし」

「悪魔に？」

「ヒント。悪魔は猫と戯れたい」

また言われて思い出した。あの意味のわからない文。殺人鬼がないのに、戯れたいという言葉の意味。今なら、何となく理解できるような気がした。男が笑う。

「殺人鬼と会話したかったんだろうね、たぶん。今どんな気持ち？とか何とか言ってさ。からかいたかったのかもね。その時に真実知ったら、僕でも発狂しそうだけどね。ま、僕も悪魔には会ってみたかったかなー」

「……そうかい」

どっちにしろ、話はそれで終わりらしい。左手で、隣の闇――外を指差し、言うてくる。

「それじゃ、そろそろ帰ろうか。僕らの勝ちで」

「……そうだな」

それで何もかも終わりだった。男はいはずって闇の外へと出て行く。立ち上がる余力もなかったのか、それとも単に起き上がるのがめんどくさかったのか。案外後者だったのかもしれない。どちらにしろ、はいずる音もすぐ聞こえなくなった。

「……………」

闇の中、一人取り残されて。柳は背後を振り向いた。

今まで自分を嘲っていた闇。恐怖を煽り続けた黒色。悪魔が作り出したもの。

これはゲーム。悪魔との騙しあい。結局、殺人鬼なんていなかった。気づけなかった真実も、わかってしまえばあまりにも呆気ない。それが真実だったのかどうか、確かめる術はなかったとしても。

まあ、もう終わりなのだ。柳は闇に背を向ける。そして闇の外へと歩き出す。背後に人の気配があった。もう、振り向く意味もない。だから、柳は振り返らずに吐き捨てた。

「あばよ、クソツタレ」

それで終わりだった。闇の外。解放の感覚。夢が開けていく感覚。面白かったよと、誰かの声を聞いた気がした。

エピローグ

カチ、コチ、カチ、コチ、カチ、コチ、カチ……

「……んが」

とりあえず、うるさい。古時計に起こされるようにして、黒羽は目を開いた。明るい放送室。機材と撮影機材と電話と古時計の置いてある小さな部屋。電話の置かれた机に突っ伏している自分。どうやら、眠りこけていたらしい。今は何時だろうかと携帯を開く。

十二時五十九分。嫌な数字の羅列だった。

「先輩、なにやってんすかー？」

聞き覚えのある男の声が鼓膜を振るわせる。声のほうを向くと、同じ放送委員の一年がつまらなそうに機材の前でパイプイスに座っていた。少しずつ思考が夢から離れていく——電話番号が黒羽の役目で、アナウンスは後輩の役目だ。だから、彼は眠れない。

つまらなそうではなく、羨ましそうだったかもしれない。

「んー……ちよつとね。夢を見てたらしい」

家のベッドで見た夢だと思っていたが、どうやら学校で見た夢だったらしい。記憶の齟齬が発生してるが、まあ、気にする必要もないだろう。ただの夢だったのだ。なかなか生々しい夢だったが、今となっては思い出だ。

「夢見てた？ ってことは寝てたんすか先輩？」

「いえすざつづらいと」

英語で答えてみる。と、後輩は迷わずブーイングを飛ばしてきた。

「死ね。人が働いてる最中に寝やがって。死ね」

ため息をつく。なんとも口の悪い後輩だ。あの後輩とは段違いすぎて泣けてくる。

「たまには変わってくださいよ、こつちと。俺も昼寝してえ」

「えー？ いいじゃん別に。電話番号って先生の小言受ける仕事でもあるんだよ？」

実際グチグチ言われるのだ、電話番号。お前授業に集中してねーだろとか、人の話を聞けとか何とか。だからあんまり電話番号は好きではなかった。

「そりゃアンタだけですって。俺は品行方正に生きてますから、小言なんか受けません」

後輩は胸を張ってそう宣言する。まあ、実際品行方正なんて他人の判断することだ。自分で言うのもおこがましい。これもある種の小言なので、平然と聞き流す。

午後の授業の始まりは一時半からだ。三十分の暇がある。なら、寝るのが最適だろう。そういうことで、黒羽はもう一度寝ることにした。

と、それを妨害するように後輩の声。

「あー、そういや品行方正で思い出しました。先輩先輩。ちよつと愚痴聞いてくださいよ」

「……なしてー？」

「愚痴に意味なんてあるわけないじゃないっすか。単にちよつとこう……こう、イラッと来たとでもいうか。まあ、いいじゃないっすか。別に減るもんあるわけじゃないんですし」

「僕の睡眠時間が減るよ」

言った瞬間、後輩は耳を塞ぐ。どうやら、何があっても聞けということのようなだった。仕方ないからため息をつく。それを肯定と見て、後輩はべらべらと喋り始めた。

「うちのクラスに柳と若菜っつー、『バ』がつくカップルがいるんですけどね？ そいつらが今日、仲良く早退しやがったんですよ。何でも、今日オープンするカフェに行くんだとか何とか！ 学校サボってっすよ！？」

「……いいんじゃないの？」

若い頃なんてそんなものだろう。若気の至りという奴だ。そういうのが悪夢も含めて思い出となるのである……ふと思う。物は魂が宿った瞬間から歳を数え始めるべきなのだろうか。それともやはり

作られたときからか。

と、判断が出るよりも早く、後輩の罵声。

「何言ってるんすか!? デートですよデート!? 学校サボって、デートですよ!? うらやま……じゃない、けしからんわけですよ! 高校生が昼頃から二人きりで……ああああああつあああ!」

後半はもはやなにやら手をじたばた振っているが、何かのジェスチャーだろうか。まあ、無視してもいいだろう。

それにしても、柳と若菜。聞いたことのある名前だった。あまり聞いたことがないのか、この上なくうろ覚えだが。何となく、知り合いのような気はする。まあ、だからなんだと言うだけの話だ。どうせ夢の話なのだし。

と——携帯がメールを受信する。後輩の戯言はなおも続いていたようだったが、どうでもいいので無視をして、黒羽はメールを確認した。

「……へえ?」

「……ん? 先輩、どうかしたんすか?」

「いや、別に。夢って現実に干渉して来るんだなって感嘆しただけだよ」

「へ?」

「ま、どうでもいいことさ」

適当に呟いて、手をぶらぶら振って何でもないとか図する。後輩は怪訝を浮かべたままだったが、そのまま機材へと視線を戻していた。それを確認してから、もう一度メールを見る。

送信者の名前は『悪魔』だった。くだらない悪戯メール。題名には、『勝者に敬意を表して』と書かれていた。

——望みを一つ。勝者のために叶えよう。

それが本文。チェーンメールなみに陳腐な本文だった。まあ、リスクを背負ったからには何かしらのリターンがなければやってられないが。返信すれば願いを叶えてくれるのだろうか。そこら辺の詳細

しいことは書かれていなかった。

ふと困る。願いたい事なんて何もないのだ。この日常を楽しんでいる自分からすれば。まあ、だから悪魔には悪いがしばらく放置することにした。願いに有効期限はない。ふらっと思いついたときに使えばいいだろう。

結局、夢だったのか現実だったのか。それとも手の込んだ誰かの悪戯だったのか。答えを出す必要があるのかないのか。まあ、どうでもいいことだ。時間戦争や電波戦争、果ては人と物との究極の戦い、無機物戦争なみにどうでもいい……と。

「あ、そうじゃん」

それがあった。それならちょうどいいかもしれない。

「どうかしたんすか？」

「いやね、時間戦争とか電波戦争とか無機物戦争って、聞いただけでもとんでもなさそうじゃない？」

「……まーた始まった。ま、大変なんじゃないんすか？ 無機物全部敵って、人間は何使って戦えって話ですよ」

「だよねー。んじゃ、起こらないように願うときですか」

さっさと携帯いじって、悪魔にメール送信。これで地球は平和になったのだ……

と。ボケツとしている間に後輩の声。机の上の校内電話を指差して、一言。

「先輩。電話鳴ってますけど」

規則正しいコール音。振り子時計の音を静寂を強調する音というのなら、これはまさに静寂をぶち壊す音だった。呻く。

「……オーケー。交代しない？」

「死んでもお断りします」

あっかんべーされた。仕方がないから泣く泣く受話器を取る。聞こえてきたのは、男っぽい口調の女性の声だった。

「おーい、黒羽いるかー？」

「いません」

「オーケー、いるな。ならいい」

国語科の葵先生の声だった。この先生の話は時々嫌というほど長くなる。かといえ、稀にものすごい単刀直入だったりする。だからあんまり好きじゃなかった。

今回は単刀直入のほうだったらしい。先生は、開口一番とんでもないことを言い放つ。

「なあアンタ。最近女泣かせたりした？」

わけがわからずにポカンとする。聞こえていたのか、後輩もポカンとしていた。呻く。

「……あのですね、先生。まったく心当たりがないんですが」

「だよなー。黒羽だもんなー。なあ、本当にこいつか？ 灰乃 黒羽だぞ？」

嫌な同意のされ方だった。後半は誰かとの会話だったようだが――とりあえず、それに聞き耳を立ててみる。といっても、途中から受話器を遠ざけたのか、声はほとんど聞こえてこなかった。仕方がないから数秒待つ。

「やっぱりアンタだって。いつの間にアタシの生徒に手だしたのよアンタ」

容疑が確定したらしい。が、やっぱり心当たりはまったくなかった。

「いやいやいやいや、ちよっと待ってください」

「何よ、ちよっとって」

特に意味のない言葉である。というか造語だ。だから適当にでっち上げる。

「いや、思いつきり待ってって意味にしといてください。まず心当たりがですね」

が、こちらの言い分などまるで聞く気もなく。先生はきっぱりと何かを宣言するように一言呟いてきた。

「ハンカチ」

「はい？」

「だから、ハンカチ。その子曰く、アンタに貸したんだってさ」

「……………」

「何か、それなのにひどい扱いされたって怒ってるんだけど。ハンカチのことなのか自分のことなのかは知らないけど」

一瞬ドキリとする。白いハンカチ。赤いハンカチ。そういえばそんなものがあつたような気がしないでもない。慌てて自分の身の回りを確認する。

あつた。机の上。白色のハンカチ。見覚えのあるものだった。中には一枚、小さなメモ。

メモ曰く、『くやしいから、最後っ屁。悪魔より』。

「……いや。いやいやいやいや」

意味がわからない。どういう意味だ。何でハンカチを彼女から奪ってここに置いていくことが最後っ屁になるのだ。わけがわからない。

が、とりあえず確かめねばならないだろう。本当に彼女が彼女なのか。

「先生。とりあえずこう言ってみてください」

「あん？」

「化石」

呟いてから、しまったと思う。嫌な予感ほ、繰り返した先生の声で膨れ上がった。

「化石？ ……あ、おい！」

と、受話器から悲鳴じみた声。嫌な予感が十倍に増した。

「……先生？ 何かおありでござんしたか？」

「いや、何かも何も。その生徒の名前、橙香っつーんだけどな？」

赤桐 橙香

爆弾発言だった。完璧に確定。

そして、死刑宣告だった。

「そっち行ったぞ？」

「……マジで？」

「マジで。すんげー怒ってた。死んでも事情説明させるとか何とか。ま、後で話し聞かせてもらうから、よろしく」

あっけらかんとそれだけ呟いて。ガチャリと音が鳴る。電話切ったんだろうなと理解できたのは、たぶん十秒位してからだった。即座に思考する。怒ってる。死んでも事情説明。それが面倒だからクロロホルム使ったのに。死んでも。ふと引っかけかりを覚えた。

（殺す気ってこと？）

「先輩ー？ 結局何だったんすか？」

結論。後輩の問いを受け流して、黒羽は暗鬱にため息をついた。急いで自分の荷物を纏めて、放送室の扉を開ける。

「ごめん。僕も早退する。後は任せた」

とりあえず礼儀程度にそう答えると、返ってきたのは後輩の恨み節だった。

「……先輩もデートつか？ 恨みますよ？ 憎みますよ？ 呪いますよおお……」

「むしろもう恨まれてる気がしないでもないけど……ま、そういうわけで」

闇のない廊下を、ハンカチ片手に走り出す。手のひらの傷も、手首の痕もない。一夜の夢。終わった悪夢の、その続き。悪魔のことはもうどうでもいいが。

いや、よくないけども。

「夢のままで終わらしてくれたら、楽だったのにねえ……」

安穩と呟いて。

黒羽は悲鳴を上げたい気分で、ネズミよろしく逃げ出した。

エピソード（後書き）

……まあ、アレですね。稚拙、というか。とりあえずごろごろ出てくる誤字脱字についてはご容赦をば（

後書きを書きなれてないんでこれ以上何を書けばいいのかわかりません。というか、後書き書くのなんて初めてです。訳がわかりません。

えー……まあ、最後まで読んでいただき、ありがとうございますとしか筆者は言えませんが、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0353p/>

幻夢の夜にネズミは踊る。

2011年1月24日22時40分発行